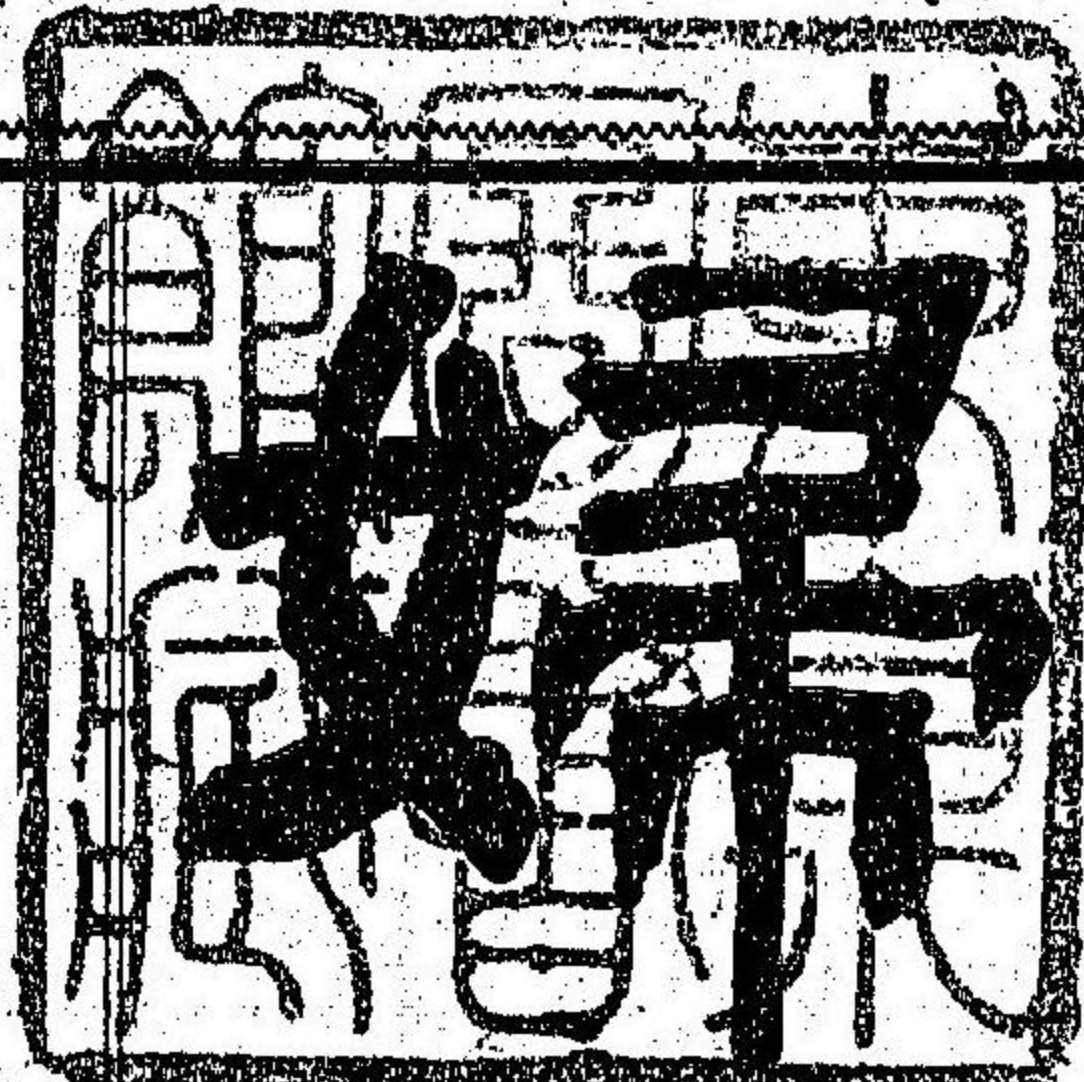


56-11

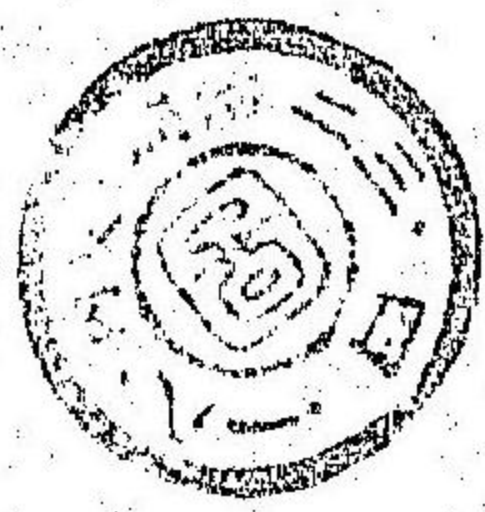
√2 2750 / 23



吉田顯三講述

婦人病論

講述者藏版



緒言

一本書ハ「ヒウイット」氏「バアンス」氏「ハルト」氏及「フリツチ」氏等ノ著書
其他「ガラピン」氏ノ編輯ニ係ル産科婦人科「サイクロピア」ニ就キ
實際ニ切要ナル諸論ヲ採萃シテ之ヲ基本トシ加フルニ余ガ年来
歴驗上得タル所ノ鄙見ヲ以テシ家塾ニ於テ講述シタル者ニ係ル
一本書ヲ大別シテ九章トス曰ク婦人病診察法曰ク外陰部ノ疾病曰
ク腔ノ疾病曰ク膀胱及尿道ノ疾病曰ク子宮ノ疾病曰ク喇叭管副
卵巢廣勒帶及圓勒帶ノ疾病曰ク卵巢ノ疾病曰ク骨盤腹膜及蜂窠
織ノ疾病曰ク月經違常及「バツテイ」氏手術是ナリ而シテ生殖器ノ
構造月經ノ生理其他妊娠及ヒ分娩ニ關係アル諸病ノ如キハ余ガ
曩ニ刊行セシ所ノ産科學ニ其大要ヲ載セタルヲ以テ本書ニ之ヲ
省ク

一書中ニ載ル所ノ各生殖器疾病ニ就テハ先ツ總論ヲ掲ケ次テ畸形、
 新生物及ヒ炎症等ニ及フヲ例トナスト雖モ或ハ然ラサル者アリ
 又各病ニ就テハ先ツ病理解剖及ヒ原因ヲ論シ次テ徵候、鑑別、豫後、
 轉歸及ヒ治法ヲ述フルヲ例トナセモ亦必スシモ此例ニ據ラス以
 上ノ諸目ヲ略記セシ者アリ要スルニ繁ヲ省キ要ヲ摘ムノ意ニ出
 ルノミ

一書中ニ挿入スル所ノ圖畫ハ百三十八個ニシテ精ナル者アリ粗ナ
 ル者アリ符號ヲ附スル者アリ或ハ附セサル者アリ其體裁頗ル整
 然タラサレモ是レ諸種各異ノ原書ヨリ採取セシニ因ル

一書中ニ記スル所ノ解剖的及ヒ病理的名稱ハ勉テ前人ノ襲用スル
 所及ヒ曩ニ刊行セル産科學ニ採用セシ所ニ從フト雖モ間々或ハ
 新ニ鄙見ヲ以テ撰定セルアリ或ハ片假名ヲ以テ記スルアリ又藥
 名ハ可及的ノ日本藥局方ノ記載ニ從フト雖モ丁幾去兒及ヒ越幾斯

篤拉屈篤ノ如キハ略シテ丁幾及ヒ越幾ストシ又或ハ同藥局方中
 記載ノ藥品ナルモ從來慣用ノ舊名ヲ用ヒタル者ナキニアラス又
 尺度ハ「メートル」秤量ハ「グラム」ニ據テ記載セリ

一余ガ曩ニ家塾ニ於テ婦人病論ノ講筵ヲ開クヤ物部誠一郎氏ハ平
 素産科婦人科ノ研究ニ熱心ナルヲ以テ余ガ此舉アルヲ聞キ業務
 ノ餘暇來聽シテ余ガ講述スル所ヲ詳細ニ筆記シ講義全ク終ルノ
 後余ニ懇懇スルニ世ニ公ニスヘキヲ以テ余ヤ産科學ノ刊行ニ
 次キ之ヲ刊行スルノ意ナキニアラサリシヲ以テ大ニ同氏筆記ノ
 勞ヲ謝シ且ツ其懇懇ニ從ヒ更ニ同氏ニ托スルニ校訂ノ任ヲ以テ
 セリ同氏奮テ之ヲ諾シ既ニ校訂ニ從事シタルニ惜哉昨二十二年
 四月偶然二豎ノ侵ス所トナリ遂ニ易簣ノ不幸ニ遭遇セリ然ルニ
 岡澤貞一郎氏ハ同氏ト親睦ナリシ故ヲ以テ其素志ヲ遂ケサリシ
 ヲ嘆惜シ同氏ニ代テ校訂ノ任ヲ負擔シ遂ニ之ヲ刊行スルニ至リ

シハ余ガ大ニ満足スル所ナリ
一本書ハ講述者筆記者校訂者共ニ業務ノ餘暇ニ成ル者ナレハ遺漏
脱誤恐クハ尠カラサルヘシ閱者幸ニ之ヲ諒セヨ

明治二十三年三月

講述者識

婦人病論目次

第一章 婦人病診察法

○病歴

全上

○診察臺及手術臺

四丁

○受診ノ位置

七丁

○診察法ノ區別

十四丁

第二章 外陰部ノ疾病

八十七丁

○外陰部畸形

全上

○外陰部炎症

九十二丁

○外陰部皮膚病

九十九丁

○外陰部瘡瘡及疣贅

百丁

○「バルトリニー」氏腺囊腫

百二丁

○纖維瘤及脂肪瘤

百三丁

○象皮腫	百三
○癌腫	百四
○神經瘤	百五
○陰唇「ヘルニア」	全上
○靜脈怒張	百六
○血腫	全上
○會陰破裂	百七
第三章 膣ノ疾病	百十七
○膣閉鎖	全上
○膣炎	百廿五
○膣瘻	百三十
○膣瘤腫	百三十三
第四章 膀胱及尿道ノ疾病	百三十六

○膀胱及尿道ノ畸形	百三十六
○尿道轉位	百三十七
○尿道新生物	全上
○尿道炎	百三十八
○尿道ノ擴張及狹窄	百三十九
○尿道粘膜炎脫垂	百四十
○膀胱ノ轉位	全上
○膀胱脫	百四十一
○膀胱新生物	百四十二
○膀胱炎	百四十五
○膀胱異物及結石	百五十
○膀胱過敏	百五十二
○遺尿	全上

○尿閉

百五十三丁

○尿瘻

百五十四丁

第五章 子宮ノ疾病

百七十八丁

○子宮病總論

全 上

○子宮發育違常

百七十九丁

○子宮口閉鎖

百八十五丁

○子宮頸管狹窄

全 上

○子宮萎縮

百九十七丁

○子宮頸部肥大

二百一丁

○慢性頸管加答兒

二百十二丁

○子宮內膜炎

二百二十五丁

○子宮炎

二百四十五丁

○子宮轉位

二百五十九丁

○子宮前屈症

二百六十五丁

○子宮前轉症

二百八十四丁

○子宮後屈症

二百九十丁

○子宮後轉症

二百十八丁

○子宮脫

二百二十二丁

○子宮內翻

三百四十一丁

○子宮瘤腫

三百六十九丁

○子宮「ポリプス」

三百九十二丁

○子宮癌腫

四百七丁

第六章 喇叭管、副卵巢、圓韌帶及廣韌帶ノ疾病

四百四十四丁

○喇叭管病總論

全 上

○喇叭管畸形

四百四十六丁

○喇叭管狹窄

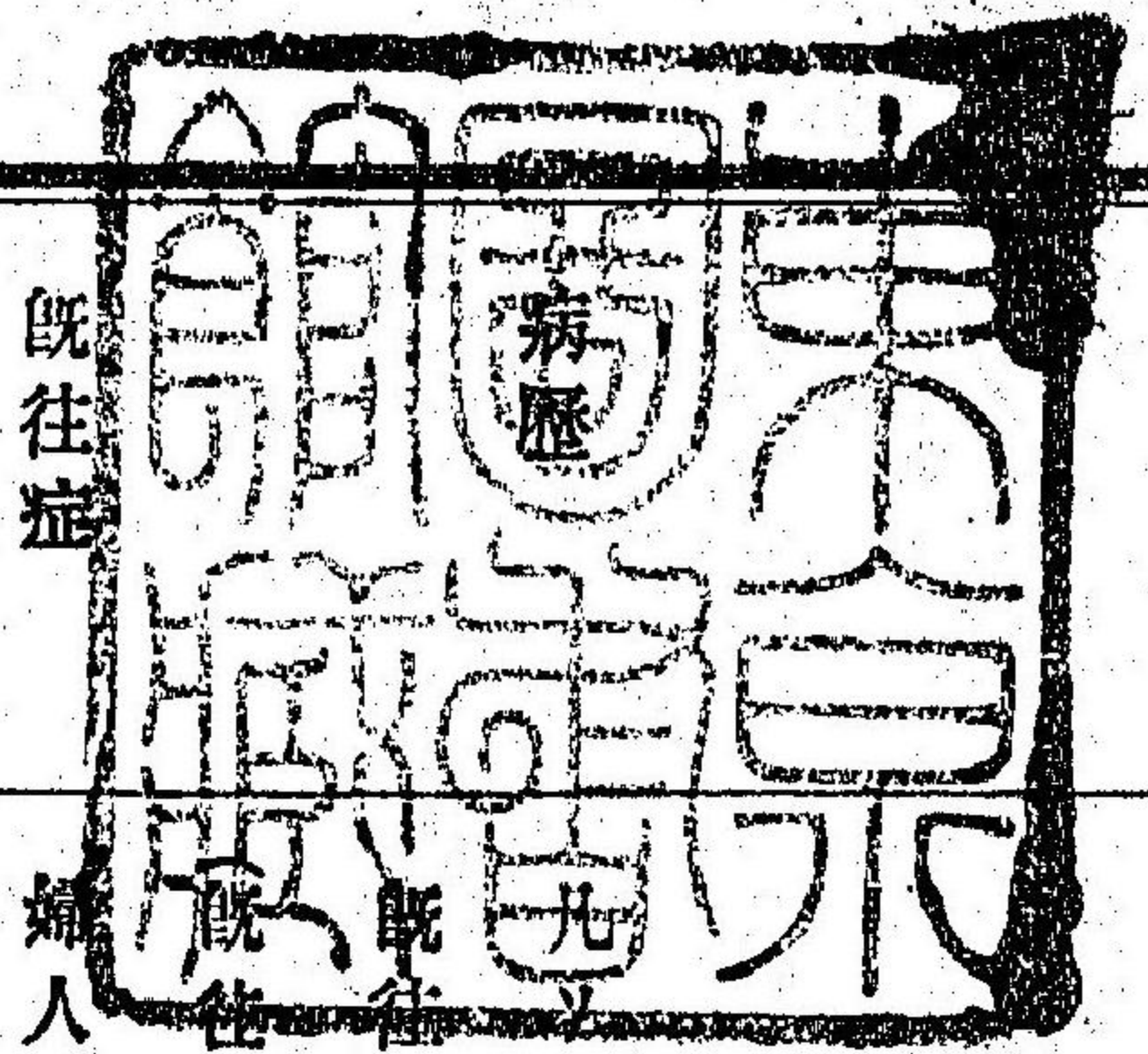
全 上

○喇叭管擴張	四百四十七丁
○喇叭管炎	上
○喇叭管水腫	四百四十八丁
○喇叭管膿瘍	四百五十一丁
○喇叭管血腫	全上
○喇叭管新生物	四百五十二丁
○喇叭管妊娠	全上
○副卵巢病	全上
○圓韌帶病	四百五十三丁
○廣韌帶病	四百五十四丁
第七章 卵巢ノ疾病	四百四十四丁
○卵巢畸形	全上
○卵巢炎	全上

婦人病論目次終

○卵巢周圍炎	四百五十七丁
○卵巢歇兒尼亞	四百五十八丁
○卵巢墜下	全上
○卵巢瘤腫	四百六十丁
第八章 骨盤腹膜及蜂窠織ノ疾病	五百三十五丁
○骨盤腹膜炎	全上
○骨盤蜂窠織炎	五百四十八丁
○骨盤血腫	五百五十八丁
第九章 月經違常及「バツテイ」氏手術	五百六十四丁
○月經違常	全上
○「バツテイ」氏手術	五百七十丁

W22750/23

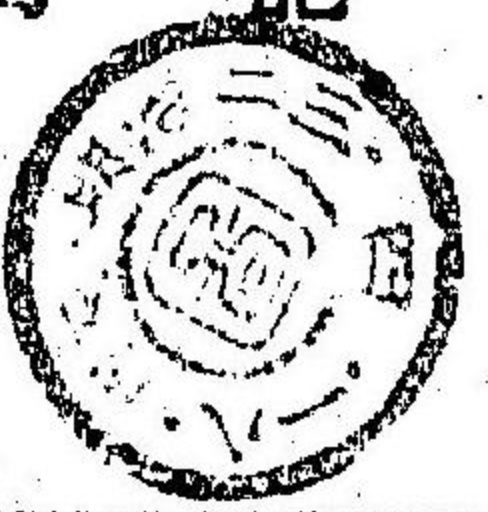


婦人病論

吉田顯三講述

物部誠一郎筆記

岡澤貞一郎校訂



第一章 婦人病診察法

○病歴

婦人病ヲ診察スルニハ一定ノ順序ニ從ハサルヘカラス即チ先ツ
既往症ヲ質シ次ニ現症ヲ審ニシ終ニ理學的檢査ヲ行フヘシ

既往症

婦人生殖器ノ疾病ハ他部ノ疾病ニ比スルニ遺傳ニ因ルト少シト雖モ
先ツ各患者ニ就テ神經病、腺病、結核、出血及ヒ癰腫殊ニ癌腫等ノ素質ア
ルヤ否ヲ審ニスルヲ緊要ナリトス少婦ニ在テハ月經ノ初至、性状及ヒ
經過等ヨリ其婚期ニ入ルノ順不順ヲ明ニシ且ツ此時期ニ發シ易キ諸

患殊ニ萎黃病ノ有無及ヒ其月經ニ及ホス所ノ結果ニ注意シ既嫁婦ニ在テハ其結婚ニ由テ起リ易キ生殖器作用ノ變常殊ニ月經ノ不調ニ着目スルヲ怠ルヘカラス又既産婦ニ在テハ既往妊娠ノ經過分娩ノ難易産褥ノ景況分娩後月經ノ狀態等ヲ質シ妊娠中若クハ分娩後ニ發シ易キ疾病ニ罹リタルヲアリヤ否ヲ訊問シ老婦ニ在テハ此等ノ事情ヲ質スノ他尙ホ月經終止ノ時期及ヒ其狀況ヲ詳ニスヘシ

(現症)

總テ婦人ノ生殖器病ハ如何ナル症候ヲ現出スルモノナルヤヲ了知セサルヘカラス是レ其症候ト理學的診查上得ル所ノ成績トノ關係ヲ見ルニ於テ甚タ緊要ナレハナリ

(一)疼痛ハ通常下腹部或ハ薦骨部ニ起リ或ハ上腹部ニ波及シ或ハ下肢ニ射達ス又利尿時或ハ便通時ニ發スルコトアリ或ハ交接時ニ發スルヲアリ

現症

疼痛

異常ノ感覺

(二)異常ノ感覺婦人ノ生殖器病ハ骨盤内ニ壓重或ハ内臟墜下ノ感ヲ發スルノ外神經痛知覺異常及ヒ下肢攣痛ヲ起シ易シ是レ疾病ノ爲ニ薦骨神經叢或ハ腰神經叢ノ刺戟セラル、ニ因ル

月經異常

(三)月經異常其狀一ナラス時期ヲ違フ者アリ性狀ヲ變スル者アリ或ハ經過ヲ異ニシ或ハ分量ヲ均フセス其他疼痛ヲ兼ヌルヲ亦之レアリ

排泄物

(四)排泄物即帶下月經期外ニ生殖器ニ痛楚ヲ覺ヘ兼テ粘液血液膿汁若クハ水樣液ヲ漏出スルヲ甚タ多シ時トシテハ此等ノ液体ト共ニ固形體ヲ排泄スルヲアリ例之脫離セル「ポリプス」及ヒ凝固セル纖維素等ヲ排出スルヲアルカ如シ

尿器ノ變常

(五)尿器ノ變常婦人生殖器病ハ直ニ膀胱或ハ尿道ニ蔓延シ或ハ器械的ニ之ヲ壓迫シテ利尿ニ種々ノ變常ヲ致スヲアリ例之尿意頻數或ハ利尿困難ヲ起スカ如シ

直腸ノ變常

(六)直腸ノ變常前項ニ示スカ如キ疾病ノ蔓延或ハ器械的ノ壓迫ニ由テ

反射的徴候

直腸ニモ種々ノ異常ヲ來ス₁アリ例之便通困難及ヒ痔核ヲ起スカ如シ

(七)反射的徴候婦人生殖器病ハ遠隔部ニ種々ノ神經症ヲ發シ易シ就中胃及ヒ喉頭ハ此症ヲ發スル₁最モ多キ部位トス實ニ腦脊髓神經ハ一モ生殖器病ノ餘害ヲ免レ得ヘキ者アラス彼三叉神經痛ヲ發スル₁多キモ亦其一例ト爲スヘシ

精神ノ變常

(八)精神ノ變常婦人生殖器病ハ精神ニ變常ヲ來ス₁往々之レアリ喜斯的里亞ヲ兼ル者多キハ則チ其一例ナリ

○診察臺及手術臺

診察臺及手術臺

凡ソ婦人生殖器病ニ於テ理學的診查ヲ爲スニハ患婦ヲシテ適宜ノ姿勢ヲ取ラシムルヲ最モ緊要トス而シテ尋常ノ診查ハ臥床上ニ於テ施スヲ得ヘシト雖モ精密ノ診查殊ニ器械的診查ノ如キハ特別ノ診察臺ヲ用ユルニ非サレハ行ヒ易カラス通例強固長方形ニシテ高サ七十乃

至八十センチメートルヲ有スル卓子ハ診察及ヒ手術ニ兼用スルヲ得ヘシ

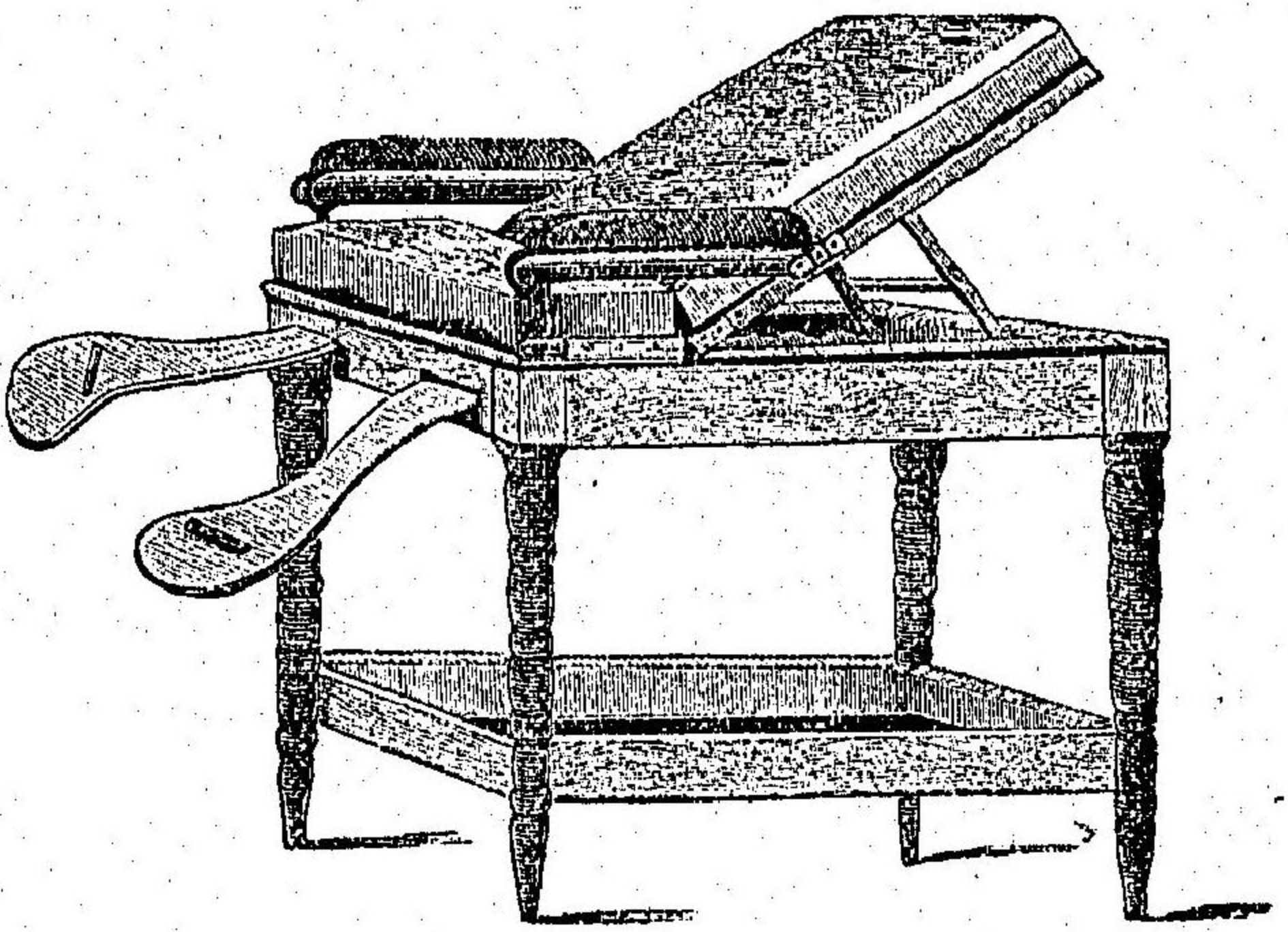
世上種々ノ診察臺及ヒ手術臺アリト雖モ其構造繁雜ニ過キ實利ノ少ナキノミナラス反テ患者ヲシテ一警驚怖ノ念ヲ起サシムルノ弊ナキ₁能ハス

第一圖ニ示ス所ノ卓子ハ幅六十乃至六十五センチメートルニシテ斜面墊子及ヒ足板ヲ具ヘ斜面ノ后端ハ上下シ得ヘキカ故ニ隨意ニ其角度ヲ變換シ得ヘシ足板モ亦適宜ニ高低シ又ハ全ク除去シ得ルノ裝置ナリ但シ其尻臀ヲ載スル部即チ卓子ノ前縁ト斜面ノ前縁トノ距離ハ必ス長キニ過クヘカラス何トナレハ若シ長キニ過クル₁ハ患者ヲシテ適宜ノ位置ヲ取ラシムルニ稍々困難ナレハナリ而シテ大抵其距離ハ三十乃至三十五センチメートルヲ以テ適度トス
此卓子ハ尋常ノ診查及ヒ腔内或ハ子宮頸部ノ手術ニ用ユルニ宜シ若

シ夫ノ
腹部截
開術ヲ
施サン
ト欲ス
ルカ如
キニ當
テハ強
固長方
形ノ高
臺ヲ用
ユルヲ
最モ便ナリトス

第一圖

診察ニシテ手術ヲ兼ル者ヲ示ス
此解釋ハ本文ニ詳ナリ



○受診ノ位置

凡ソ婦女ヲ診スルニハ其病ノ現況及ヒ診断ノ難易ニ從テ種々ノ位置
ヲ取ラシムルヲ要ス今之ヲ分テ五種トス曰ク直位置曰ク仰位置曰ク
俯位置曰ク側位置曰ク膝胸位置是ナリ

直位置

(一)直位置 此位置ハ一ニ起立位置ト稱ス單ニ患者ヲシテ正シク堅立
セシムル者ニシテ耻骨縫合ノ後面ハ水平線ト大約四十五度ノ角ヲ造リ
尾骶骨ノ下端ハ耻骨縫合ノ下線ヨリ少シク高位ニ在リ腹壁緊張ノ度
及ヒ腹腔ノ内壓ハ他ノ位置ニ於ケルヨリモ稍々強ク子宮底ハ少シク
前下方ニ傾キ膈部ハ少シク後上方ニ移ル但シ分娩後腹壁ノ弛緩スル
者ニ在テハ子宮ノ全體稍々後方ニ移ルト雖モ未孕婦ニ在テハ斯ノ如
キ移動ヲ致ス可ト罕レナリ又膀胱充滿シテ子宮底ノ前方ニ移ル可ト能ハ
サル者ニ在テハ膈部ノミ少シク下行スルヲ常トス
此位置ハ子宮ノ墜下症屈症轉症及ヒ膈脫等ヲ診シ或ハ子宮ノ重量或

仰位置

截石位置

平臥直坐中
間ノ位置

ハ動不動ヲ檢スルニ緊要ナリトス

(二)仰位置 此位置ハ一ニ背位置ト名ツク其別三アリ左歎ノ如シ

(其一)ハ患者ヲシテ仰臥シ且ツ下肢ヲ伸張セシムルニ在リ但シ診査及ヒ施術ノ際此位置ヲ取ラシムルト甚タ少ナシトス

(其二)ハ通常截石位置ト名ツク蓋シ膀胱結石ニ會陰截開術ヲ施スニ方テ常ニ此位置ヲ取ラシムレハナリ即チ患者ヲシテ仰臥シ少シク其軀幹ヲ擡起軀幹ノ中軸ト水平線トヨシテニシテ膝關節及ヒ股關節ヲ屈曲シ且ツ足部ト薦骨トヲ水平線ニ在ラシムル者ニシテ診査及ヒ施術ノ際最モ多ク用ユル所ノ位置トス

(其三)ハ患者ヲシテ仰臥シ軀幹ノ上部ヲ擡起シテ平臥ト直坐トノ中間ニ在ラシメ次テ股關節及ヒ膝關節ヲ屈曲シ且ツ骨盤ヲ脊柱ニ向ケテ強ク屈曲セシムル者トス抑此位置ヲ取ラシムルニハ二名ノ介者ヲ要ス即チ各介者ハ先ツ患者ノ一側ニ於テ下方即チ患者ノ足部ニ向テ立

俯位置

膝胸位置

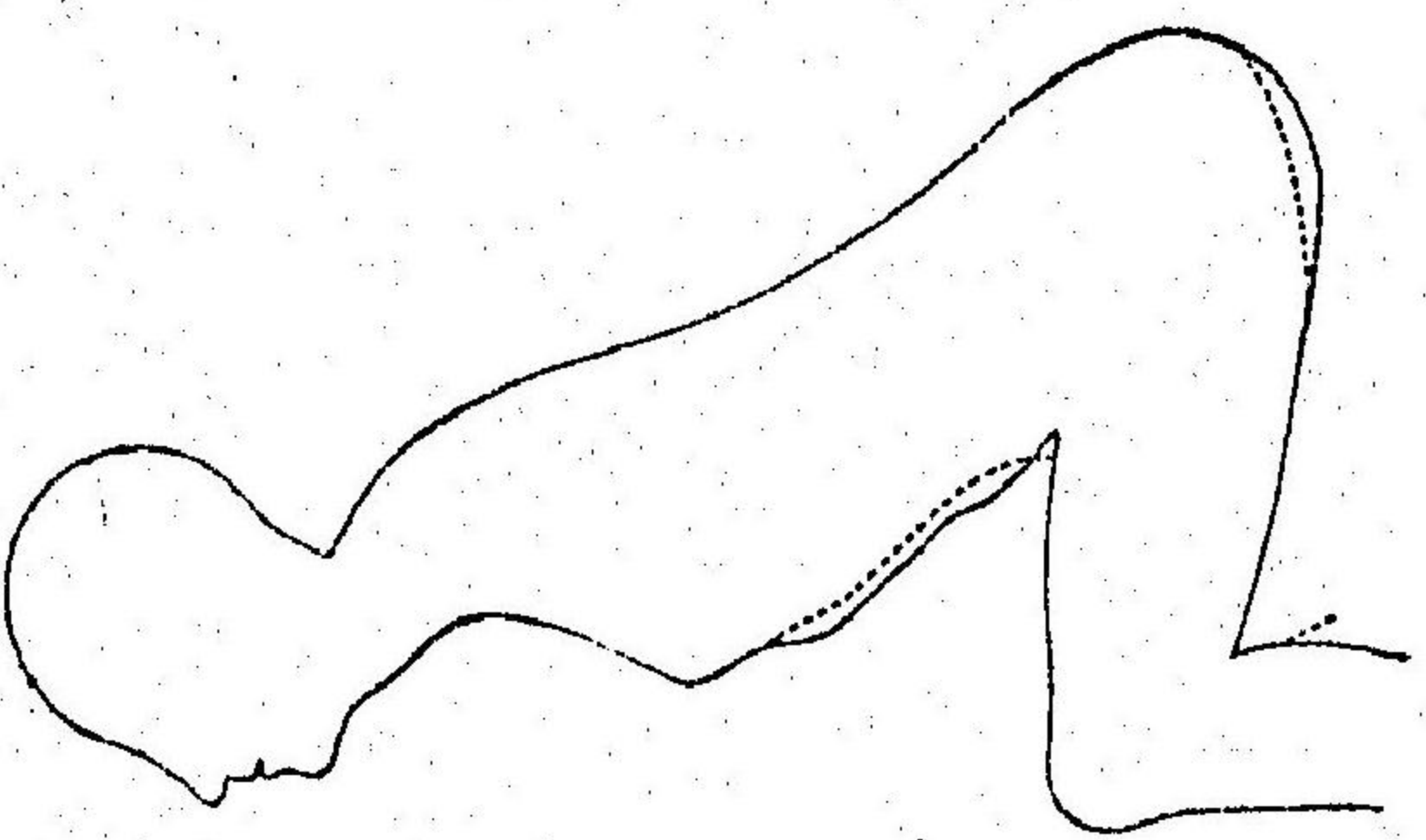
チ一側ノ上膊ト胸膈トノ間ニ患者ノ大腿ヲ挿ミ同側ノ手ヲ以テ脛骨部ヲ内方ヨリ摑ミ更ニ他側ノ手ヲ以テ踝關節部ヲ握リ次テ股關節及ヒ膝關節ヲ屈曲シ強ク大腿部ヲ腹部ニ向テ壓迫シ同時ニ之ヲ外轉シテ外陰部ヲ露出セシムルナリ而シテ患者此位置ニ在ルキハ其腹壁著シク弛緩シ腹腔ノ内壓大ニ減却スルカ故ニ骨盤ノ前後徑ヲ測リ或ハ複診法ヲ施スニ便ナリトス

(三)俯位置一名腹位置 此位置ニ二様アリ一ハ單ニ胸腹ヲ床面ニ接シテ俯臥スルモノニシテ之ヲ單純腹位置ト謂ヒ一ハ膝蓋ト胸壁或ハ肘頭或ハ肩峰トヲ以テ軀幹ヲ支持スルモノニシテ其位置ニ從ヒ之ヲ膝肘位置、膝胸位置又ハ膝肩位置ト謂フ單純腹位置ハ脊柱及ヒ骨盤後壁等ヲ檢査スル時ヲ除クノ外之ヲ用ユルト少ナシ

膝胸位置ハ第二圖、第三圖ニ示スカ如ク薦骨後面ノ下部ハ天ニ向ヒ肛門及ヒ陰裂ハ殆ト鉛直線ヲ占メ骨盤上口ハ殆ト下方ニ向テ水平線ト

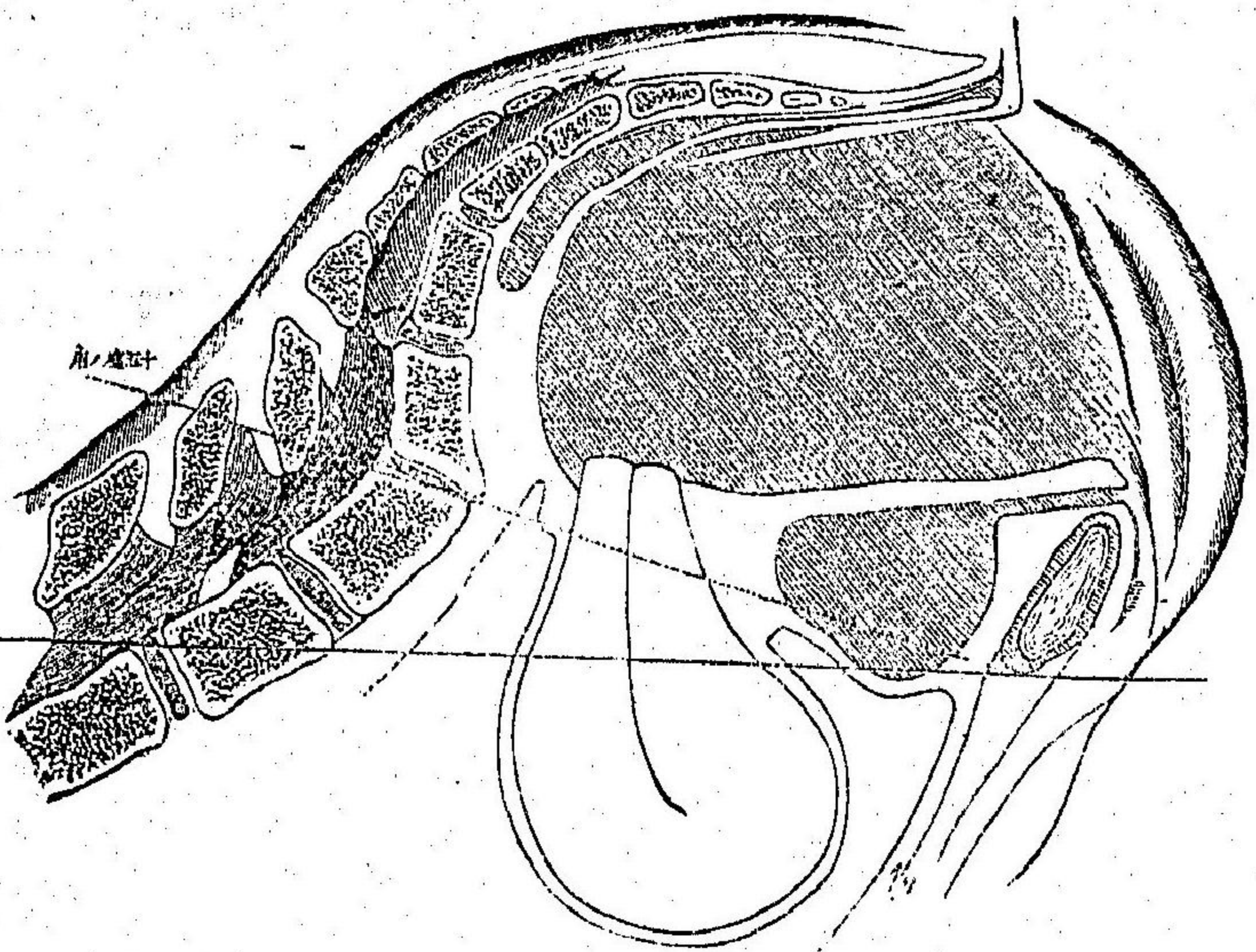
第二圖

膝胸位置ニ於ル婦人体格ノ外圍ヲ示ス
照線ハ未タ腔口ヲ開カサル時ノ外圍
連續線ハ空氣腔内ニ進入セル後ノ外圍



第三圖

骨盤上口ト水平線トノ角度ヲ示ス



十度乃至二十度ノ角ヲ爲シ腹腔ノ前後徑ハ胸骨ノ下部ニ於テ增長シ
耻骨ノ上際ニ於テ減縮ス而シテ骨盤ハ胸膈ヨリモ高位ニ在ルカ故ニ
内臓ハ皆自己ノ重力ニ由テ低位即チ身體ノ上前方ニ向テ移行シ腹腔
ノ内壓大ニ減少ス是ヲ以テ空氣ハ陰唇ヲ排開シ腔内ニ進入シテ大ニ
之ヲ擴張シ子宮ハ腹腔ニ向テ上行シ其腔部ハ薦骨岬ノ近部ニ達スル
ニ至ル又肛門ノ弛緩スル者ニ在テハ空氣自ラ直腸ニ進入スルコトアリ
又試ニ加底的兒ヲ尿道ニ挿入スレハ空氣之ニ由テ膀胱ニ進入スルヲ
證スヘキコトアリ
此位置ニ於テハ觸診ヲ行フコト甚タ少ナシ但シ腹内ノ深部ニ瘤腫ヲ存
スル者ヲシテ此位置ヲ取ラシムルルキハ其瘤腫自己ノ重力ヲ以テ深部
ヨリ出テ腹壁ニ接スルカ故ニ大ニ之ヲ觸知シ易キモノトス
子宮ノ後轉症及ヒ後屈症ヲ矯正スルニハ患者ヲシテ此位置ヲ取ラシ
ムルヲ最モ良トス蓋シ腔内及ヒ直腸ニ進入セル空氣ニ由テ大ニ施術

側位置

ヲ助クルノ益アレハナリ「カンベル」氏ノ説ニ據レハ後屈症及ヒ後轉症ノ輕度ナル者ニ在テハ單ニ此位置ニ於テ空氣ヲ腔内及ヒ直腸ニ進入セシムルノミニシテ能ク矯正ノ功ヲ完フスルヲアリト云フ

單純側位置

(四)側位置 此位置モ亦二様ニ區別ス曰ク單純側位置曰ク側腹位置是ナリ

(其一)單純側位置ハ患者ヲシテ左側或ハ右側ヲ下方ニ向ケテ臥サシメ腸骨楯ト肩峰トヲ以テ軀幹ヲ支持シ頭部ヲ枕子ニ載セテ少シク擡舉シ且ツ膝關節ヲ屈曲シ大腿ヲ腹部ニ向ケテ牽上スルモノヲ謂フ此位置ニ於テ腔診ヲ行ハント欲セハ臀部ヲシテ診察臺ノ下縁ヨリ突出セシムルヲ要ス

側腹位置

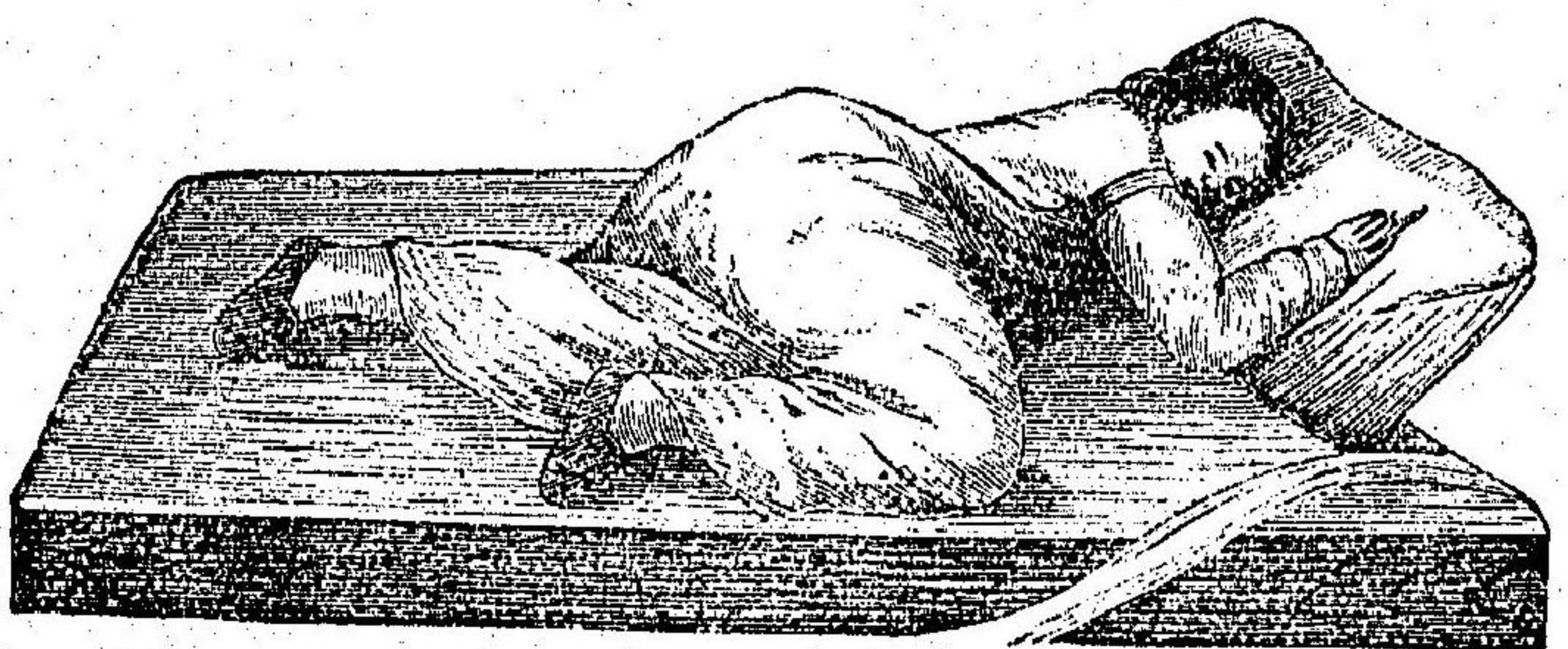
(其二)側腹位置即チ「シムス」氏

位置第四圖ハ患者ヲシテ左側

第四圖

「シムス」氏子宮鏡ヲ使用スルニ適スル位置ヲ示ス

ヲ下方ニ向ケテ臥シ其軀幹ハ單純腹位置ト單純側位置トノ中間ニ在ラシメ左手ヲ背部ニ置キ可及的右肩峰ヲ前方ニ進メ且ツ膝關節ヲ屈曲シ大腿ヲ腹部ニ向テ牽上セシムルモノニシテ右膝頭ノ内側ハ則チ床ニ觸接ス此位置ニ在テハ腹腔ノ内壓仰位置及ヒ單純側位置ニ於ケルヨリモ減少シ腔ノ後壁ハ



上方ニ向ヒ前壁ハ下方ニ向フモノトス
此位置ハ最モ緊要ナルモノニシテ外陰部腔内及ヒ直腸ノ診査殊ニシ
ムス氏ノ創造ニ係ル子宮鏡ヲ使用スルニ適シ又前記ノ部位ニ手術ヲ
施スニ便ナリ

○診察法ノ區別

診察法ノ區別

婦人病ヲ診察スルノ法種々アリ今之ヲ大別シテ二種トス曰ク無器診
察法曰ク用器診察法是ナリ

(甲)無器診察法ニ屬スル者左ノ如シ

(一)望診法

腹部望診法

外陰部望診法

(二)觸診法

腹部觸診法

- 腔内觸診法
- 直腸觸診法
- 尿器觸診法
- 複診法一名雙手診法
- (三)打診法
- (四)聽診法
- (五)測診法
- (乙)用器診察法ニ屬スル者左ノ如シ
 - 子宮鏡用法
 - 子宮消息子用法
 - 鉤狀鑷子用法
 - 壓搾海綿及ヒラミナリア等ノ用法
 - 子宮銳匙用法

望診法

(甲) 無器診察法

○望診法 檢者其視覺ヲ以テ患者ノ現況ヲ診査スルノ法ニシテ腹部及ヒ外陰部ニ行フモノトス

腹部望診法

(一)腹部望診法 凡ソ腹部望診法ヲ行フニハ患者ヲシテ直位置第七若シクハ仰位置第八ヲ取り適宜ニ被服ヲ解放セシムルヲ要ス而シテ檢者ノ注目スヘキ要件ハイ)皮膚一般ノ狀況(ロ)乳腺ノ異常全腺ノ腫脹色乳頭ノ勃張及ヒ脂肪腺ノ突出等(ハ)全腹ノ膨脹若クハ陷沒(ニ)肚腹局部ノ腫起若クハ陷沒(ホ)腹形ノ齊不齊(ヘ)臍ノ陷凹扁平若クハ突出(ト)白線ノ變色(スト)リエー]フ存在靜脈ノ浮出(チ)呼吸運動(リ)胎動(ヌ)腸管ノ蠕動(ル)腹壁ノ緊張若クハ弛緩等是ナリ其他脊柱骨盤及ヒ下肢ノ畸形ニ注目スル等モ亦怠ルヘカラス

外陰部望診法

(二)外陰部望診法 外陰部及ヒ其近接部ヲ望診スルニハ患者ヲシテ側位置第十若シクハ仰位置第八ヲ取ラシムルヲ要ス而シテ檢者先ツ會

觸診法

陰ノ異常腫口ノ開否、陰唇左右ノ不同、腫起、變色若シクハ靜脈怒張等ニ注目シ次ニ陰唇ヲ排開シテ其内面ノ變色、分泌物ノ性状、皸裂及ヒ潰瘍ノ有無ヲ檢シ且ツ陰核、尿道口、舶樣窩、處女膜若クハ其遺体ノ現況ヲ察スヘシ多産婦ニシテ陰裂ノ廣濶ナル者ニ在テハ陰唇ヲ排開シテ陰内殊ニ其下半ヲ視ヒ得ヘキアリ其他外陰部ノ畸形、瘤腫、膿瘍殊ニ、バ子宮脱及ヒ腫脱等ヨリ鼠蹊ノ腫起若クハ其變色、肛門ノ異常例之膿炎脱肛、痔核、皸裂、痔瘻及ヒ「コンジロマ」ノ如キ諸患ニ至ルマデ皆望診法ヲ以テ認知スルヲ得ヘシ

○觸診法 是レ最モ緊要ナル診法ニシテ腹部、生殖道、直腸及ヒ尿器ニ行フヘシ

腹部觸診法

(一)腹部觸診法 此法ヲ行フニハ患者ヲシテ仰位置第八ヲ取り膝關節ヲ屈曲シ大腿ヲ腹部ニ向テ牽上セシメ檢者乃チ一手ヲ温メテ其掌面ヲ腹壁ニ觸レ順次ニ各部ヲ診スヘシ但シ初メハ輕ク按シ次第ニ力ヲ

腹部觸診法
ヲ以テ診定
シ得ヘキ諸
件

加へ脊柱ニ向テ壓スルヲ法トス若シ檢者冷手ヲ用ヒ或ハ初メヨリ卒然強壓スルキハ腹筋忽チ攣縮シテ大ニ診査ヲ妨クルヲアリ

此法ヲ以テ診定シ得ヘキ件ハ(イ)腹壁ノ冷熱及ヒ乾濕(ロ)浮腫若クハ氣腫(ハ)腹筋ノ弛緩若クハ緊急(ニ)全腹ノ陷沒若クハ膨脹(ホ)局處ノ腫起若クハ陷凹(ヘ)腹腔内ノ抗抵物腫腫若クハ内臟肥大等(ト)波動、脈動、摩擦、振動、胎動、或ハ氣狀体動(チ)呼吸運動ノ強弱(リ)鼠蹊脱腸若クハ水脈腺腫等是ナリ

腹部ノ觸診ヲ行フニ方テ醫ノ銘記スヘキ要件アリ即チ神經性患者ニ在テハ輕按スレハ痛苦ヲ訴ヘ強壓スレハ能ク之ニ堪ユルヲアリ又之ニ反シテ腹内ノ炎性病ニ罹ル者ハ能ク輕按ヲ忍ブモ強壓ニ堪ヘサルヲ常トス

腹滿患者ヲ診スルニ方テハ先ツ其眞偽ヲ辨スルヲ勉ムヘシ婦人若シ妊娠ヲ詐僞セント欲スルキハ隨意ニ脊柱ヲ後屈シテ肚腹ヲ突出セシムルヲアリ此ノ如キ者ニ在テ其背部ニ注目スレハ必ス床面ト腰椎

「フアントム」

瘤

抵抗物

ト相離レテ著シク間隙アルヲ認ムヘシ

時トシテハ妊婦ニシテ其實狀ヲ陰蔽センカ爲ニ受診ノ際甚シク腹筋ヲ攣縮シ以テ檢査ヲ妨クルヲアリ或ハ斯ノ如キ故意ニ出テサルモ腹筋ノ甚シク攣縮スルカ爲ニ腹内ニ固形瘤アルカ如キ狀況ヲ呈スルヲアリ名ケテ「フアントム」瘤ト云フ此等ノ患者ヲ診スルニ方テハ檢者故ヲニ患者ト談話シテ其意識ヲ他事ニ轉セシムヘシ然ルキハ腹筋自ラ弛緩シテ檢査ヲ完フスヘキヲ多シ若シ尙ホ目的ヲ達シ得サルキハ宜シク迷朦藥ノカヲ藉ルヘシ

若シ腹内ニ抵抗物即チ瘤腫或ハ内臟ノ肥大症アルヲ認メハ先ツ其形狀、大小、硬軟、知覺ノ銳鈍及ヒ波動ノ有無ヲ辨シ次ニ其移動スルヤ否ヲ審ニスヘシ

瘤体ト腹壁ト癒着スルヤ否ヲ檢スルニハ兩手ヲ腹壁ニ觸レ之ヲシテ上下左右ニ移動セシムヘシ斯ノ如クスレハ腹壁ノ内面ト瘤体ト互ニ

摩擦性振動

「バロットメ
ント」

摩擦スルヲ以テ摩擦性振動ヲ觸知スルコトアリ是レ兩部ノ間ニ癒着ナ
キヲ示ス卵巢囊腫ヲ診察スルニ方リ最モ緊要ノ一徵ナリ
腹腔ニ固形瘤アリテ腹水ヲ兼ムルキハ所謂「バロットメント」ヲ認ムル
コトアリ即チ一手ヲ腹部ノ一側ニ觸レ他手ヲ以テ頓ニ對側ヲ壓迫スル
キハ瘤體動搖シテ甲手ニ達スルヲ感スヘク或ハ先ツ手指ヲ以テ下腹
ヲ壓迫シ次テ其手力ヲ緩メテ待ツキハ同シク「バロットメント」ヲ感ス
ルコトアリ是レ初メ壓迫ノ爲ニ上行シタル瘤體ノ徐々ニ下行シテ手指
ニ達スルニ因ル

波動

波動ノ有無ヲ檢スルニハ一手ヲ肚腹ノ一部ニ觸レ他手ノ指頭ヲ以テ
對側ノ一部ヲ打ツヘシ若シ腹腔ニ流動體ヲ存スルキハ其波動忽チ甲
手ニ達スルヲ覺フ或ハ兩手ヲ腹部ノ兩處ニ觸レ一手ノ指頭ヲ以テ他
手ノ方位ニ向ヒ急卒ニ壓迫スルモ亦波動ヲ感スルコトアリ

腔内觸診

(二)腔内觸診法 此法ハ側位置第十若クハ仰位置第八ニ於テ行フヘシ

然レ此時トシテハ直位置第七ニ於テ行フコトアリ

側位置ニ於テ此法ヲ行フニハ患者ヲシテ其左側ヲ床ニ接シテ臥シ左
右ノ膝頭ヲ胸膈ニ向テ牽上シ臀部ヲ床縁ニ臨マシムヘシ而シテ檢者
ハ廣布ヲ取テ患者ノ胸腹及ヒ下肢ヲ被ヒ右手ノ示指ニ油ヲ塗リテ之
ヲ廣布ノ下ニ入レ其指頭ヲ會陰ニ觸レ徐々ニ前方ニ進メテ陰門ノ後
縫合ニ至リ之ニ沿テ腔内ニ送入スヘシ但シ此際能ク注意シ手指ヲシ
テ陰核ニ觸レシムヘカラス檢者若シ仰位置ニ於テ檢査セント欲セハ
患者ヲシテ所謂截石位置第八ヲ取ラシムルヲ可トス而シテ其他ノ方
法ハ側位置ニ於ルモノト異ナルコトナシ
直位置ハ尋常ノ檢査ニ便ナラス唯子宮ノ墜下症、屈症、及ヒ轉症ノ存否
ヲ察シ或ハ妊娠ノ疑アル者ニ於テ「バロットメント」ノ有無ヲ檢スル等
ニ用ユヘキノミ但シ此法ヲ行フニハ患者ヲシテ柱壁等ニ倚テ直立シ
以テ其體ヲ支持セシムルヲ要ス

腔内觸診法
ヲ以テ診知
スヘキ諸件

總テ腔内觸診法ヲ行フニハ示指ヲ用ユルヲ便トス然レモ腔ノ深キ者ニ在テハ示中二指ヲ用ヒサレハ充分ノ診査ヲ遂ケ難キヲアリ
此法ヲ以テ診知スヘキ件甚タ多シ(イ)處女膜ノ存否若クハ厚薄(ロ)腔ノ存否及ヒ其廣狹深淺、分泌物ノ多少、温度ノ高低、知覺ノ銳鈍、脈搏ノ強弱、異物若クハ瘤腫ノ有無(ハ)子宮腔部ノ位置、形狀、大小、長短及ヒ硬軟(ニ)子宮全体ノ高低、大小及ヒ動否(ホ)子宮外口ノ有無、大小及ヒ其縁ノ齊不齊(ヘ)前後穹窿及ヒ側穹窿ノ高低、廣狹或ハ此部ニ於ル抗抵物、波動若クハ疼痛ノ有無(ト)分娩時ニ於ケル諸候例之腔ノ乾濕、胎兒ノ位置、子宮口ノ開否、分娩ノ進度等ノ加シ但シ此末項ニ記スル者ハ專ラ産科ノ與ル所ナルヲ以テ本書ニ詳述セス

直腸觸診法

(三)直腸觸診法 患者ノ位置ハ腔内觸診法ニ於ルカ如クシ檢者ハ示指ニ油ヲ塗り徐々ニ肛門ヲ排開シテ直腸ニ送入シ以テ其内狀及ヒ内生殖器ノ景況ヲ檢スヘシ但シ其詳細ハ肚腹ト直腸トヨリ檢査スル方法

尿器觸診法

ノ條ニ讓ル

(四)尿器觸診法 婦人ノ尿道ハ手指若クハ器械ヲ以テ之ヲ擴張シ得ヘキモノトス故ニ時トシテハ手指ヲ尿道ニ送入シテ膀胱内ニ達シ以テ其内狀ヲ察シ或ハ其壁ヲ隔テ内生殖器ノ景況ヲ檢スルヲアリ但シ其詳細ハ複診法ノ條ニ讓ル

複診法

(五)複診法一名雙手診法 婦人内生殖器ノ狀況ハ肚腹、生殖道、直腸及ヒ尿器ノ四部ヨリ檢査スルヲ得ヘシ而シテ單ニ一部ヨリ檢査スルノ方法ハ既ニ之ヲ論セリ今爰ニ縷述セントスルモノハ同時ニ左右二手ヲ用ヒ二部若クハ三部ヨリ檢査スルノ方法ニシテ通常複診法一名双手診法ト稱スル者是ナリ尋常ノ疾患ニ於テハ二部ヨリ檢査スルヲ以テ足レリト雖モ罕レニハ三部ヨリ檢査スルニ非サレハ其内變ヲ確認シ難キヲアリ醫タル者豫メ之ヲ知ラサルヘカラス
複診法ヲ分テ二部ヨリ檢査スル者ト三部ヨリ檢査スル者トノ二種ト

ス

(甲) 二部ヨリ検査スル法

- (イ) 肚腹及ヒ生殖道ヨリ検査スル法
- (ロ) 肚腹及ヒ直腸ヨリ検査スル法
- (ハ) 肚腹及ヒ尿器ヨリ検査スル法
- (ニ) 生殖道及ヒ直腸ヨリ検査スル法
- (ホ) 生殖道及ヒ尿器ヨリ検査スル法
- (ヘ) 直腸及ヒ尿器ヨリ検査スル法

(乙) 三部ヨリ検査スル法

- (ト) 肚腹、生殖道及ヒ直腸ヨリ検査スル法
- (チ) 肚腹、尿器及ヒ生殖道ヨリ検査スル法
- (リ) 肚腹、尿器及ヒ直腸ヨリ検査スル法
- (ヌ) 尿器、生殖道及ヒ直腸ヨリ検査スル法

欠

MISSING

法
ヲ
檢
査
ス
ル
膣
ヨ
リ
卵
巢

膣ヨリ卵巢ヲ検査セント欲セハ一手指右側ヲ檢スルニハ右手ヲ用フヲ以テ子宮側部ヲ外上方ニ壓迫シ同時ニ他手ヲ以テ腹部ヨリ骨盤内器ヲ前下方ニ壓迫スルヲ法トス斯ノ如クスルハ内手ヲ以テ骨盤ノ側部ニ位スル諸器及ヒ廣韌帶殊ニ其肥厚スル者ヲ觸知シ得ヘシ時トシテハ卵巢韌帶モ亦判然認定シ得ヘキトアリ

若シ卵巢常位ニ在リテ膣壁ノ弛緩セルハ腹壁ヲ壓迫シ同時ニ膣ヨリ検査シテ容易ニ之ヲ觸知スヘキトアリ時トシテハ只手指ヲ以テ側穹窿ヲ外方ニ向テ壓迫スルノミニシテ能ク卵巢ヲ觸知スルトアリ子宮ノ後轉後屈兩症ニ在テハ卵巢モ亦隨テ後方ニ轉移スルモノニシテ此等ノ症ニ在テハ其後轉若クハ後屈セル子宮側傍ノ骨盤側壁ニ近接セル部ニ於テ之ヲ觸知スルヲ得ヘシ卵巢若シ後上方ニ偏在スルハ膣ヨリ之ヲ觸知シ難シ然レモ直腸ヨリ檢スルハ容易ニ之ニ達シ得ヘキモノナリ

瘤腫認定法

瘤腫ノ全ク骨盤内ニ位スル者或ハ腹腔内ニ在リテ其一部ノミ骨盤内ニ突出スル者ノ如キハ其發生セシ部位ヲ認定スルヲ殊ニ緊要ナリトス故ニ此等ノ症ニ於テハ子宮卵巢廣韌帶及ヒ骨盤壁ヲ順次ニ精査シ以テ其現在セル瘤腫ト連絡スルヤ否ヲ確定スルヲ勉ムヘシ
總テ此ノ如キ瘤腫ヲ檢査スルニハ初メ先ツ其位置、表面、形狀、硬度及ヒ外界ヲ認知シ次ニ内器ト分離シ得ヘキヤ否ヲ確定セサルヘカラス即チ檢者ハ一手ノ指頭ヲ以テ腔内ヨリ瘤腫ト子宮若クハ骨盤壁トノ間ヲ壓迫シ同時ニ他手ヲ以テ腹壁ヨリ瘤腫ト子宮若クハ骨盤トノ間ヲ壓迫スヘシ而シテ既ニ瘤腫ヲ檢査シ了レハ更ニ子宮卵巢廣韌帶及ヒ骨盤壁ヲ檢査スルヲ要ス斯ノ如ク丁寧反復シテ檢査スルモハ瘤體ト内器ト連絡スルヤ否ヲ確定スルヲ敢テ難キニアラサルヘシ然リト雖モ瘤體ト内器ト密ニ接着スルモノニ在テハ檢査上動モスレハ誤謬ヲ來シ易シ何トナレハ手指ヲ兩部ノ間ニ送入シテ之ヲ分離スルヲ能ハ

肚腹及ヒ直腸ヨリ檢査スル法

サレハナリ故ニ兩部ノ連絡スルヤ否ヲ確定シ得ザル者ニ在テハ患者ヲシテ受檢ノ位置ヲ變換セシメ以テ瘤腫若クハ内器ノ如シ子宮ノ轉移スルヤ否ヲ試ムヘシ或ハ鉤狀鑷子ヲ以テ子宮ノ前唇ヲ撮持シ之ヲ下方ニ牽引シテ瘤腫ト共ニ下行スルヤ否ヲ檢スルモ亦一ノ便法ナリトス
瘤腫巨大ニシテ腹肚ノ大部ヲ領シ且ツ骨盤ノ上口ニ箝入セルモハ腔ヨリ充分ニ査定スルヲ難シ此ノ如キモノニ在テハ介者ヲシテ其手ヲ以テ先ツ腹壁ヲ下方ニ向ケテ移動セシメ次ニ其手ヲ放タス直ニ瘤腫ヲ上方ニ向テ壓迫シ同時ニ檢者ハ手指ヲ以テ子宮ヲ檢査シ其瘤腫ト共ニ上行スルヲナキヤ否ニ注意シ以テ兩部連絡ノ如何ヲ判斷スルヲ可トス
(ロ) 肚腹及ヒ直腸ヨリ檢査スル法 腔狹窄、腔閉鎖若クハ處女膜ノ存在スル者ニ在テハ腔診法ヲ行フヲ能ハス故ニ腔ニ代テ直腸ヨリ檢査ス

ルヲ要ス但シ斯ノ如キ患者ニ在テハ既ニ記載シタル單純ノ直腸觸診法ノ他更ニ肚腹ト直腸トヨリ検査スルノ方法ヲ行フヘシ蓋シ直腸ノ壁タル薄軟ニシテ弛緩セルカ故ニ之ヲ隔テ子宮ノ後面、側縁、底部、薦骨、子宮韌帶、廣韌帶、卵巢及ヒ骨盤壁ヲ検査シ得ヘキノミナラス時トシテハ喇叭管及ヒ卵巢韌帶モ亦觸知シ得ヘキヲアリ

此法ヲ行フニハ一手ヲ以テ下腹ヲ按摩シ他手ノ示指若クハ示中二指ニ油ヲ塗リ徐々ニ之ヲ肛門ニ送入スヘシ而シテ初メ手指ノ肛門内ニ達スルヤ直ニ廣濶ナル空洞アルヲ覺フ此洞ハ糞屎ヲ含ムヲ多シ次テ其指頭ヲ前方ニ向ハシムルハ則テ其壁ヲ隔テ硬固ノ一体アルヲ認ムヘシ此体ハ子宮頸ニ他ナラスト雖モ未熟ノ檢者ハ之ヲ以テ病的產物若クハ子宮体ト誤認スルヲアリ而シテ其子宮頸タルヲ確知セント欲セハ同手ノ擗指ヲ腔内ニ送入シテ前後同時ニ検査スルヲ要ス又直腸内ノ手指ヲ側方ニ向ケテ検査スレハ子宮薦骨韌帶ヲ觸知スルヲ得ヘシ蓋シ此

第三括約筋

韌帶ハ左右二條アリテ各子宮体下部ノ側方ヨリ起リ索狀ヲ成シテ後外方ニ走り以テ薦骨ニ達スル者ニシテ若シ短縮、肥厚、緊張、知覺過敏及ヒ其他ノ病變アルハ之ヲ認定スルヲ甚タ難キニアラス

檢者若シ更ニ手指ヲ深入スレハ所謂第三括約筋一名「ハウトン」氏瓣膜ナルモノアリテ指頭ニ抵觸スルヲ覺フヘシ抑此瓣膜ハ粘膜ノ皺襞ヨリ成リ其層間ニ蜂窠織及ヒ筋纖維ヲ含有シ内方ニ挺出シテ直腸ノ内腔ヲ上下ノ二部ニ分ツ者トス而シテ其口徑ハ時トシテハ甚タ狹隘ニシテ或ハ右方ニ倚リ或ハ左方ニ偏シ或ハ著シク後方ニ位シ之カ爲ニ手指ヲ進入スルニ苦シムヲアリ豫メ之ヲ知ラサルヘカス

手指既ニ直腸ノ上部即チ第三括約筋ノ上部ニ達スレハ先ツ其末節ヲ屈曲シテ第三括約筋及ヒ薦骨子宮韌帶ヲ下方ニ牽引シ然ル後廣ク手指ヲ運轉シ且ツ同時ニ他手ヲ以テ下腹ヲ按摩シ先ツ「ドーグラス」氏窩子宮后面、底部及ヒ側縁ニ觸レ次ニ卵巢、喇叭管、廣韌帶等ヲ探リ終ニ骨

廣韌帶

盤壁ヲ檢スヘシ
 子宮若シ前轉シ或ハ前屈スルモ適宜ニ下腹ヲ按壓シテ之ヲ矯正シ或ハ鉤狀錐子ヲ用ヒ臆ヨリ之ヲ下方ニ牽引スルルハ能ク直腸ヨリ其底部ヲ觸知スルヲ得ヘシ
 廣韌帶ハ手指ノ壓迫ニ從テ移動シ易キモノナレモ同時ニ他手ヲ以テ腹上ヨリ按壓スレハ其層間ニ存スル喇叭管及ヒ卵巢等ヲ觸知スルヲ得ヘシ但シ卵巢ヲ檢査スルニ方テハ其形狀容積及ヒ動不動ニ注意スルヲ緊要ナリトス
 廣韌帶ハ炎性產物ノ爲ニ變厚シテ鞏固トナルヲアリ而シテ此變化ハ或ハ一部ニ起リ或ハ廣ク全部ニ發ス其一部ニ起ル者ハ尙ホ移動スレモ全部ニ發スル者ノ如キハ大ニ移動ノ度ヲ減ス但シ其甚シク變厚スルモノト雖モ注意シテ檢査スレハ尙ホ能ク卵巢ヲ觸知シ得ヘシ而シテ廣韌帶ト骨盤後壁ト癒着スル者ニ在テハ直腸モ亦其變厚セル韌帶

薦骨子宮韌帶

肚腹及ヒ尿管ヨリ檢査スル法

ニ癒着スルカ如キヲ覺ユル者トス又此韌帶ノ基底部分ニ瘤腫ヲ生スル者ニ在テハ手指ヲ瘤體ト子宮若クハ骨盤壁トノ間ニ送入シ以テ其關係如何ヲ審ニスルヲ務ムヘシ但シ假令瘤體ハ甚々大ナルモ尙ホ能ク子宮及ヒ卵巢ヲ觸知スルヲアリ
 薦骨子宮韌帶モ第三括約筋ノ下部ヨリハ其上部ヨリ檢査スルヲ便ナリトス此韌帶モ亦廣韌帶ノ如ク一部或ハ全部ノ變厚シテ鞏固ト爲ルヲアリ而シテ斯ノ如キ變化アレハ子宮ノ前轉症ヲ兼ヌルヲ常トス是レ子宮ノ下部ヲ後方ニ牽引スルニ因ル又時トシテハ左右共ニ變化シテ直腸ノ狹窄ヲ來スヲアリ是レ其變化セル韌帶ノ爲ニ兩側ヨリ壓迫セラル、ニ因ル
 喇叭管ノ腫脹即チ喇叭管水腫ハ延長形ヲ呈スル者ニシテ直腸ヨリ檢査スレハ能ク之ヲ觸知スルヲ得ヘシ
 (ハ) 肚腹及ヒ尿管ヨリ檢査スル法 此法ハ一手指ヲ膀胱ニ送入シ他手

生殖道及ヒ直腸ヨリ検査スル法

生殖道及ヒ尿管ヨリ検査スル法

直腸及ヒ尿管ヨリ検査スル法

生殖道及ヒ尿管ヨリ検査スル法

ヲ以テ下腹ヲ按壓スル者ニシテ其目的ハ膀胱殊ニ其前壁ノ疾病ヲ検査スルニ在リ

(ニ) 生殖道及ヒ直腸ヨリ検査スル法 此法ハ一手指ヲ臍若クハ子宮ニ送入シ他手指ヲ直腸ニ送入スル者ニシテ子宮後壁、直腸前壁、ドীগラ

ス氏窩及ヒ子宮薦骨韌帶等ノ疾病ヲ検査スル爲ニ行フモノトス
(ホ) 生殖道及ヒ尿管ヨリ検査スル法 此法ハ一手指ヲ尿道若クハ膀胱ニ送入シ他手指ヲ臍若クハ子宮ニ送入スル者ニシテ臍前壁、子宮前壁、膀胱後壁及ヒ膀胱子宮窩等ノ疾病ヲ検査スル爲ニ行フヲ常トス

(ハ) 直腸及ヒ尿管ヨリ検査スル法 此法ハ一手指ヲ膀胱ニ送入シ他手指ヲ直腸ニ送入スルニ在リ臍ノ缺亡シ若クハ閉鎖スル者ニ於テ子宮ノ有無若クハ大小ヲ鑑定スル爲ニ行フモノトス

(ト) 生殖道及ヒ直腸ヨリ検査スル法 此三部ヨリ検査スルノ法ヲ行フニハ一手ノ中指(若クハ示指)ヲ直腸ニ同手ノ示指(若クハ拇指)ヲ臍

内ニ送入シ他手ヲ以テ肚腹ヲ按壓スヘシ

生殖道及ヒ尿管ヨリ検査スル法

尿管及ヒ直腸ヨリ検査スル法

尿管及ヒ直腸ヨリ検査スル法

打診法

(チ) 尿管及ヒ生殖道ヨリ検査スル法 此法ハ一手指ヲ膀胱ニ他手指ヲ生殖道ニ送入シ更ニ介者ヲシテ肚腹ヲ按壓セシムルニ在リ

(リ) 尿管、尿管及ヒ直腸ヨリ検査スル法 此法ハ一手指ヲ膀胱ニ他手指ヲ直腸ニ送入シ介者ヲシテ肚腹ヲ按壓セシムルニ在リ

(ヌ) 尿管、生殖道及ヒ直腸ヨリ検査スル法 此法ハ一手ノ中指(若クハ示指)ヲ直腸ニ同手ノ示指(若クハ拇指)ヲ臍内ニ送入シ他手ノ一指ヲ膀胱ニ送入スルニ在リ

○ 打診法 肚腹ニ打診ヲ行フノ法ハ胸部ニ施ス者ト異ナルヲナシ即チ左手指ヲ伸張シテ其掌面ヲ腹壁ニ接シ右手ノ示指若クハ中指若クハ示中二指ヲ直角ニ屈曲シ其末端ヲ以テ左手指ノ背面ヲ打ツニ在リ但シ打力ハ必ス強キニ過クヘカラス強キニ過クレハ腹内ニ存スル固形体モ亦鼓音ヲ放ツカ如キヲ覺ユルヲアリ是レ其打力ノ隣部ニ位ス

打診法ノ目的

ル腸管ニ達シテ反響ヲ發スルカ故ナリ
 此打診法ノ目的ハ肚腹一部ノ腫起若クハ全部ノ膨脹ヲ檢シ其内容物ノ固形流動及ヒ氣狀ノ三體中孰レヨリ成ルヤヲ鑒別シ其外界如何ヲ判知シ且ツ其内器ニ連續スルヤ否ヲ查定スルニ在リ而シテ其鼓音ヲ發スル者ハ内容物ノ氣狀體ナルヲ察スヘク濁音ヲ放ツ者ハ固形體若クハ流動體ナルヲ知ルヘシ但シ固形及ヒ流動ノ二體ヲ鑑別スルニハ觸診法ヲ兼子行ヒ以テ波動ノ有無ヲ檢定スルニ非サレハ能ハス
 腹部ノ打診法ハ直位置、仰位置、左側位置及ヒ右側位置ニ於テ之ヲ行ヒ以テ其打音ノ變スルヤ否ニ注意スルヲ要ス蓋シ受診ノ位置ヲ變換スルニ從テ打音ノ變スルハ腹腔内ニ移動シ得ヘキ流體アルニ因ル例之仰位置ニ於テ前面ニ鼓音ヲ放チ兩側ニ濁音ヲ發スル者ヲシテ右側位置ヲ取ラシメ左側ヲ打診スルニ初メ此部ニ存セシ濁音全ク消失シテ新ニ鼓音ヲ放ツハ則チ腹水タルヲ徵知スヘキカ如シ

腹水

時トシテハ手指ヲ以テ強ク腹部ヲ壓迫シ其背面ヲ打ツニ非サレハ假令固形體ノ存スルアルモ濁音ヲ發セサルヲアリ是レ其體ト腹壁トノ間ニ腸管ヲ存スルニ固ル

腹水ニ在テハ假令多量ノ漿液アルモ打診上鼓音ヲ發スルヲアリ是レ腸間膜ノ長キカ爲ニ腸管ノ浮出シテ腹壁ニ觸接スルニ因ル之ニ反シテ時トシテハ漿液多量ナラサルモ著明ノ濁音ヲ放ツヲアリ是レ腸間膜ノ短キカ爲ニ腸管ノ浮出スルヲ能ハサルニ因ル此ノ如キ症ニ在テハ手指ヲ以テ強ク腹壁ヲ壓迫シテ其漿液ヲ驅逐スルニ非サレハ鼓音ヲ打出スルヲ得サルモノトス

子宮脱

子宮脱ニ在テハ其腔外ニ脱出セル部ヲ打診スルヲ殊ニ緊要ナリ蓋シ此症ニ在テハ腔壁子宮ト共ニ翻出シテ囊狀ヲ成シ腸管ノ一部其中ニ墜下スルヲ往々之レアレハナリ

聽診法

○聽診法 肚腹ニ聽診ヲ行フニハ患者ヲシテ仰位置ヲ取ラシメ檢者

ハ聽診器ヲ用ニルヲ法トス而シテ此法ヲ用ヒ診取スヘキ徵候多シト雖モ其緊要ナルモノヲ擧グレハ三種ニ過キス即チ胎兒ノ心音血管雜音及ヒ腹膜摩擦音是ナリ

胎兒ノ心音

胎兒ノ心音ハ妊娠四個月ニ至テ始テ之ヲ聽取スヘキモノニシテ其數ハ一定セスト雖モ大約一分時間ニ百三十至乃至百五十至ヲ中準トス但シ其詳細ハ產科學ニ讓ル

血管雜音

血管雜音ハ子宮或ハ卵巢ノ瘤腫及ヒ妊娠等ニ於テ聽取スヘキモノニシテ瘤體ヨリ生スル歟將タ瘤體ノ爲ニ壓迫ヲ受クル所ノ大血管ヨリ發スル歟ヲ鑑別スルヲ殊ニ緊要ナリトス若シ動脈ヨリ發スルハ肚腹ノ中線及ヒ鼠蹊等總テ動脈ノ經過ニ沿テ尤モ著シク聽診器ヲ以テ壓迫スルモ尙ホ持續スヘク加之時トシテハ心臟收縮ニ從テ瘤體ノ搏動スルヲ見ルヘシ若シ瘤體ヨリ生スルハ其瘤ノ自体若クハ肚腹ニ於テ其位置ヲ變換スルヲアリ是レ其瘤ノ轉移スルニ因ル又時トシテ

測診法

ハ聽診器ノ壓迫ニ因テ一時消失スルヲアリ

○測診法 此法ハ肚腹膨脹ノ現況ヲ檢定シ併セテ其進度ヲ測知スル爲ニ行フモノニシテ通常尺帶ヲ用ユ而シテ此法ヲ要スルモノハ(イ)肚腹ノ周圍但シ臍ノ水準ニ於テ測ルヲ法トス(ロ)肚腹ノ半圍即チ椎骨棘狀突起ト臍トノ距離但シ兩側ヲ測テ之ヲ比較スルヲ要ス(ハ)臍ト腸骨前上棘突起トノ距離但シ左右兩側ヲ測ルヲ前ノ如シ(ニ)臍ト耻骨縫合トノ距離(ホ)臍ト劍狀軟骨トノ距離(ヘ)耻骨縫合ト劍狀軟骨トノ距離是ナリ

此法ヲ施スニ方テハ腸中ニ瓦斯若クハ糞屎ノ鬱滯スルヲナキヤ否ニ注意スルヲ要ス然ラサレハ其成績ニ誤謬ヲ來シ易シ

(乙) 用器診察法

凡ソ子宮鏡ヲ以テ腔内及ヒ子宮腔部ヲ照檢シ子宮消息子ヲ以テ子宮内腔ヲ探查シ鈎狀鑷子ヲ以テ子宮口唇ヲ撮住牽引シ或ハ壓摺海綿ヲ

以テ頸管ヲ擴張スル等ハ皆他ノ診法ヲ補助スル所以ノ者ニシテ則チ
用器診察法ニ屬ス

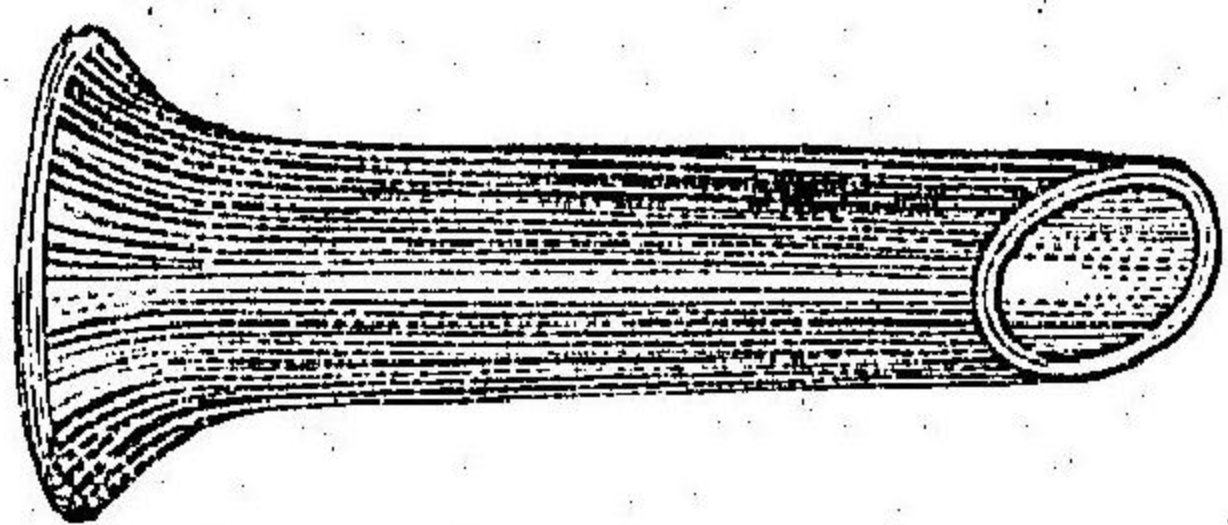
子宮鏡及其用法

筒狀鏡

○子宮鏡及其用法 子宮鏡ハ其類一ナラスト雖凡通常筒狀鏡、双瓣鏡
鷲嘴狀鏡及ヒノ一ゲバウエル氏鏡ノ四器ヲ以テ最モ便益ナル者トス
(イ)筒狀鏡 此器ハ象牙、木材、硬護膜或ハ乳色硝子或ハ尋常硝子ヨリ成
ル尋常硝子ヨリ成ル者ハ内面銀色
外面黒色ナリ之ヲ「フェルガッソ
ン」氏子宮鏡ト云フ其全形ハ第七圖ニ示スカ
如ク喇叭狀ノ筒管ニシテ外端ハ擴
張シ内端ハ斜割セルカ如ク或ハ橫
斷セルカ如シ大小數様アリ患者ノ
年齡若クハ腔ノ廣狹ニ從テ適用ス
ルヲ要ス
筒狀鏡ハ其器質ニ從テ實用上大ニ

第七圖

「フェルガッ
ソ」氏鏡ヲ
示ス



筒狀鏡使用法

得失アリ乳色硝子及ヒ尋常硝子ヨリ成ル者ハ患部ヲ照明シ且ツ藥物
ノ爲ニ侵サレサルヲ以テ尋常ノ検査或ハ藥物外布ノ施行ニ便ナリト
雖凡其破碎シ易キカ故ニ使用ノ際不虞ノ困難ヲ來ス「ナキニアラス
又象牙、木材或ハ硬護膜ヨリ成ル者ハ輕クシテ破碎スル「ナキカ故ニ
携帶ニ便ナレ凡局處ニ光線ヲ導ク「少ク且ツ藥物ノ爲メニ侵サレ易
キノ不利アリ
筒狀鏡ヲ使用セント欲セハ患者ヲシテ截石位置^{第八}ヲ取ラシムヘシ
但シ頭部及ヒ肩部ヲシテ少シク臀部ヨリ高カラシムルヲ便ナリトス
而シテ檢者ハ右手ニ此器ヲ取リテ之ヲ温メ其外面ノミニ油ヲ塗り患
者ノ左側若クハ股間ニ立チ先ツ左手ノ示指ヲ腔内ニ送入シテ子宮腔
部ノ位置及ヒ方向ヲ觸知シ次ニ同指ト拵指トヲ以テ陰唇ヲ開キ然ル
後此器ノ内端ヲ腔門ニ臨マシムヘシ但シ内端ノ凸縁ヲシテ後方即チ
後縫合ニ觸レシムルヲ要ス既ニ腔門ニ入レハ之ヲ以テ會陰ヲ後方ニ

壓シ徐々ニ子宮腔部ニ向テ進マシムヘシ時トシテハ内端已ニ腔底ニ達スルモ鏡内ニ子宮腔部ノ現出セサルトアリ是レ多クハ膀胱ノ空虚ナルカ爲ニ子宮体ハ前方ニ傾斜シ腔部ハ後方ニ向フカ故ナリ然ルハ此器ヲ少シク抽出シ更ニ後方ニ向テ進マシムレハ大抵腔部ヲ現出スルヲ得ヘシ

筒狀鏡使用上ノ注意

筒狀鏡ヲ使用スルニ方テ一ニノ注意スヘキ要點アリ即チ之ヲ送入スルト深キニ過クレハ内端ノ邊緣ヲ以テ緊シク腔部周圍ノ組織ヲ壓迫シ腔部之カ爲ニ甚シク鏡内ニ突出スルヲ以テ之ヲ病的ノ延長ト誤認スルトアリ又此際頸管ノ粘膜翻出シテ其色ノ鮮紅ナルカ爲メ誤テ之ヲ病的變常ト看做ストアリ

筒狀鏡ノ不利

總テ筒狀鏡ハ其構造單純ニシテ使用シ易シト雖モ子宮ヲ壓上シ隨テ腔ヲ狹長ナラシムルカ爲メ頸部ト腔口トノ距離ヲ増加シ且ツ腔壁ノ大部ヲ陰蔽スルカ故ニ腔部及ヒ腔壁ノ手術ニ使用シ難キノ不利アル

双瓣鏡

モノトス

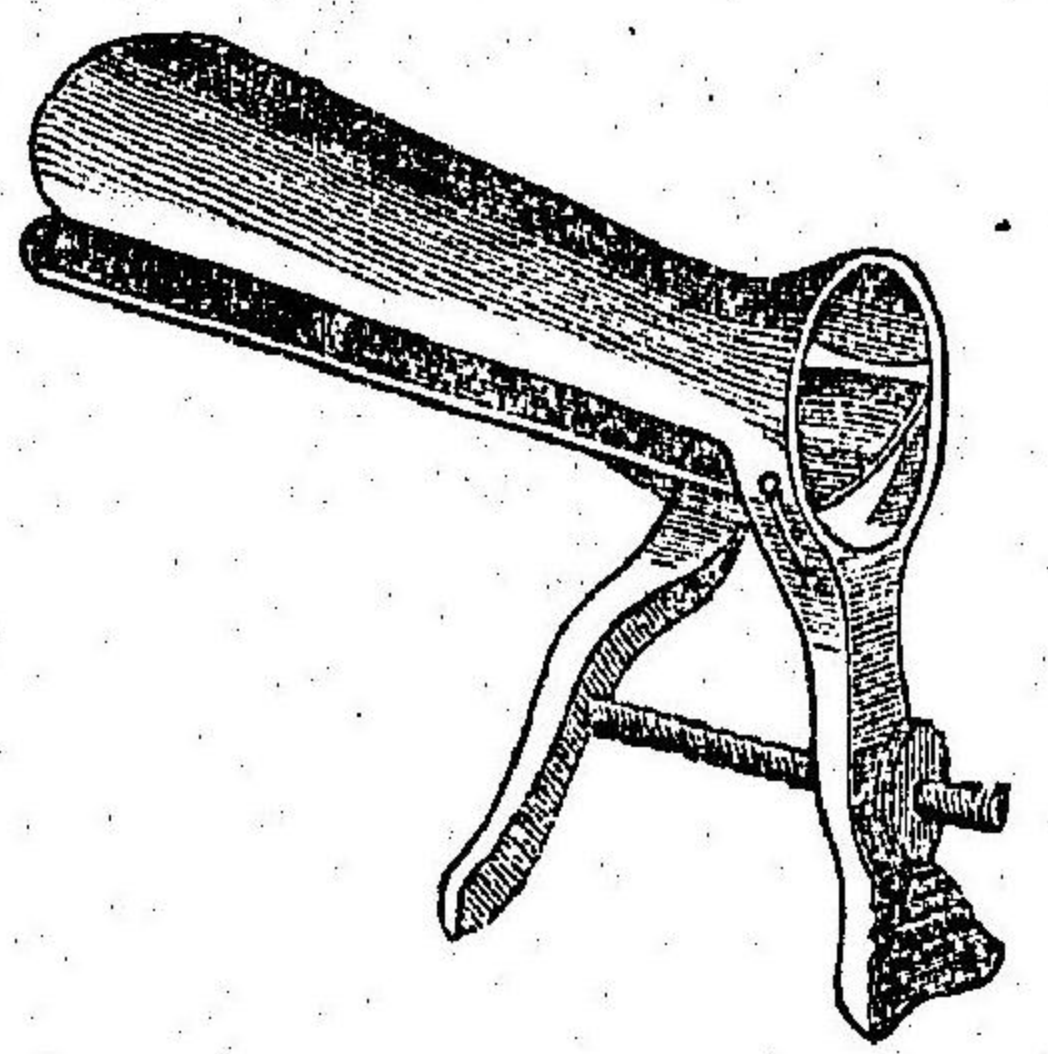
(口)双瓣鏡一名クスコ氏鏡 此器ハ前後二瓣ヨリ成リ基底ニ於テ互ニ聯接シ螺旋裝置ニ由テ隨意ニ開閉シ得ヘキモノニシテ其全形ハ第八圖ニ示スカ如シ

「クスコ氏鏡」ヲ示ス

双瓣鏡ノ用法

用法ハ先ツ兩瓣ヲ閉收シ法ノ如ク之ヲ温メ且ツ外面ニ油ヲ塗リ其端ヲ腔口ニ臨マシメ少シク後方ニ向テ送入シ殆ト腔底ニ達スルニ及テ試ニ少シク兩瓣ヲ開カシムヘシ而シテ腔部若シ兩瓣ノ間ニ現出セサレハ更ニ其端ヲ後方ニ向ハシメ然ル後ニ螺旋ヲ捻轉セハ大底腔部ヲ現出スルヲ得ヘシ但シ此器ヲ進入シ其螺旋ヲ捻轉スル時ニ當テ偶然陰毛ノ纏絡スルトアリ

第八圖



双瓣鏡ノ利
益

或ハ腔内ニ於テ二瓣ヲ閉收スルノ際其間ニ粘膜ヲ狭ムトアリ此等ノ諸件ハ患者ヲシテ無用ノ痛楚ヲ覺ヘシメ大ニ信用ヲ失フトアリ慎マサルヘカラス

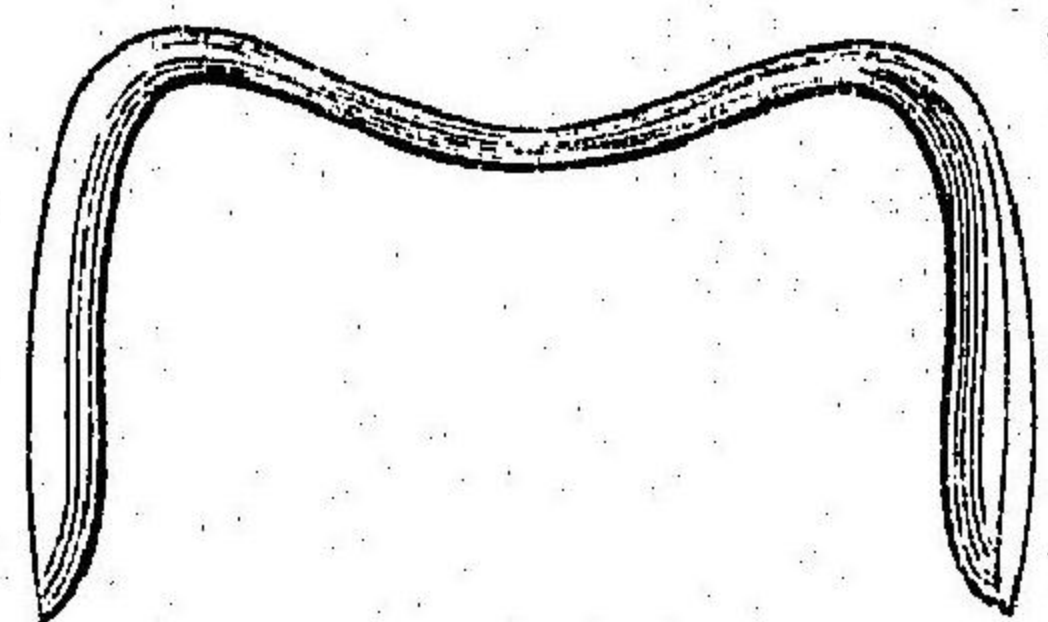
此器ハ腔底ヲ緊張シ腔腔ヲ擴大シ且ツ子宮腔部ヲシテ腔口ニ近カシムルノ利アリ又之ヲ使用スルノ際其螺旋ヲ緩ムルニアラサレハ腔ヨリ脱出スルヲ無キヲ以テ介者ヲ要セサルノ便アリ

鷲嘴狀鏡

(ハ)鷲嘴狀鏡一名シムス氏鏡 此鏡 第九圖

「シムス」氏鏡ヲ示ス

ハ一柄ニシテ大小二鏡ヲ具ヘ腔ノ廣狹ニ應シテ適用スヘキノ便アリ其柄ハ少シク彎曲シ各鏡ハ殆ト直角ヲ以テ之ニ連リ其前面ハ凹陷シ後面ハ凸隆ス其全形ハ第九圖ニ示スカ如シ



欠

MISSING

「ノーゲバウエル」氏
鏡ヲ示ス

第十一圖

「ノーゲバウエル」氏
鏡ヲ示ス

リ而シテ後瓣ハ廣
ク前瓣ハ狭シ故ニ
使用ノ際前瓣ハ後
瓣ノ中ニ入ルモノ

トス第十一圖ノ甲

ハ此器ノ全体ヲ示

シ乙ハ之ヲ横斷シ

テ前後二瓣ノ關係

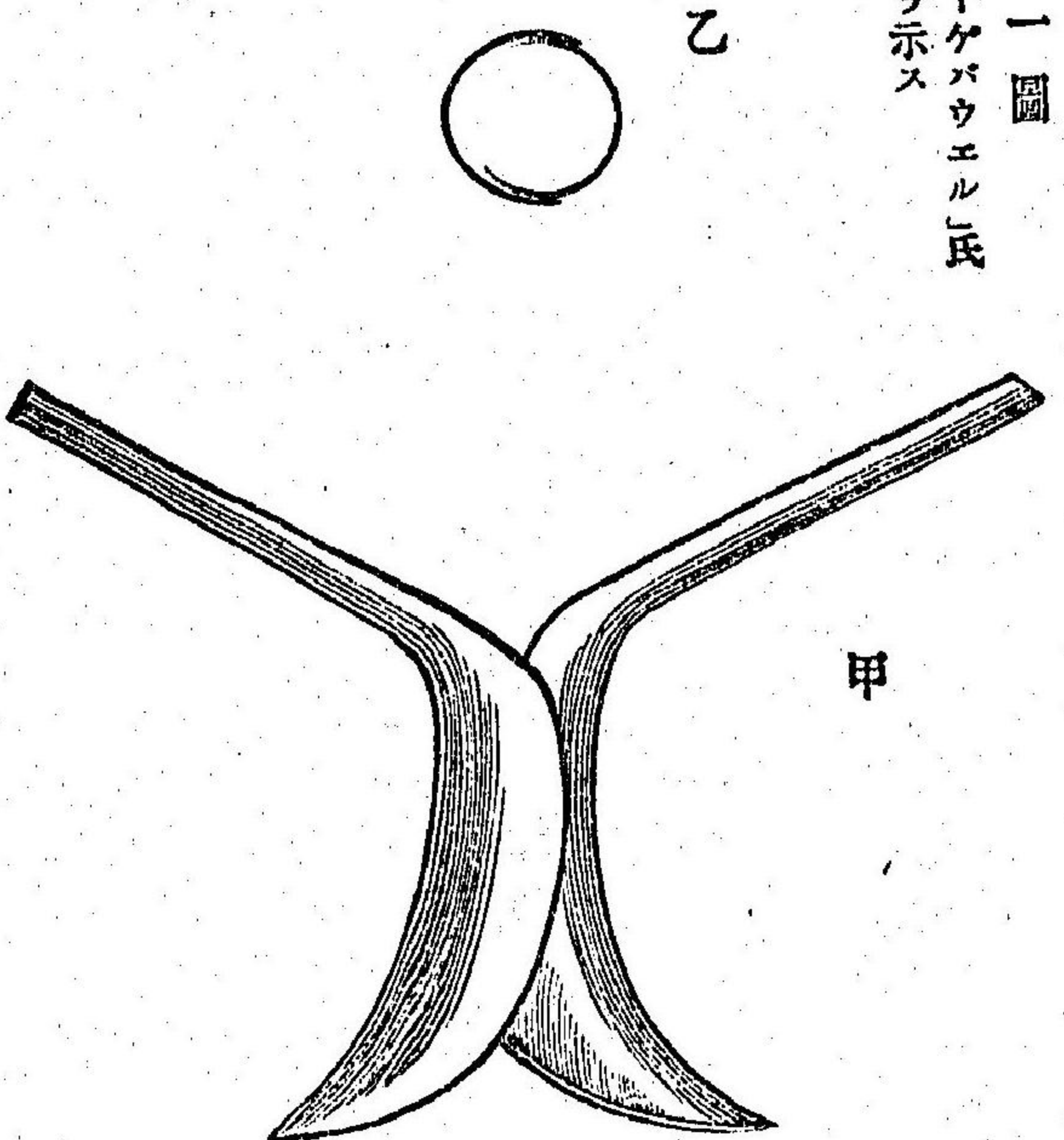
ヲ示ス

此器ヲ使用スルニ

ハ法ノ如ク兩瓣ヲ温メテ之ニ油ヲ塗り而シテ先ツ後瓣ヲ取り其凸面
ヲ腔ノ後壁ニ觸レシメテ之ヲ送入シ其末端ヲシテ後穹窿ニ達セシメ

次ニ前瓣ヲ取り其凸面ヲ腔ノ前壁ニ觸レシメテ之ヲ送入シ其末端ヲ

「ノーゲバウ
エル」氏鏡ノ
用法

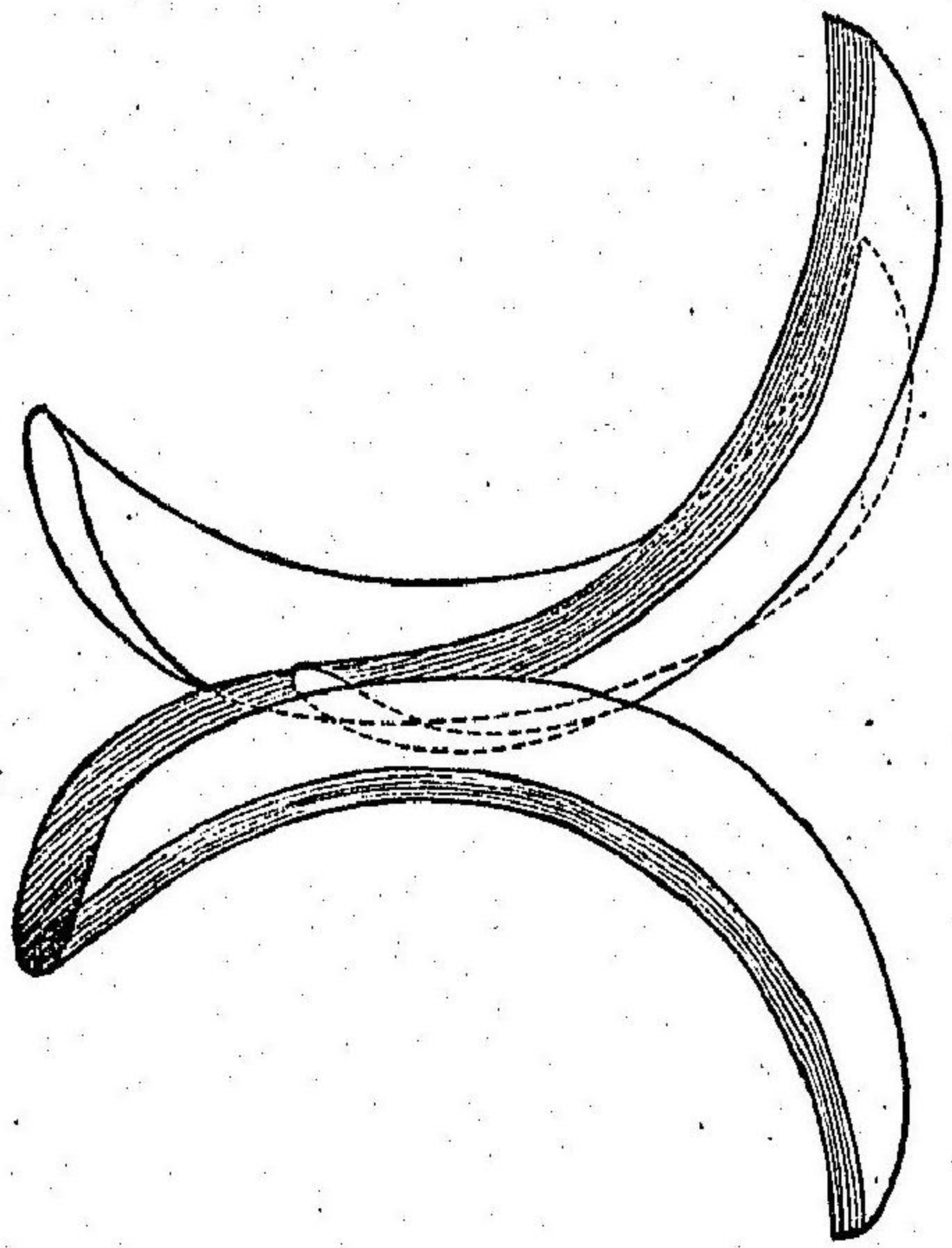


半月狀鏡

子宮鏡ヲ用
テ注目スヘ
キ要件

シテ前穹窿ニ達セシム
ベシ「バアンス」氏ハ此器
ヲ改造シテ第十二圖ニ
示スカ如キ者ヲ製作シ
之ニ命スルニ半月狀鏡
ノ名ヲ以テセリ
此器ハ子宮体腔及ヒ頸
管等ニ藥物ヲ施ス時ニ
使用スルニ便ナリトス

第二十圖



「バアンス」氏半月狀鏡ヲ示ス

凡ソ子宮鏡ヲ以テ腔及ヒ子宮ヲ檢スルニ方リ注目スヘキ要件ハ左ノ
如シ

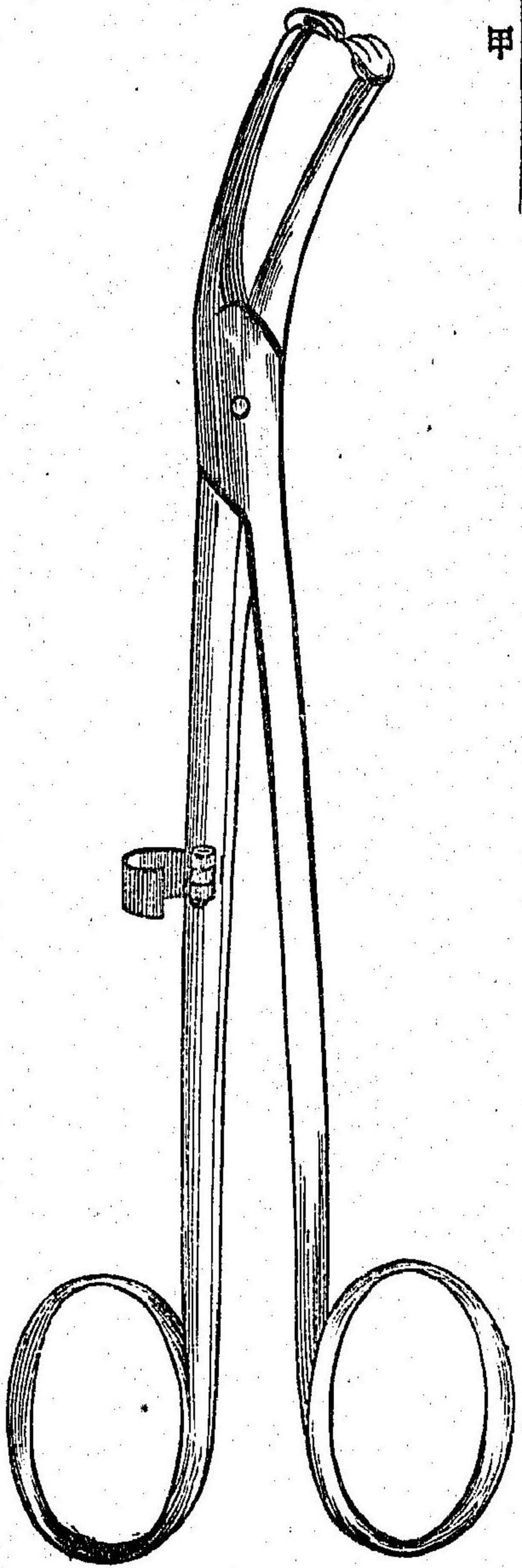
- (イ) 腔粘膜ノ現色、充血其他一般ノ常況及ヒ病狀
- (ロ) 子宮腔部外口及ヒ口唇ノ現色、形狀、大小及ヒ諸般ノ病狀

鉤狀鑷子及
ヒ其用法

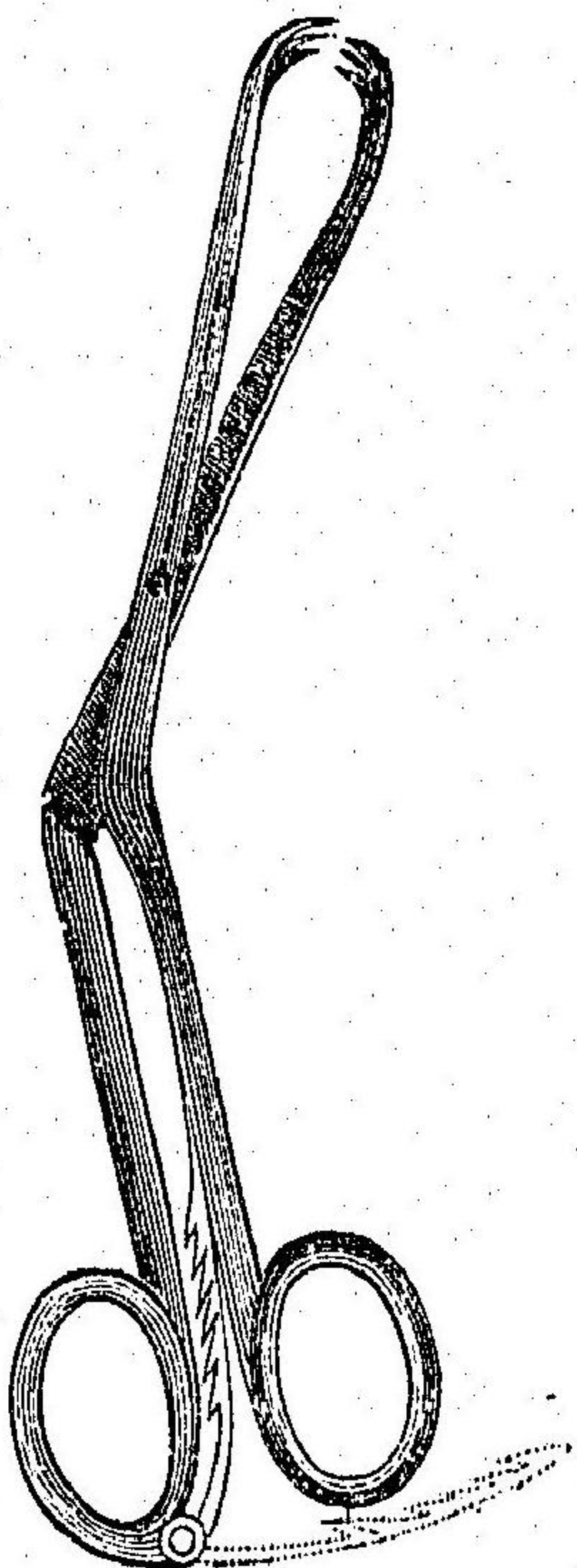
(ハ) 頸管粘膜炎ノ現色、分泌物及ヒ種々ノ病狀
○ 鉤狀鑷子及其用法 子宮ハ能ク上下左右前後ニ移動シ上方ニ向テ
ハ三センチメートルヨリ五センチメートルニ至ルノ間ニ壓送スルヲ
得ヘシ又適宜ノ器械ヲ以テ之ヲ下方ニ牽引スレハ其外口ヲシテ腔口
ニ現出セシムルヲ難カラス蓋シ斯ノ如ク人工ニ子宮ヲ下行シ得ヘキ

第十三圖

「シムプソン」氏鉤狀鑷子ヲ示ス



乙 「ハルト」氏鉤狀鑷子ヲ示ス



ナ以テ察病施治ノ際所謂鉤狀鑷子ヲ用ヒ之ヲ撮持牽引シテ下行セシムルヲアリ

鉤狀鑷子ノ概形ハ尋常剪刀ニ類スレモ刃ヲ有セスシテ末端ニ鉤齒ヲ具ヘ其把柄ニハ固定裝置ヲ備フ第十三圖ノ甲ハ「シムプソン」氏ノ創造ニ係ル者ニシテ輕度ノ骨盤彎曲ヲ有ス但シ此彎曲ハ實際必要ナラス乙ハ「ハルト」氏ノ器械ニシテ把柄ニ彎曲アリ是レ此器ヲ使用スルニ方リ術者ノ手指ヲシテ臍口正面ノ外ニ在ラシムル爲ニ設ケタルモノト

鉤狀鑷子ノ用法

鉤狀鑷子使用ノ目的

ス

鉤狀鑷子ヲ使用スルニ二法アリ一ハ一手ノ示中二指ヲ臍内ニ送入シテ子宮前唇ニ達セシメ他手ニ此器ヲ取り其二指ニ沿テ之ヲ進入シ前唇ニ達スルノ後之ヲ鉤住シテ下方ニ牽引スヘク一ハ先ツ「シムス」氏鏡ヲ用テ臍部ヲ露出シ次ニ此器ヲ以テ前唇ヲ鉤住牽引スヘシ斯ノ如ク子宮ヲ撮持牽引スルモ疼痛ヲ發スルヲナシ又之ヲ牽引スルカハ一定シ難シト雖モ通例單ニ手力ヲ止メス徐々ニ牽引スルヲ以テ足レリトス若シ子宮ノ充分ニ下行セサルヲアルモ決シテ強力ヲ用テ牽引スヘカラス何トナレハ之カ爲ニ甚シク其撮持部ヲ毀傷スルノ恐アレハナリ

此器ハ診斷及ヒ施術ニ使用スルモノニシテ其目的ヲ概記スレハ左ノ如シ

(イ) 肚腹ニ瘤腫ヲ存スル者ニ於テ其子宮ト連絡スルヤ否ヲ診斷スル

カ爲ニ用ユルヲアリ即チ一手ヲ以テ腹部ヨリ瘤体ヲ握持シ他手ニ
 此器ヲ執リ之ヲ以テ子宮ヲ下方ニ牽引スヘシ若シ其瘤体子宮ト共
 ニ下行スルヲ認メハ則チ二者ノ連絡スルヲ察スヘキナリ
 (ロ)直腸ヨリ内生殖器ヲ觸診スルト同時ニ此器ヲ使用スルヲアリ即
 チ一手ニ此器ヲ執リテ子宮ヲ下方ニ牽引シ同時ニ他手ノ示指ヲ以
 テ直腸ヨリ觸診ヲ行フルハ第一子宮移動ノ度ヲ察スルヲ得ヘク第
 二薦骨鞅帶ノ收縮ニ起因セル子宮前屈症ニ在テハ明ニ其鞅帶ノ緊
 張スルヲ認ムヘク第三子宮後面ノ小瘤腫ニ在テハ充分ニ其面ヲ檢
 スルヲ得ヘク第四單純ノ直腸觸診ニ於ルヨリハ卵巢ノ現狀及ヒ子
 宮ノ長徑ヲ檢スルヲ一層精密ナルヲ得ヘシ
 (ハ)此器ハ子宮ニ壓搾海綿若クハ莖狀「ベサリー」ヲ送入シ或ハ子宮口
 ヲ切開シ或ハ子宮腔部若クハ其全体ヲ切除スル等總テ腔ヨリ子宮
 ニ手術ヲ施スニ方テ最モ便益アルモノトス

鉤狀鑷子ノ
禁忌

此器ハ此ノ如ク有用ナリト雖モ之カ施用ヲ禁スヘキ疾患亦鮮カラス
 即チ骨盤ノ腹膜若クハ蜂窠織ニ急性炎ヲ發スル者喇叭管ノ膨脹骨盤
 血腫及ヒ既ニ増長セル子宮癌腫等はナリ

子宮消息子

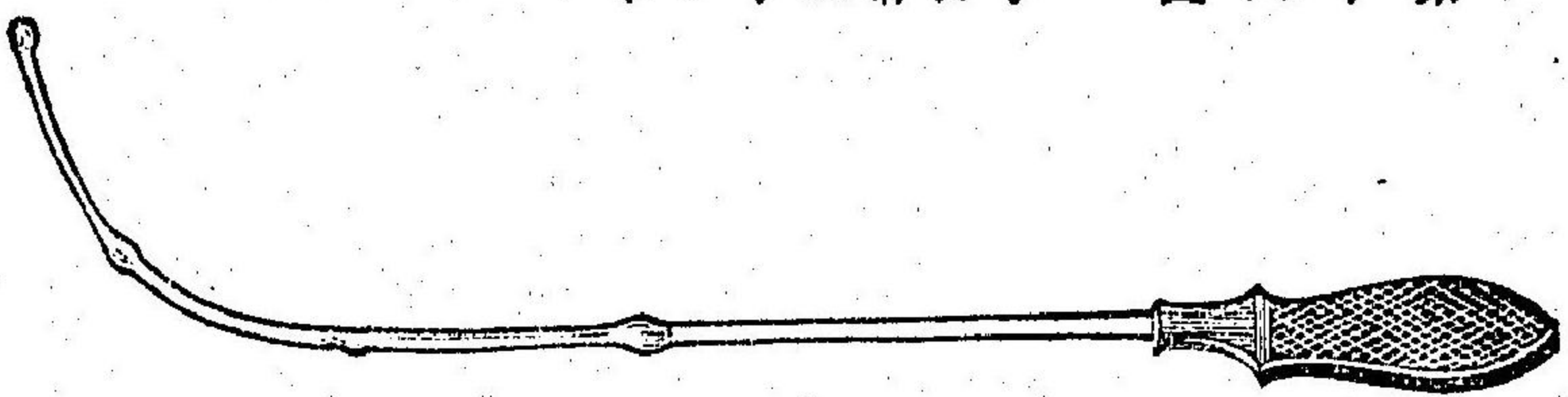
○子宮消息子 子宮頸管ノ下部ハ單ニ子宮鏡ヲ用テ覗ヒ得ヘシ是レ
 器械ノ爲ニ腔壁ノ緊張スルヲ以テ頸管ノ粘膜自ラ外翻スルニ因ル然
 レモ頸管ノ上部及ヒ子宮体腔ノ如キハ子宮鏡ヲ以テ其實況ヲ知ル
 能ハス稀レニハ手指ヲ以テ直ニ觸診シ得ルヲアレモ分娩後等ニ於ケ
 ルカ如ク頸管ノ擴張セル者ニ非サレハ然ルヲ能ハス是レ子宮ノ内狀
 ナ檢査スルニ方リ子宮消息子ヲ以テ缺クヘカラサル要器ト爲ス所以
 ナリ

「シムブソン」
氏消息子

子宮消息子ハ種々アリト雖モ多クハ「シムブソン」氏ノ器械ヲ改變シタ
 ルモノニ係ル抑「シムブソン」氏消息子ハ隨意ニ屈伸シ得ヘキ鑲製ノ長
 杆ニシテ稍々弓狀ニ彎曲シ末端ハ球頭ヲ成シ其厚サ三「ミリメートル」

乃至五[ミリメートル]アリ他端ハ扁平ナル把柄ヲ有シ全器ノ長サ三十センチメートルトス把柄ノ一面ハ粗糙ニシテ末端ノ方向ニ一致ス故ニ此器ヲ子宮内ニ挿入スル時ニ方テハ其柄ノ粗糙面ヲ見テ以テ末端ノ方向ヲ察知スルヲ得ルナリ而シテ球頭ヨリ三、七センチメートル許ヲ距ル處ニ截痕アリ又六、二五センチメートルノ處ニ隆起アリ是レ尋常子宮内腔ノ深サヲ示スナリ又此隆起ヨリ二、五センチメートル乃至一、二五センチメートル毎ニ度ヲ劃シ遂ニ末端ヨリ二、二五センチメートルノ處ニ至テ止ム

第四十圖 子宮消息ヲ示ス



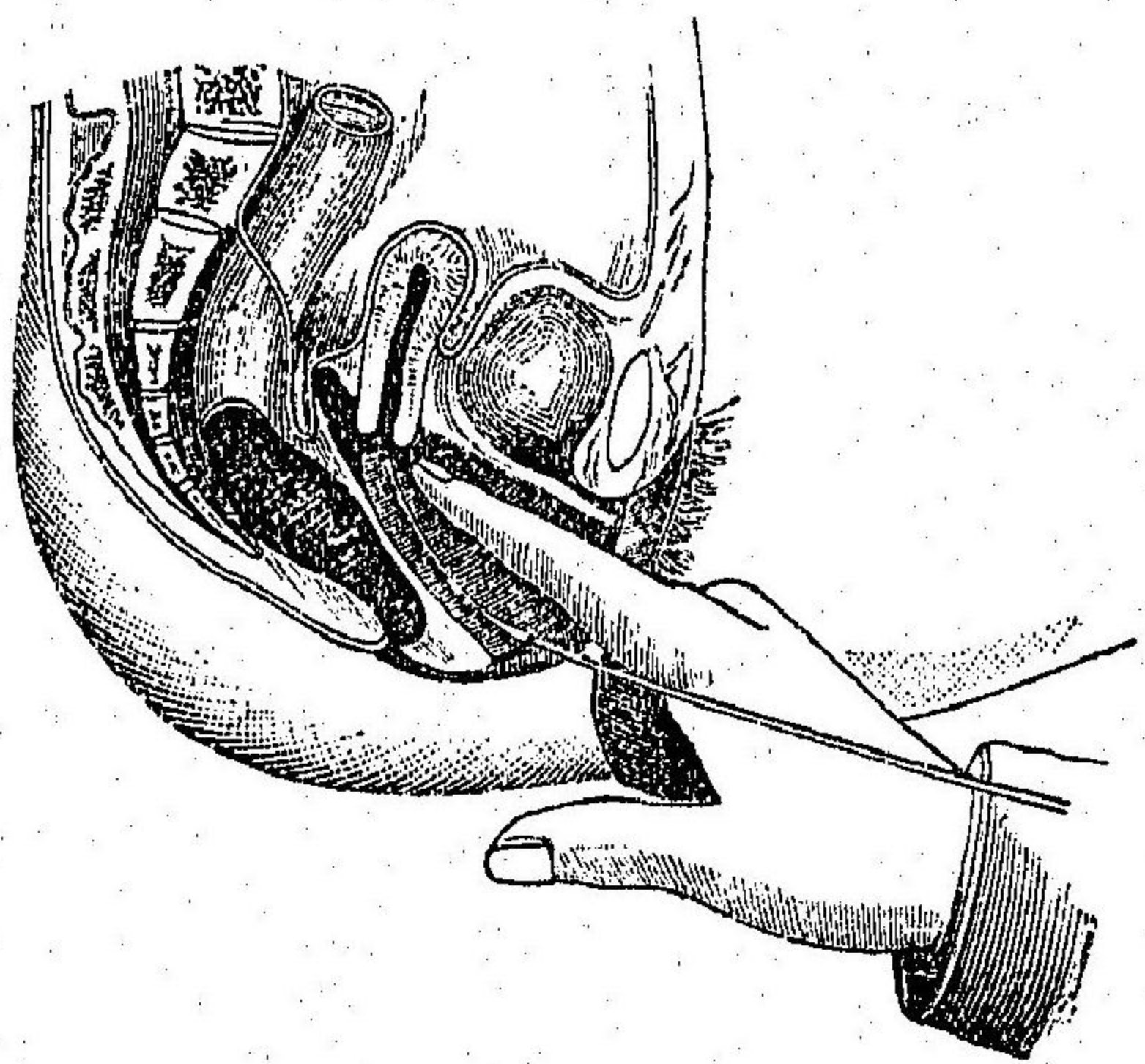
消息子使用上ノ注意

此器ヲ使用スルニ方テ二三ノ注意スヘキ要件アリ檢者若シ之ヲ銘記セサレハ患者ヲシテ大害ヲ蒙ムラシムルヲアリ今其要ヲ掲グレハ左ノ如シ

- (イ) 妊婦ニ此器ヲ使用スレハ墮胎ヲ來ズノ害ヲ免レス故ニ月經閉止シ或ハ他ニ妊娠ノ徵候アルルハ此器ノ使用ヲ猶豫セサルヘカラス時トシテハ妊娠ノ初期ニ少許ノ血液ヲ漏出スルヲアリ若シ誤テ之ヲ月經ト着做シ此器ヲ使用スルルハ不幸ヲ來スト必セリ極テ希ニハ妊婦ニ此器ヲ使用シテ害ヲ致サ、リシ例アリ是レ幸ニ内外脱落膜ノ間ニ送入セシニ因ル
- (ロ) 子宮、卵巢、骨盤、腹膜若クハ其蜂巢織ノ急性炎症ニハ此器ヲ使用スヘカラス何トナレハ之カ爲ニ甚シキ痛楚ヲ起シ或ハ出血ヲ來シ或ハ病勢ヲ増スノ虞アレハナリ
- (ハ) 子宮頸若クハ子宮体ノ癌腫ニ此器ヲ使用スレハ組織ヲ損破シ甚

消息子ノ用法

シキ出血ヲ誘起スルコトアリ宜シク之レヲ禁スヘシ
 此器ヲ以テ子宮ノ内況ヲ検査セント欲セハ患者ヲシテ仰臥位置若シ
 クハ左側位置ヲ
 取ラシメ檢者ハ
 先ツ右手ノ示指
 ナ子宮外口ニ達
 セシメ次ニ左手
 ニ消息子ノ把柄
 ナ執リ施用ニ先
テ其器ヲ
温メ且ツ油ヲ
塗ルヲ要ス其
 末端ヲ前上方ニ
 向ケ右手ノ示指
 ニ沿テ子宮口ニ



第十五圖

子宮消息子ヲ子宮口ニ導致スル式ヲ示ス

導致シ第十五圖 謹慎シテ其中ニ送入スヘシ通常其器ノ二、三センチメ
 ートルハ容易ニ頸管内ニ入ルト雖モ其端已ニ内口ニ達スレハ少シク
 抗抵アルヲ覺フ是レ子宮ノ内腔ハ此部ニ於テ稍方向ヲ變シテ前方ニ
 向ヒ且ツ最モ狹隘ナルニ因ル此時徐々ニ把柄ヲ轉シテ後方ニ運ブモ
 ハ末端自ラ子宮内腔ノ方向ニ一致スルヲ以テ能ク内口ヲ通過スルナ
 リ健体ニ在テハ斯ノ如ク末端已ニ内口ヲ通過スレハ之ヲ子宮底ニ達
 セシムルコト敢テ難カラス然レモ已ニ五センチメートル許ヲ送入セシ
 後ハ極テ謹慎シテ之ヲ進入スルヲ要ス何トナレハ若シ子宮ノ器質ニ
 變化アリテ軟弱ナルモハ間々此器ノ爲ニ穿通セラル、ト之レ無キニ
 アラサレハナリ總テ此器ヲ送入スルニ方テハ假令其通路ニ抗抵アル
 モ必ス強力ヲ用ユヘカラス時トモハ「シムス」氏鏡ヲ以テ腔部ヲ露出シ
 鉤狀鑷子ヲ以テ其前唇ヲ撮住牽下シ然ル後此器ヲ送入スルコトアリ
 上記ノ方法ニ從ヒ此器ノ送入ヲ試ムルモ通過シ易カラサルコトアリ其

子宮外口ノ
狹窄若クハ
閉鎖

本器送入ノ
方向失宜

頸管ノ狹窄
若クハ小瘤
腫

消息子端ノ
突入

目ヲ掲クレハ左ノ如シ

(一) 子宮外口ノ狹窄若クハ閉鎖 此器ヲ使用スルニ方テハ先ツ腔内觸診法ヲ行ヒ或ハ子宮鏡ヲ用ヒ以テ外口ノ狀況ヲ檢スルヲ緊要トス何トナレハ希ニハ外口ノ閉鎖シ或ハ狹窄スルヲアレハナリ

(二) 本器送入ノ方向失宜 現在セル子宮内腔ノ方向ニ從テ此器ヲ送入スルニ非サレハ其体内ノ内部ニ達スルヲ得ス故ニ先ツ腔内觸診法ヲ行テ子宮腔部ノ現狀ヲ審ニシ之ニ應シテ豫メ其送入ノ方向ヲ決セサルヘカラス

(三) 子宮頸管ノ狹窄若クハ小瘤腫 消息子己ニ外口ニ入ルモ頸管内ニ狹窄若クハ小瘤腫アリテ其進行ヲ障礙スルヲアリ檢者宜シク機ニ臨テ器械ヲ換ヘ或ハ其彎曲ヲ變シ或ハ方向ヲ轉シテ送入スルヲ試ムヘシ

(四) 頸管内面ノ凹窩中ニ消息子端ノ突入 頸管ノ内面ニハ許多ノ粘膜炎

子宮内口ノ
閉鎖或ハ狹
窄

皺襞アリ之ヲ活樹ト名ク此皺襞ノ間ニ存スル凹窩中ニ消息子端ノ突入シテ子宮体内ニ達セサルヲアリ斯ノ如キ困難アルルハ少シク器械ヲ抽出シ稍々其末端ノ方向ヲ變シテ送入スレハ大抵其目的ヲ達スルヲ得ヘシ

(五) 子宮内口ノ閉鎖或ハ狹窄 子宮内口ハ外口ヲ距ル_二五センチメートル_一乃至_三七五センチメートル_一ノ處ニアリ此内口ハ子宮内腔ノ最も狹隘ナル部ニシテ殊ニ未産婦ニ在テハ少シク彎曲スルカ故ニ消息子端此部ニ至テ通過シ難キ_一常ニ多シ加之時トシテハ疾病ノ爲ニ永久ノ狹窄ヲ起シ或ハ一時ノ痙攣性縮小ヲ來シ以テ器械ノ通過ニ抗抵スル_一アリ斯ノ如キ困難アルモ徐々ニ器械ノ把柄ヲ後方ニ運ヒ同時ニ其末端ヲ以テ内口部ニ輕キ壓迫ヲ持長スルルハ多クハ通過スルヲ得ヘシ若シ尙ホ其目的ヲ達シ得サルルハ宜シク小器械ヲ選ヒ更ニ其送入ヲ試ミサルヘカラス但シ既産婦ニ在テハ内口ノ抗抵少ナキ_一常

子宮内腔ノ
屈曲

トス若シ内口ノ閉鎖セル者ニ在テハ之ヲ切開スルニ非サレハ本器ヲ挿入シ得ヘカヲサルコト固ヨリ言テ俟タス

(六)子宮内腔ノ屈曲 子宮若シ屈曲スレハ其内腔モ亦隨テ屈曲セサルヲ得ス故ニ此ノ如キ症ニ消息子ヲ使用スル時ニ方テ其末端ノ屈曲部ニ障礙セラレ易キハ理ノ當ニ然ルヘキ所トス故ニ屈曲ニ本器ヲ送入セント欲セハ豫メ先ツ腔内觸診法ヲ行ヒ以テ其症ノ前屈ナルカ將ダ後屈ナルカヲ審了シ且ツ屈曲ノ銳鈍多少ヲ判定シ之ニ應シテ本器ヲ適宜ニ彎曲シ正當ノ方向ニ於テ送入スルニ非サレハ容易ニ其目的ヲ達スルコト能ハス而シテ前屈症ニ在テハ本器ノ末端ヲ前上方ニ向ケテ送入シ已ニ屈曲部ニ達スルニ及ヒ其把柄ヲ後方即チ會陰ニ向テ運ラズヘク後屈症ニ在テハ其末端ヲ後上方ニ向ケテ送入シ已ニ屈曲部ニ達スレハ其把柄ヲ前方即チ耻骨縫合ニ向テ運ラズヘシ但シ後屈症ニ在テハ手指ヲ以テ後穹窿ヨリ屈曲セル子宮底ヲ壓上スルルハ大ニ本

消息子ヲ以テ診定スヘキ疾病若クハ狀況ヲ子宮外口及ヒ内口ノ變常

子宮内腔中軸ノ方向ヲ變スル者

器ノ進入ヲ助クル益アリ又本器ヲ送入シ易カラサル者ニ在テハ前屈症ト後屈症トノ別ナク鉤狀鑷子ヲ以テ子宮前唇ヲ撮持牽引シテ之ヲ送入スルコトアリ

子宮消息子ハ其用甚々大ニシテ診斷ニ用ユヘク又治療ニ施スヘシ今本器ヲ以テ診定シ得ヘキ疾病若クハ狀況ヲ左ニ掲ク

(イ)子宮外口及ヒ内口ノ變常

外口ノ鎖閉若クハ狹窄

内口ノ鎖閉若クハ狹窄

内口及ヒ外口ノ鎖閉若クハ狹窄ハ先天ノ畸形ニ因ル者アリ頸部ノ手術若クハ分娩ノ結果ニ因ル者アリ但シ内口ノ後天閉鎖ハ老婦ニ多シトス

(ロ)子宮内腔中軸ノ方向ヲ變スル者

後轉症

前轉症

側方傾斜即子側轉症

此三症ハ消息子ヲ以テ檢スルニ各内腔中軸ノ方向ヲ變スルヲ認ムヘシ即チ甲ニ在テハ後上方若クハ後方ニ向ヒ乙ニ在テハ前上方若クハ前方ニ向ヒ丙ニ在テハ左上方若クハ右上方ニ向フ者ナリ

(ハ)子宮内腔ノ屈曲スル者

後屈症

前屈症

子宮ノ屈症ニ在テハ其内腔モ亦自ラ彎曲スルモノニシテ乃チ其診斷上ニ消息子ヲ使用スルノ目的ハ前屈後屈ノ二症ヲ判知シ各症ニ於ケル屈曲ノ銳鈍多少ヲ認定シ之ヲ矯正スルノ難易ヲ豫察シ屈症類似ノ疾患ヲ鑑別スルニ在リ而シテ甲ハ本器進入ノ方向ニ據テ之ヲ判知ス即チ前屈症ニ在テハ其末端前上方若クハ前方ニ向テ進入シ後屈症ニ

子宮内腔ノ
屈曲スル者

子宮内腔ノ
延長スル者

在テハ全ク之ト反對ノ方向ニ進入スルモノトス乙ハ本器ニ附與スル所ノ彎曲ノ銳鈍多少ニ據テ認定ス例之子宮ノ屈曲愈銳ナレハ本器ノ彎曲モ亦隨テ愈銳ナルヲ要スルカ如シ丙ハ子宮内ニ本器ヲ送入スルノ後其把柄ヲ廻轉スルノ難易及ヒ子宮底部ノ現在位置ヲ退去シテ本位ニ復スルノ難易ニ據テ豫察ス例之後屈セル子宮ニ本器ヲ送入シ次テ之ヲ廻轉シ其把柄ノ粗糙面此面ハ則チ末端ノヲ示ス者ナリヲシテ前方ニ向ハシムルト困難ナルノミナラス同時ニ手指ヲ以テ探查スルニ後穹窿ニ現在セル瘤体即チ子宮底ノ退去セサルハ其矯正ノ困難ナルヲ示スカ如シ丁ハ子宮屈症ノ徵候アルモ内腔ノ方向ニ異常ナキヲ以テ此症ニアラサルトテ鑑別ス例之子宮後壁ニ纖維瘤アリテ後穹窿ニ後屈セル子宮底部ニ類似スレハ本器ヲ用テ其内腔ヲ檢スルニ其常ヲ變セサルヲ以テ後屈症ニアラサルトテ知ルカ如シ

(ニ)子宮内腔ノ延長スル者

分娩

子宮肥大

頸部肥大

子宮纖維瘤

子宮ポリプス

子宮体癌腫

分娩後ノ子宮

分娩後直ニ子宮ヲ檢スレハ其深サ十五乃至二十センチメートルアリ然レモ時日ヲ經ルニ從テ漸次ニ減縮シ第六週乃至第八週ニ至テハ殆ト故形ニ復スルモノトス故ニ分娩ヲ隱匿シ若クハ分娩偽詐ノ疑アル者ヲ鑑定スルニ方テハ必ス消息子ヲ使用シテ子宮ヲ檢査シ以テ其眞偽ヲ判定スルノ一助ト爲スヘシ又總テ既産婦ノ子宮ハ未産婦ニ比スレハ少シク長大ナルカ故ニ其内腔モ亦隨テ稍々長キヲ常トス檢査ノ際意ヲ留メサルヘカラス

子宮肥大

子宮肥大ハ子宮ノ慢性充血慢性炎、流産及ヒ分娩後ノ收縮不全等ニ起因スルモノトス然レモ其内腔ノ延長ハ甚タ著シカラスシテ其全長大抵八センチメートルヲ超ユルコトナリ

頸部肥大

頸部肥大ハ分娩ノ有無ニ關セス屢々見ル所ノ一症ニシテ其甚シキニ至テハ頸部増長下垂シテ腔口ニ現出シ子宮全腔ノ深サ十乃至十五センチメートルニ達スルコトアリ然レモ子宮体部ハ殆ト常態ヲ失ハサルヲ常トス此病ハ恰モ子宮墜脱症ニ類似スレモ消息子ヲ用ヒテ之ヲ檢スレハ其鑑別甚タ困難ナラス何トナレハ頸部肥大ニ在テハ必ス内腔ノ延長スルヲ發見スレモ墜脱症ニ在テハ然ルコトナキヲ以テナリ

子宮纖維瘤

子宮纖維瘤ノ粘膜下ニ生スル者ト組織間ニ發スル者トハ共ニ皆内腔ノ延長ヲ致シ易ク甚シキハ十五センチメートル以上ニ達スルコトアリ子宮ポリプスニ於ケル内腔延長ノ多少ハ其瘤ノ大小ニ從テ同シカラズ此症ニ消息子ヲ使用スルニ方テハ其末端ポリプス附着部ノ爲ニ障

子宮ポリプス

子宮体癌腫

礙セラレ之ヲ子宮底ト誤認スルヲナキニアラス檢者宜シク意ヲ用ユヘシ

子宮体癌腫ハ潜在シテ腔部ニ異常ヲ呈セス而シテ著シク内腔ノ長サヲ増加スルヲアリ但シ本病ノ疑アル者ニハ猥リニ消息子ヲ用ユヘカラス是レ甚シキ出血ヲ來スノ虞アレハナリ

子宮内腔ノ短縮スル者

(ホ)子宮内腔ノ短縮スル者

子宮發育不全

分娩後子宮收縮過常

子宮萎縮

子宮内翻症

子宮ノ發育不全

子宮ノ發育不全ニ在テハ其全体甚々小ニシテ月經未タ來ラス或ハ既ニ來ルモ極テ僅少ニシテ受胎セサルヲ常トス又双子宮ニ在テハ一ハ發育完全ニシテ一ハ不全ナルヲアリ

子宮收縮過常

分娩後子宮收縮過常トハ分娩後子宮組織ノ脂肪變性及ヒ其吸收機ノ過度ナルニ因テ其全体ノ甚シク縮小スルヲ云フ通例月經不調及ヒ不妊ヲ兼發スルモノトス

子宮萎縮

子宮萎縮ハ肺癆腺病及ヒ萎黃病等ニ罹ル者及ヒ老婦ニ於テ見ル所トス

此等ノ患者ニ消息子ヲ使用スルニ方テハ極テ謹慎ヲ加フルニ非サレハ薄弱ナル子宮壁ヲ穿通スルノ虞アリ

子宮内翻症

子宮内翻症ト子宮ポリプス^トハ診斷上混同シ易キモノトス何トナレハ兩症共ニ子宮口ニ圓形ノ瘤腫ヲ現出スレハナリ然レモ瘤體ト子宮口縁トノ間ニ消息子ヲ送入シ内腔ノ深サヲ檢スルニ内翻症ニ在テハ短縮スレモポリプス^トニ在テハ延長シ且ツ下腹部ニ於テ能ク子宮底ヲ觸知スルヲアルヲ以テ能ク兩症ヲ鑑別スルヲ得ヘシ但シ兩症合併スル者ニ在テハ其診斷甚々困難ナルヲアリ宜シク注意シテ消息子ヲ使

子宮内面ノ知覺銳敏ヲ兼ル者

用シ全時ニ直腸及ヒ下腹部ニ觸診法ヲ行ヒ以テ之ヲ診決スルヲ勉ムヘシ

(ハ)子宮内面ノ知覺銳敏ヲ兼ル者

子宮内膜炎

此症ニ消息子ヲ使用スレハ患者疼痛ヲ訴ヘ且ツ本器ノ末端ニ血液ノ附着スルヲ見ルヲ屢々之レアリ

(ト)子宮内面ノ不平粗糙ヲ存スル者

慢性子宮内膜炎

此症ニ在テハ子宮ノ内面自ラ不平粗糙ト爲ルカ故ニ徐々ニ消息子ヲ運動シ其末端ヲシテ内面ニ觸レシムレハ此狀況アルヲ感シ得ヘシ但シ此症モ亦消息子ノ使用中出血ヲ來シ易シ

子宮動不動

(チ)子宮動不動

消息子ヲ以テ子宮ノ動不動ヲ檢スルニハ檢者先ツ法ノ如ク本器ヲ子

子宮壁ノ厚薄

宮ニ送入シ次ニ左手ノ示中ニ指端ヲ子宮後唇ニ觸接シ本器ノ中央部ヲシテ其掌面ニ在ラシメ同手ノ拇指ヲ以テ之ヲ壓定シ然ル後右手ヲ以テ徐々ニ把柄ヲ動搖シ以テ子宮全体ノ動不動ヲ檢スヘシ

(リ)子宮壁ノ厚薄

後壁ヲ檢スルニハ先ツ法ノ如ク消息子ヲ子宮内ニ送入シ次ニ手指ヲ直腸内ニ送入シテ子宮ノ後壁ニ觸レ然ル後本器ノ末端ヲ後方ニ向ケ同時ニ把柄ヲ前上方ニ運ヒ以テ其末端ト直腸内ノ手指トヲ相對セシメ更ニ双方ヨリ壓迫ヲ試ムヘシ又前壁ヲ檢スルニハ一手ヲ以テ下腹部ヲ按壓シ同時ニ子宮内ニ送入セル本器ノ末端ヲ前方ニ向ケ且ツ其把柄ヲ後方ニ運ヒ以テ内外ヨリ壓迫ヲ試ムヘシ

子宮消息子ハ治療上ニモ缺クヘカラス

子宮消息子ハ前ニ記スルカ如ク只診斷上ノミニ限ラス治療上ニモ亦缺クヘカラス者トス而シテ治療上ニ本器ヲ使用スルノ目的ハ(イ)前屈症及ヒ後屈症ヲ矯正シ(ロ)轉症殊ニ後轉症ヲ矯正シ(ハ)頸管及ヒ内口

消息子ノ使
用ハ必シモ
安全ナラス

ノ狹窄ヲ擴張シ(ニ)子宮内面ニ藥液ヲ塗布スルニ在リ但シ此等ノ諸症
ニ之ヲ使用スルノ方法ハ各症ノ條ニ於テ縷述スヘシ
子宮消息子ノ使用ハ每常必ス安全ナリト謂フヘカラス即チ其使用ニ
由テ偶發スル危險ハ墮胎子宮穿通及ヒ粘膜損傷是ナリ
墮胎ノ危險ヲ避クルニハ本器ヲ使用スルニ先テ妊不妊ヲ確定スルヲ
要ス若シ妊娠ノ徵候アルルハ假令輕微ナルモ本器ノ使用ヲ猶豫セサ
ルヘカラス又子宮穿通ヲ起スノ例ハ唯希ニ見ル所トス故ニ尋常ノ注
意ヲ怠ラサレハ此難ヲ來ス_ト勿ルヘシ粘膜ノ損傷ハ少シク注意スレ
ハ之ヲ避クル_ト難カラス

子宮頸管擴
張法

○子宮頸管擴張法 凡_ソ分娩ノ前後ヲ除クノ外ハ子宮内ニ指診法即
チ觸診法ヲ施ス_ト罕ナリ然レ_レ時トシテハ八工ヲ用テ子宮頸管ヲ擴
張シ手指ニテ直ニ其内部及ヒ体腔ヲ探查シ以テ病症ヲ確定シ若クハ
治術ヲ實行スル_トアリ而シテ頸管ヲ擴張スルノ方法ハ種々一ナラス

ト雖_レ今之ヲ分テ三種トス

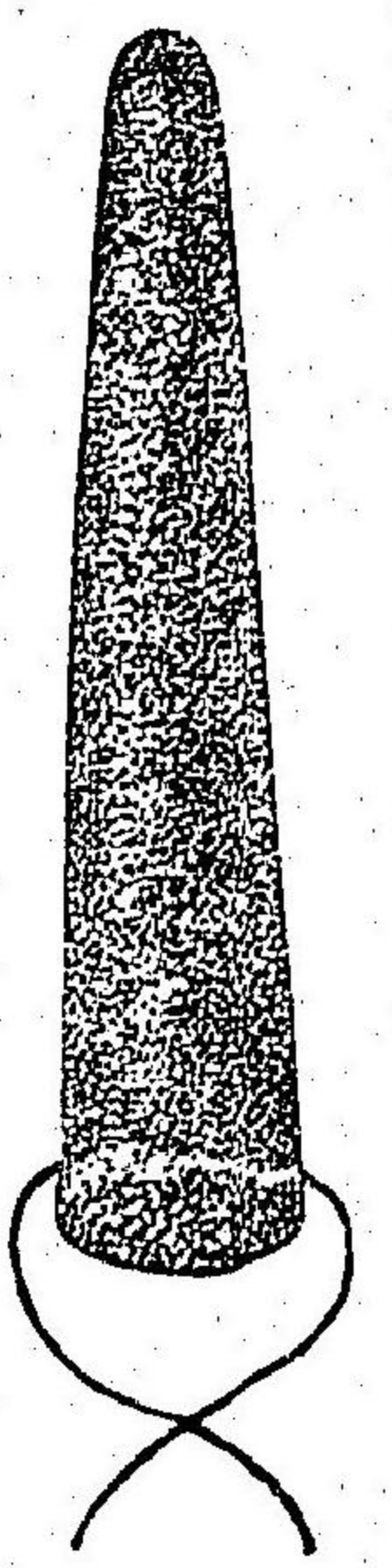
- (一) 壓搾海綿_ヲミナリア_ヲヂジテ_一タ_{以下}單ニ_ラミ_{若クハ}チユベロ_ト記ス
- (二) 護膜製及ヒ鑲屬製ノ器械ヲ以テ漸次ニ擴張スル法
- (三) 頸管ヲ切開スル法

(一) 壓搾海綿_ヲミナリア_ヲ若クハ_{チユベロ}ヲ以テ漸次ニ頸管ヲ擴張ス
ルノ方法ニ就テハ品質効用用法及ヒ危險ノ四項ニ分テ述フル_ヲ便ナ
リトス

品質

(イ) 品質 壓搾海綿ハ善

良緻密ノ海綿ヲ取リ十
分消毒シ壓搾乾燥シテ
圓錐形ト爲スモノニシ
之ヲ頸管ニ送入スレハ



第十六圖 壓搾海綿ヲ示ス

其部ノ漏氣ヲ吸收シテ自ラ膨脹シ以テ之ヲ擴張スルナリ本品ハ大小
 數種アリ機ニ臨テ適用スルノ便ニ充ツ又各個ノ基底ニ絲ヲ具フ是レ
 其膨脹スルノ後頸管ヨリ抽出スルノ用ニ供スルナリ其概形ハ第十六
 圖ニ示スカ如シ

「ラミナリア」及ヒ

甲

「チユベロー」モ亦
 壓搾海綿ノ如ク

未膨内送ル者ニ管ヲ入セ

漏氣ヲ吸收シ膨

脹スルヲ以テ頸

乙

管ヲ擴張スルノ

用ニ供ス第十七

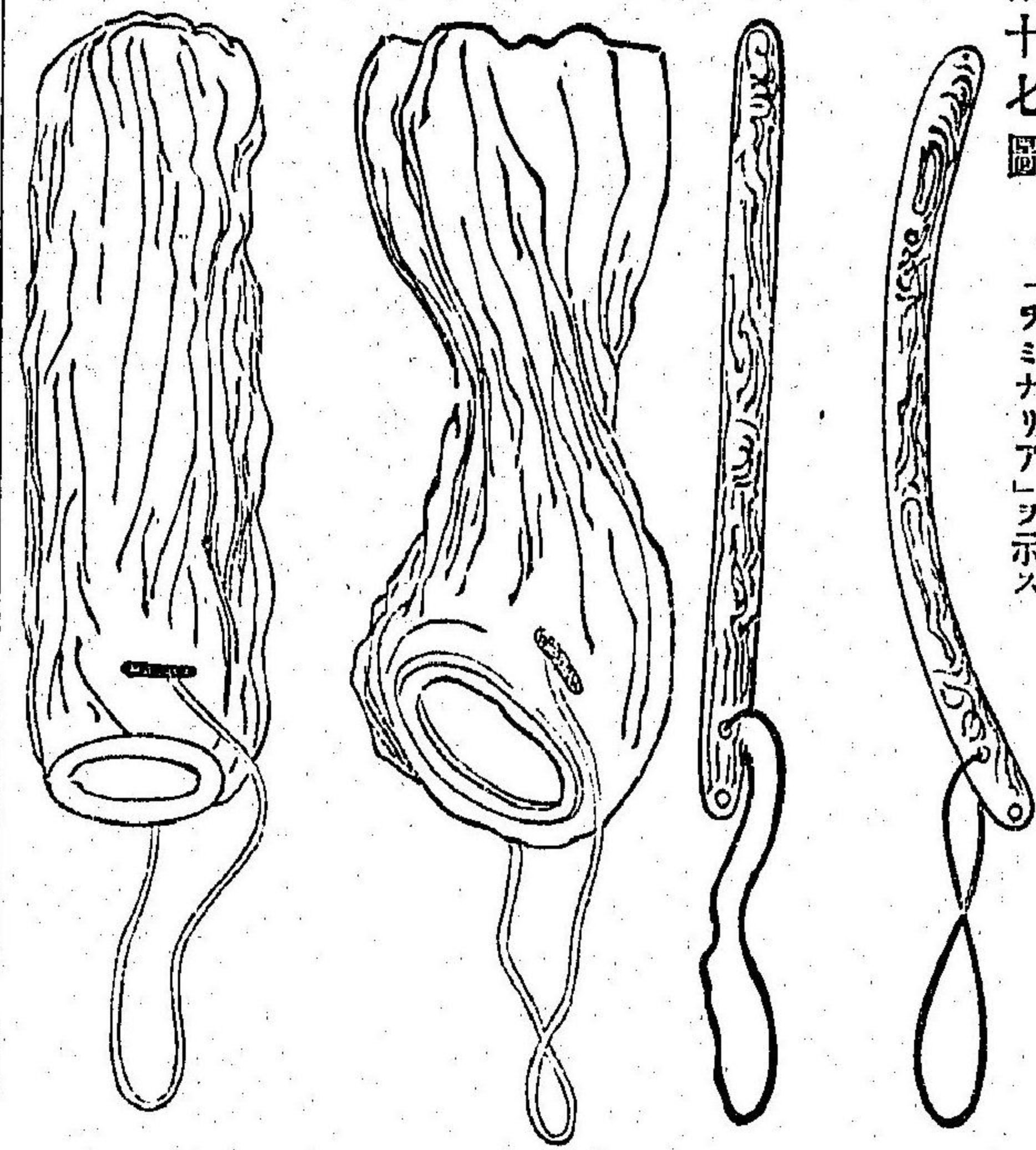
已膨内送者ニ管ヲ入セ

圖ノ甲ハ「ラミナ

リア」ノ未タ頸管

第十七圖

「ラミナリア」ヲ示ス



効用

内ニ送入セサル者ヲ示シ乙ハ已ニ送入ノ後膨脹シタル者ヲ示ス一説
 ニ據レハ「チユベロー」ハ他ノ二品ニ比スレハ膨脹スルヲ迅速ナリト云
 フ又「ラミナリア」及ヒ「チユベロー」ハ膨脹スルノ度壓搾海綿ニ及ハスト
 雖其形ノ小ナルヲ以テ一時ニ數個ヲ送入シ得ヘク殊ニ頸管ノ狹窄
 ナ治シ或ハ屈症ヲ復スルニハ此二品ヲ選用スルヲ可トス

(ロ) 効用 上記ノ三品ヲ以テ頸管ヲ擴張スルノ目的ハ(一) 流産ニ於テ出
 血ヲ止メ兼テ相當ノ處置ヲ子宮内部ニ施行シ易カラシムルニ在リ(二)
 子宮出血ノ原因ヲ確定シ且ツ之ヲ除去スルノ方法ヲ實施シ易カラシ
 ムルニ在リ例之子宮「ポリプス」ニ於テ先ツ之ヲ診斷シ後適當ノ法ヲ以
 テ之ヲ除去スルカ如シ(三) 子宮ノ屈症ヲ矯正スルニ在リ(四) 頸管若クハ
 内口ノ狹窄ヲ復治スルニ在リ

用法

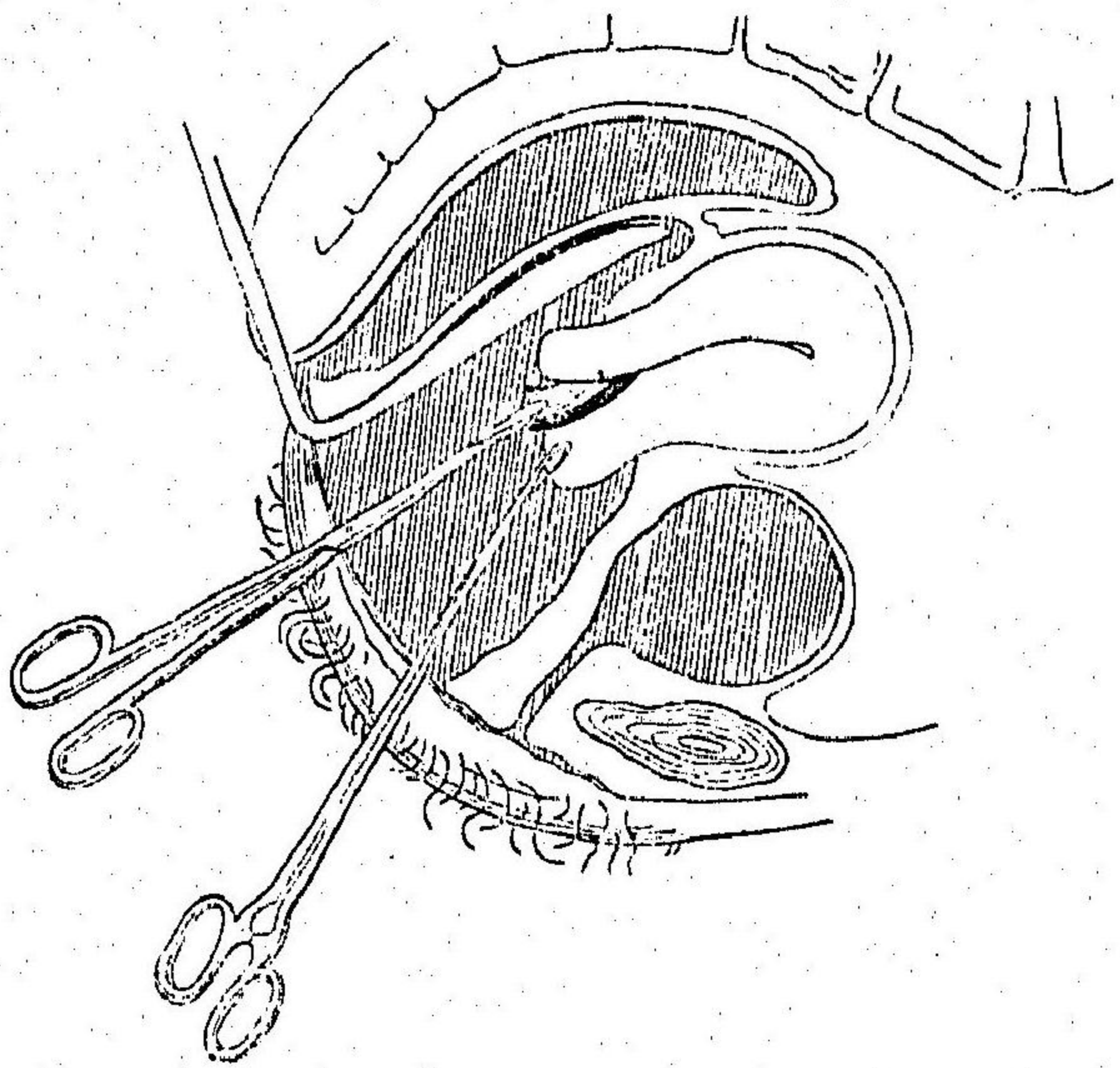
(ハ) 用法 右ノ三品ハ共ニ月經期中ニ施スヲ禁ス而シテ孰レヲ使用ス
 ルモ必ス病家ニ於テスヘク既ニ送入セシ後ハ若干時間嚴ニ靜臥ヲ命

壓搾海綿送 入法

スヘシ又之ヲ送入スルニ先子四十倍石炭酸水ヲ以テ能ク腔内ヲ洗滌
スルヲ要ス

壓搾海綿ヲ送入スルニ三法アリ其一ハ患者ヲシテ膝胸位置第九若ク
ハ側腹位置第十ヲ取ラシメ
術者先ツ鷲嘴狀鏡ヲ以テ腔
部ヲ露出シ鉤狀鑷子ヲ以テ
前唇ヲ撮持牽引シ然ル後尋
常ノ鑷子ヲ以テ壓搾海綿ノ
基底ヲ撮持シ注意シテ之ヲ
頸管内ニ送入スヘシ其二ハ
先ツ子宮消息子ニ類似セル
適宜ノ器械ヲ取り其末端ヲ
ノ本品ノ基底ニ存スル孔内

第十圖 壓搾海綿送ヲスル式ヲ示ス



ニ併入セシノ次ニ患者ヲシテ仰位置第八若クハ側位置第十ヲ取ラシ
メ術者ハ手指ヲ子宮後唇ニ觸レ之ニ沿テ本品ヲ送り以テ頸管内ニ導
致スヘシ其三ハ患者ヲノ側腹位置ヲ取ラシメ術者ハ法ノ如ク鉤狀鑷
子ヲ以テ子宮ヲ牽下シ次ニ左手ノ拇示中三指ヲ以テ本品ヲ撮持シ三
指ト共ニ之ヲ腔内ニ送入シ但シ此際指背ヲシ會
陰ニ向ハシムルヲ要ス其末端ヲ子宮ノ外口ニ
臨マシメ然ル後拇指ヲ以テ徐々ニ本品ノ基底ヲ壓迫シ遂ニ其全体ヲ
シテ頸管内ニ進入セシムヘシ

「ラミナリア」 及ヒ「チュベ ロー」ノ送入 法

「ラミナリア」及ヒ「チュベロー」モ亦壓搾海綿ノ如ク送入スヘシ然レモ「ラ
ミナリア」ハ多クハ子宮屈症ヲ矯正スル爲ニ用ユルカ故ニ初メ先ツ子
宮屈曲ノ鋭鈍多少ヲ豫定シ次ニ適宜ノ品ヲ選ヒ少時之ヲ熱湯ニ浸シ
屈症ノ現狀ニ應シテ之ヲ彎曲シ以テ送入スルヲ法トス
壓搾海綿「ラミナリア」及ヒ「チュベロー」ハ孰レヲ用ユルモ十二時間乃至
十五時間ハ頸管内ニ在ラシメ此際頻々石炭酸水ヲ以テ腔内ヲ洗滌ス

危険

ルヲ要ス而シテ既ニ以上ノ時間ヲ経レハ注意シテ之ヲ抽出スヘシ但シ抽出スルニ方テ妄ニ強力ヲ用ユヘカラス何トナレハ破斷シテ一部ヲ殘スノ虞アレハナリ時トシテハ甚タ抽出シ難キヲアリ是レ粘膜炎ノ不齊ナルニ因リ或ハ内口ノ爲ニ緊抱セラル、ニ因ル

(二)危険 壓搾海綿及ヒ其他ノ二品ヲ頸管ニ送入スルヤ敢テ危険ナキニアラス即チ時トシテハ敗血症或ハ骨盤腹膜炎或ハ蜂窠織炎等ヲ發スルヲアリ而シテ術後患者ノ安危ハ大ニ使用スル品ノ員數ニ關係スルモノトス故ニ特別ノ狀況アルニアラサレハ一次ニ二個ヨリ多カルヘカラス 一次ニ二個トハ先ツ小ナル者ヲ用ヒ次テ大ナル者ヲ用ユルノ意ニシテ全時ニ二個ヲ用ユルノ謂ニアラス 又骨盤腹膜炎、全蜂窠織炎、卵巢炎、骨盤血腫及ヒ子宮頸癌腫等ニハ本法ヲ施スヘカラス

危険アルノ理由

本法ヲ施シテ危険アルノ理由ハ實ニ顯著ニシテ即チ(一)子宮粘膜炎ハ吸收作用ノ盛ナルニ因ル(二)送入シタル物品ノ膨脹シテ頸管ヲ擴張スル

ト同時ニ其壓力ヲ以テ腐敗物ノ組織中ニ進入スルヲ助グルニ因ル(三)之ヲ施用スルノ際子宮内ニ完全ナル防腐法ヲ施スヲ能ハサルニ因ル蓋シ子宮頸管擴張法ハ適症ヲ選テ施スルハ最モ有益ナリト雖モ其危険ヲ致スヲアルモ亦此ノ如クナルヲ以テ術者宜シク之ヲ謹ムヘシ然レモ亦之ヲ施スヲ慮スヘカラス

器械ヲ以テ漸次ニ擴張スル法

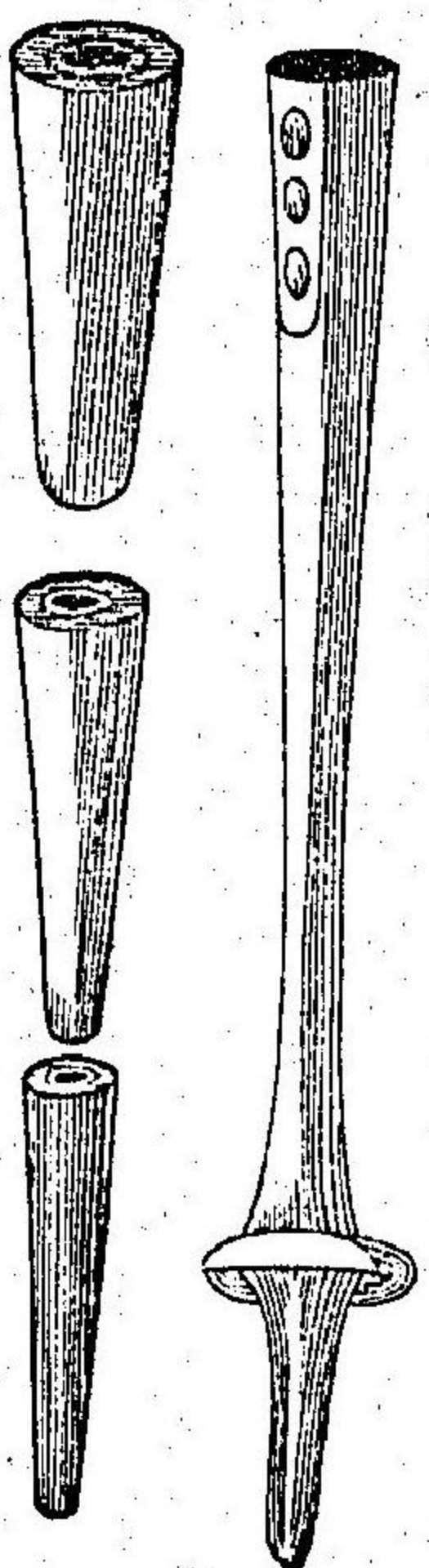
(二)護膜製及ヒ鍍屬製ノ器械ヲ以テ漸次ニ頸管ヲ擴張スルノ法ハ種々アリ左ニ其緊要ナル者ヲ掲ク

「テイト」氏ノ器械

(イ)「テイト」氏ノ器械ハ硬護膜ヨリ成リ圓錐形ニシテ大小四個アリ共ニ一個ノ把柄ニ交換裝付スルヲ得ヘシ用法ハ先ツ患者ニ

第十九圖

「テイト」氏頸管擴張器ヲ示ス

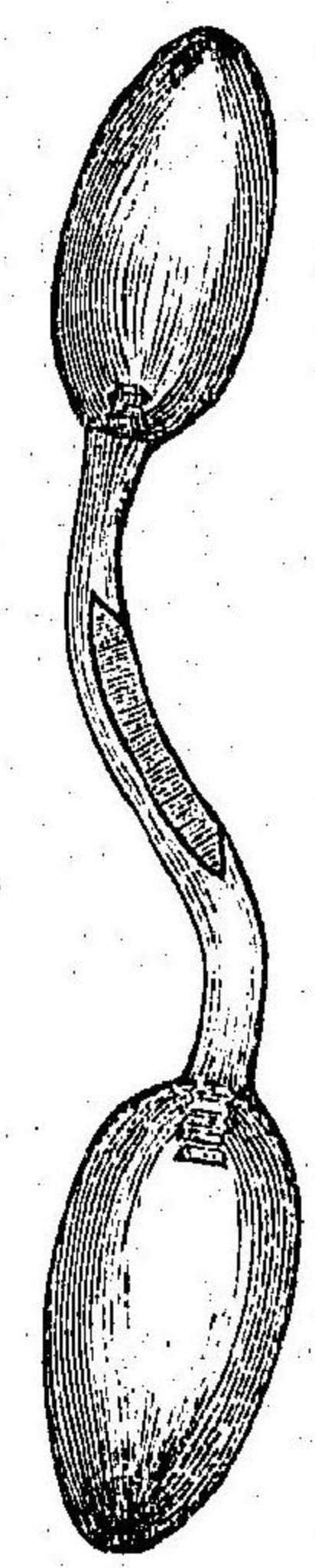


適宜ノ腰帶ヲ施シ次ニ本器ヲ頸管ニ送入シ其把柄ノ後端ニ存スル孔
 中ニ彈力性護膜索ヲ穿テ其端ヲ取り前後ニ於テ腰帶ニ結付スルナリ
 斯ノ如ク送入結付スルキハ彈力性護膜索ノ作用ニ由テ漸次ニ圓錐部
 ナ壓入シ以テ頸管ノ擴張ヲ起スニ至ル但シ小ナル者己ニ頸管内ニ進
 入セハ之ヲ抽除シテ更ニ大ナル者ヲ用ユヘシ本器ハ速ニ頸管ヲ擴張
 シ且ツ腐敗物ノ侵襲ヲ輕減スルノ功益アリト雖モ把柄ニ骨盤彎曲ヲ
 具ヘス又施術中始終
 注意ヲ要スルノ不利
 アリ

第二十圖 「ハンク」氏頸管擴張器ヲ示ス

「ハンク」氏ノ器械

(ロ)「ハンク」氏ノ器械モ亦硬護膜ヨリ成リ卵圓形ニシテ大小數様アリ各螺旋ヲ具ヘ彎



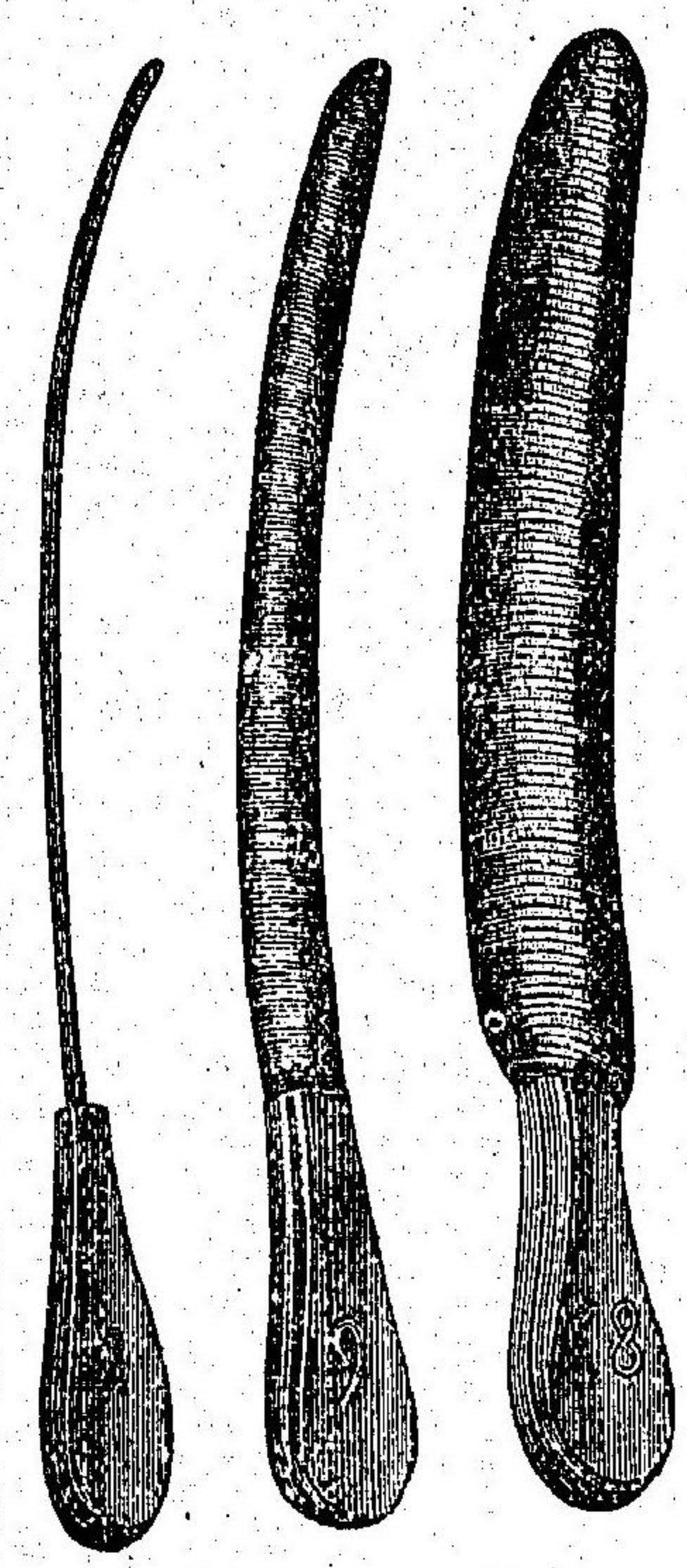
「ヘガール」氏ノ器械

曲セル把柄ニ裝付スルヲ得ヘシ此器ハ多ク流産ニ臨ム者ニ於テ子宮口ノ擴張セサル時ニ用ユル者ニシテ用法ハ手力ヲ以テ徐々ニ頸管内ニ壓送スルニ在リ

(ハ)「ヘガール」氏ノ器械ハ硬護膜製ノ「ブージー」ニシテ長サ十二乃至十四センチメートルアリ其末端ハ稍々圓錐狀ヲ成シ長サ五センチメートルノ把柄ヲ有ス此器ハ大小一ナラス最小ナル者ハ其徑ニ「ミリメートル」ニシテ次第第一 第二十一圖

「ヘガール」氏ノ器械ヲ示ス

「ミリメートル」ヲ増シ其最大ナル者ニ至テハ二十六「ミリメートル」アリ
 本器ヲ小大順次ニ換用シテ遂ニ五乃



至十「ミリメートル」者ヲ用ユルニ至レハ子宮内注射腐蝕藥ノ塗布及ヒ鏡匙ノ使用ニ適スヘク十六「ミリメートル」者ヲ用ユルニ至レハ示指ヲ子宮内ニ送入シテ之ヲ探查スルヲ得ヘシ
本器ハ消毒ヲ要スルカ故ニ用後ハ十分ニ洗滌シ若干時間石炭酸水ノ如キ防腐液中ニ浸スヘシ又使用時ニハ十倍乃至二十倍ノ石炭酸水ニ浸スヲ法トス

用法

用法ハ先ツ患者ヲシテ側腹位置ヲ取ラシメ先ツ「シムス」氏鏡ヲ以テ腹部ヲ露出シ更ニ鈎狀鑷子ヲ以テ其前唇ヲ撮持固定シ次ニ小大適宜ノ本器ヲ取り之ヲ頸管ニ送入スヘシ但シ初メハ小ナル者ヲ送入シ漸次ニ大ナル者ヲ換用スヘシ而シテ之ヲ送入スルニハ必ス強力ヲ用ユヘカラス斯ノ如ク小大順ヲ追テ送入スルキハ大抵一二時間ニシテ頸管擴張シ能ク示指ヲ其内ニ送入シ得ヘキニ至ルヘシ然レモ或ル狀況ニ在テハ斯ノ如ク迅速ニ擴張セシムルヲ能ハス數多ノ時間ヲ費ヤシ漸徐

鑲製ノ頸管擴張器

ニ之ヲ行フヲ要スルヲアリ何トナレハ術中不慮ノ危害ヲ來スヲアレハナリ

(二)鑲製ノ頸管擴張器モ亦種々アレモ多クハ二瓣ヨリ成リ其瓣ヲ閉收シテ送入シ然ル後ニ之ヲ離開スルノ裝置ナリ軌近ニ追テハ殆ト此器ノ使用ヲ廢棄スルニ至リシヲ以テ茲ニ之ヲ畧ス

頸管擴張後ノ子宮内部探查法

前述ノ方法ヲ用テ適宜ニ子宮頸管ヲ擴張セシ後ハ手指ヲ以テ直ニ子宮内部ヲ探查スルヲ要ス其法ハ一手ヲ以テ腹上ヨリ子宮ヲ按壓固定シ他手ノ示指ヲ子宮ニ送入シテ其内ヲ探查スヘシ但シ子宮ノ前屈スル者ニ在テハ外手ヲ以テ耻骨ト子宮底ノ間ヲ按壓スヘク後屈スル者ニ在テハ先ツ法ヲ以テ之ヲ矯正シ次テ其内部ヲ探查スヘシ若シ内口ニ抗抵アリテ示指ヲ通過セシメ難キハ手力ヲ緩メスシテ徐々ニ壓迫シ同時ニ外部ヨリ底部ヲ下方ニ壓迫スレハ遂ニ能ク其目的ヲ達スルヲ得ヘシ

銳匙及ヒ其用法

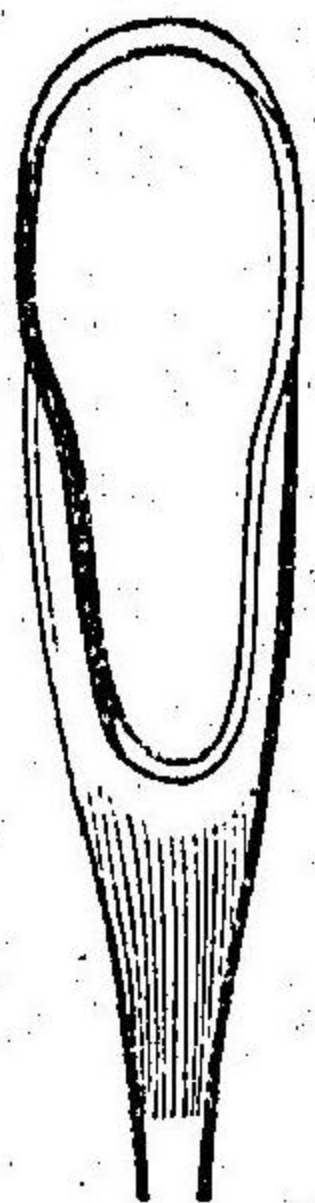
(三)頸管ヲ切開スル法 此法ハ「シムス」氏手術ノ条ニ譲ル
 ○銳匙及ヒ其用法 銳匙ハ子宮ノ内面ヨリ病的產物ヲ刮去スルノ具ニシテ「元ト」レカミール氏ノ創造スル所ニ係ル而シテ此器ヲ使用スルノ目的ニアリ一ハ病的產物ヲ刮去シテ檢査ノ用ニ供スルニ在リ例之子宮癭腫ノ一小部ヲ刮去シテ顯微鏡下ニ照査シ以テ其性質ヲ鑑定スルカ如シ一ハ其產物ヲ刮去シテ治療ヲ企圖スルニ在リ例之炎性產物^内粘膜ノ新生物若クハ流産ノ遺物等ヲ除去スルカ如シ抑「レカミール」氏ノ創造ニ係ル器械^{圖ノ一}ニハ係蹄狀ヲ成シ強剛ニシテ銳縁ヲ有ス之ヲ使用スルニ方テ子宮ヲ穿通スルカ如キ危害アルヲ以テ遂ニ世評ヲ落スニ至レリ「シムス」氏及ヒ「シモン」氏等之ヲ改造スト雖^凡其品質尙ホ強剛ニシテ之ヲ實用ニ供スル^ト少カリキ然ルニ近時「トーマス」氏更ニ之ニ改良ヲ加ヘ撓屈シ得ヘキ品質ヲ以テ造出シ始テ一般ノ信用ヲ得ルニ至レリ即チ其器ハ柔撓ナル銅ヲ以テ撓成シ長サ

十四センチメートル許アリテ大約長サ九センチメートルノ把柄ヲ有シ末端ハ扁平ニシテ係蹄狀ヲ呈シ銳縁ヲ有ス末端ヨリ十二ミリメートルノ間ハ厚サ二ミリメートル許把柄近部ハ四ミリメートル許アリ又「シムブソン」氏ハ本器ノ末端ヨリ六センチメートル許ヲ距リタル處

第二十二圖

三種ノ銳匙ヲ示ス

一ハ「レカミール」氏銳匙



二ハ「シモン」氏銳匙



三ハ「トーマス」氏銳匙



ニ球節ヲ附加セリ是レ本器ヲ使用スルニ方テ大ナル便利ヲ與ヘタルモノト謂フヘシ

本器ヲ使用スルニハ先ツ患者ヲシテ側腹位置ヲ取ラシメ術者ハ鷲嘴狀子宮鏡ヲ以テ陰部ヲ露出シ更ニ鈞狀鑷子ヲ以テ之ヲ握持シ且ツ少シク牽引シ次ニ本器ヲ收テ徐々ニ子宮内ニ送入シ其深部ニ達スルニ及ヒ末端ノ鏡縁ヲ以テ粘膜ヲ壓迫シ同時ニ下方ニ引退シテ内口ニ至レハ更ニ深入シテ再ヒ引退スルヲ初ノ如シ斯ノ如クシテ本器ヲ反覆運動シ内腔ノ前後兩側ヲ刮去シテ餘スヲナキヲ要ス但シ此器ヲ使用スルニ先テ頸管擴張法ヲ要スルヲ多シ術後ノ處置ハ病況ニ從テ自ラ同一ナラス尙ホ本書中之カ使用ヲ記スルノ条ニ於テ附説スヘシ又施術ノ注意ハ壓搾海綿ノ条ニ掲グル所ニ同シ但シ或人ノ實驗ニ據レハ術後ノ危險ハ意外ニ輕易ナルヲ多シト云フ

第二章 外陰部ノ疾病

○外陰部畸形

外陰部畸形

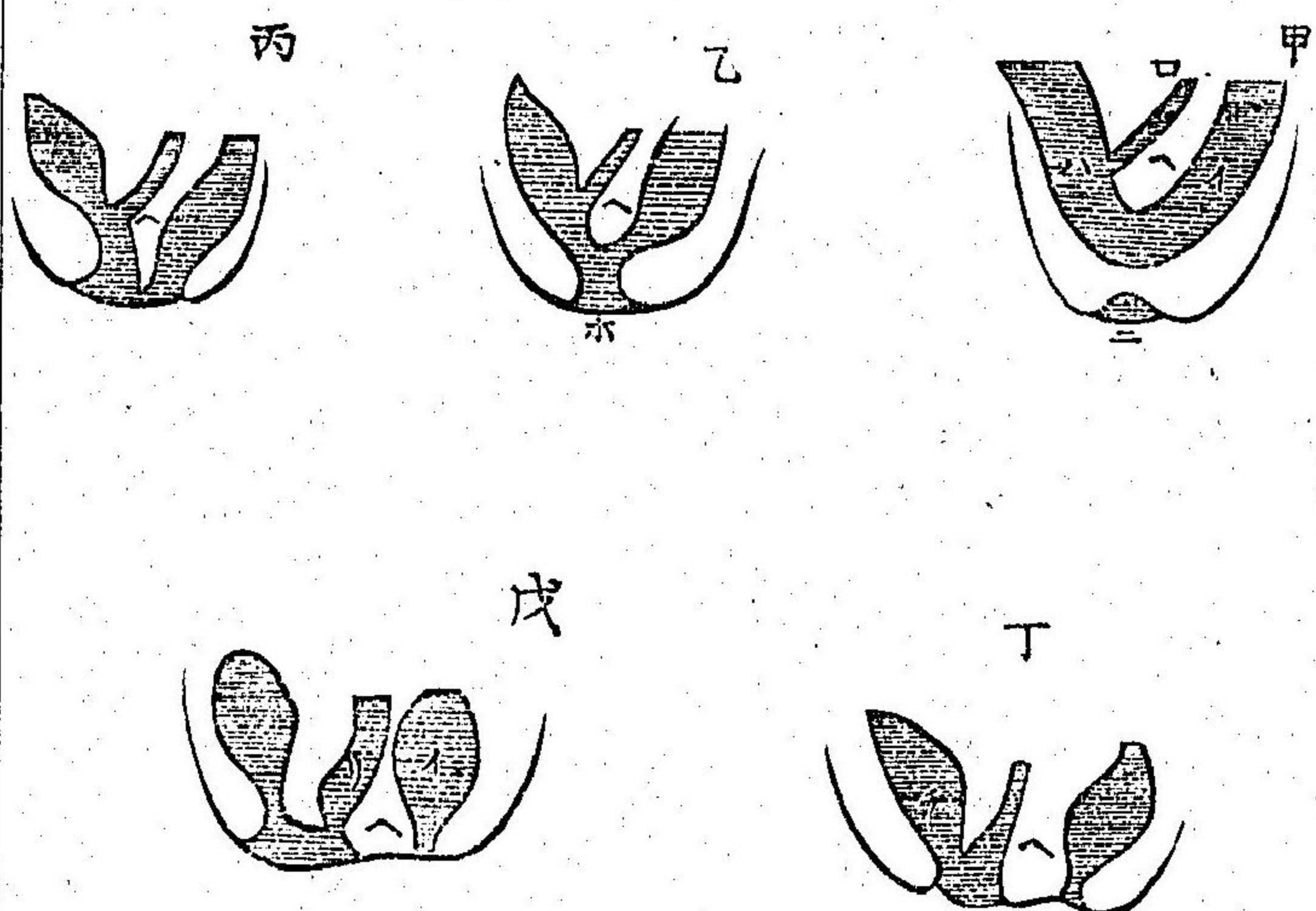
外陰部發育ノ方法

凡ソ婦人外陰部ノ畸形ヲ理會セント欲セハ必ス此部發育ノ方法ヲ知ラサルヘカラス今其概略ヲ記スルヲ左ノ如シ

第一胎生六週ニ及ヘハ所謂生殖突起ヲ生ス是レ後來男子ニ在テハ陰莖ニ化シ女子ニ在テハ陰核ト爲ル者ナリ此期ニ在テハ直腸尿管及ヒ「ミユレル」尿管互ニ交通スレトモ末々外表ニ開口セス第二十三圖ノ甲 第二胎生十週ニ至レハ生殖突起ノ下方ニ於テ皮膚ニ一個ノ凹窩ヲ生ス之ヲ生殖皴裂ト云フ第二十三圖ノ乙 此皴裂ハ漸次ニ深入シテ遂ニ直腸及ヒ尿管ノ交通部ニ開口シ所謂「クロアカ」ヲ形成ス第二十三圖ノ丙 第三直腸尿管ノ間ニ存スル組織ハ漸次ニ發生シテ下方ニ進ミ會陰ヲ形成ス第二十圖ノ丙 故ニ「クロアカ」ハ今ハ分レテ前後二部ト成ル而シテ其前部第二十圖ノ丁ハ則チ尿生殖竇ニシテ「ミユレル」尿管之ニ交通シ後部ハ則チ直腸

第二十三圖

外陰部ノ發育スル順序ヲ示ス



イ 直腸
 ロ 「ミユレル」尿管
 ハ 尿管
 ニ 生殖腺裂
 ホ クロアカ
 ヘ 會陰
 ト 尿生殖管
 チ 膀胱
 リ 上部ハ子宮トナリ
 下部ハ膈トナル

ナリ 第二十三圖 第四
 四尿生殖管ノ上部
 ハ收縮シテ尿道ト
 爲リ下部ハ前庭ト
 爲リ其縁ハ小陰唇
 ト爲ル而シテ左右
 「ミユレル」尿管ハ相
 融合シテ上部ハ子
 宮ト爲リ下部ハ膈
 トナル 第二十三
 以上ニ示ス者ハ外
 陰各部發育ノ大略
 ニ係ル而シテ若シ

其發育ニ違常アレハ種々ノ畸形ヲ生スルヲ言フ候タス左ニ其畸形ノ緊要ナル者ヲ掲ク

肛門及ヒ外陰部ノ缺亡

(一) 肛門及ヒ外陰部ノ缺亡 此畸形ニ二種アリ一ハ直腸ト尿生殖管トノ間ニ中隔ヲ生セス又生殖腺裂ノ深入シテ「クロアカ」ヲ生セサル者ニ係リ一ハ中隔ヲ生スルモ生殖腺裂ノ深入セサル者ニ係ル兩症共ニ大

肛門及ヒ前庭ノ缺亡

小便ノ排路ナキ者ナリ
 (二) 肛門及ヒ前庭ノ缺亡 此症ハ會陰ノ發生セサルカ故ニ直腸ノ尿生殖管ニ開通スル者ニ係ル

直腸缺亡

(三) 直腸缺亡 直腸ノ下端全ク缺亡シ深ク骨盤内ニ於テ盲端ニ終ル者ニ係ル

醫ノ要務

以上各種ノ畸形ニ在テハ排泄物ノ通路ヲ開設スルヲ以テ醫ノ要務トス 肛門及ヒ外陰部ノ缺亡ハ通例發育不全ノ小兒ニ存スル者ニシテ醫療ヲ施スニ先チ死スルヲ常トス 肛門及ヒ前庭ノ缺亡ニ在テハ直

腸ト尿生殖竇トノ通路狹小ナルヲ以テ之カ切開ヲ要ス然レモ括約筋
ヲ存セサルカ故ニ完全ノ成績ヲ得ルヲ難シ 直腸ノ缺亡ニ在テハ試
ニ肛門ヲ開通スルノ法ヲ施シ幸ニ直腸ノ盲端ニ達スルヲ得ハ其粘膜
ヲ牽引抽出シテ創縁ニ縫接スヘシ術後ハ創口自然ニ收縮シテ僅ニ瘻
ヲ胎スヲ多シ然ルモハ壓搾海綿ヲ挿入ノ之ヲ擴張スルヲ務ムヘ
シ時トシテハ大腸ヲ切開ノ人工肛門ヲ造クルヲ要スルヲアリ

「ヒポスバジ

〔四〕ヒポスバジア 尿道ノ發生ナク膀胱直ニ尿生殖竇ニ交通シ常ニ尿
ヲ漏出スル者アリ或ハ尿生殖竇甚々長ク其上端ノ近部ニ於テ僅ニ尿
道ノ痕跡ヲ存シ且ツ其竇ノ後方ハ狹小ナル腔ト相通スル者アリ此二
症ハ共ニ陰核肥大シテ陰莖ニ肖似スルヲ多シ

「エヒスバジ

〔五〕エヒスバジア 耻骨縫合及ヒ膀胱前壁ヲ缺損シ直腸子宮共ニ異常
ナク陰核ニ罅裂アリテ直ニ膀胱ニ通スル者アリ其畸形ノ輕易ナル者
ニ在テハ成形術ヲ以テ之ヲ醫スヘシ

陰陽体

(六)陰陽体 一体ニシテ男女ノ生殖作用ヲ併有スル者ヲ謂フ人類ニ在
テハ未ダ曾テ之ヲ兼行シタル者アラス二種アリ曰ク眞性陰陽体曰ク
假性陰陽体是ナリ

眞性陰陽体

(イ)眞性陰陽体ハ一体ニシテ卵巢及ヒ睪丸ヲ併有スル者ナレモ極テ希
ニ見ル所トス大抵一器ハ發生十分ニシテ他器ハ僅ニ痕跡ヲ存スルニ
過キス而シテ各側ニ一卵巢及ヒ一睪丸ヲ存スル者ヲ双陰陽体ト謂ヒ
一側ニ卵巢及ヒ睪丸ヲ有シ他側ニハ只卵巢或ハ睪丸ノミヲ存スルヲ
者ヲ偏陰陽体ト謂ヒ一側ニ一睪丸ヲ有シ他側ニ一卵巢ヲ存スル者ヲ
側陰陽体ト謂フ

假性陰陽体

(ロ)假性陰陽体ハ外生殖器ニ畸形アリ男子ニシテ女子ニ類シ或ハ女子
ニシテ男子ニ似タル者ヲ謂フ甲ハ尿道及ヒ會陰ノ下面癒着セサル者
ニシテチ即男子「ヒポスバジア」ニ於テ見ルカ如シ時トシテハ陰莖小ニ
シテ孔ヲ有セス尿道ハ其莖底ニ開口シテ腔口ニ類シ陰莖ノ各半ハ癒

鑑別

着セスシテ大陰唇ニ似タル者アリ乙ハ陰核及ヒ其包皮ノ肥大シテ陰莖ニ類シ左右大陰唇ハ近接シテ陰囊ニ類シ隘口ハ縮小或ハ閉鎖スル者ニ係ル時トシテハ陰核ニ尿道ヲ存スルヲアリ

鑑別 先ツ陰唇ニ類似セル部分ヲ按摸シテ罌丸ノ有無ヲ検査スヘシ但シ此検査ヲ爲スニ際シテ罌丸ノ墜下セサル者アルヲ忘ルヘカラス又直腸ヨリ子宮及ヒ卵巢ノ存否ヲ検査シ既ニ婚期ニ達セル者ニ在テハ月經ノ有無ニ注意スヘシ其他乳腺ノ發育、顔貌及ヒ聲音ノ性状ニ由テ男女ヲ分ツヲ要ス

○外陰部炎症

原因

原因 外陰部ノ炎症ハ(一)外傷ニ因ル例之手淫、強姦其他器械的損傷ノ如シ(二)排泄物ノ刺戟ニ因ル例之經血、脂助腺分泌液、膿液ノ變敗セル者或ハ癌腫ノ排泄物ノ如シ(三)尿ノ刺戟ニ因ル例之膀胱癭ノ患者ニ於テ見ルカ如シ(四)傳染毒ニ因ル例之淋毒及ヒ實弗埒里亞毒ノ如シ(五)腸

徵候

「バルトリニ」氏腺炎

室扶斯猩紅熱及ヒ麻疹ハ外陰部ノ壞疽ヲ發スルヲ往々之アリ

徵候 痒癢、疼痛、發赤、腫脹及ヒ分泌過多ヲ本病ノ主徵トス

疼痛ハ間々劇甚ニシテ歩行ヲ妨クルヲアリ又時トシテハ利尿時ニ劇痛ヲ覺ユルヲアリ是レ炎症ノ尿道ニ波及スルニ由ル

淋毒ハ外陰部炎症ノ常因ニシテ「バルトリニ」氏腺炎ヲ併發スルヲ多シ而シテ此淋毒性「バルトリニ」氏腺炎ニ三様アリ(一)全腺速ニ化膿スル者アリ此症ニ在テハ發病後三四日ニシテ大陰唇甚シク腫脹シテ赤色ヲ呈シ速ニ波動ヲ生ス尙ホ時日ヲ經レハ一部ニ膿點ヲ發シ其周圍ハ間々壞疽狀ヲ呈シ遂ニ破潰スルニ至ル(二)經過稍々緩慢ニシテ大陰唇内面ノ後三分一ノ處ニ胡桃大ノ腫脹ヲ來ス者アリ是レ粘膜炎ノ爲ニ排泄管ノ閉塞ヲ來シ腺内ニ分泌物ノ滯溜スルニ因ル時トシテハ其腫脹部ヲ壓迫スレハ滯溜液ヲ排出シ得ルヲアリ(三)頑固ノ淋毒性腺炎アリ男子ノ婦人ヨリ淋毒ヲ感受スルハ多クハ此症ノ存在スルニ因ル

者ナラン蓋シ此症ニ在テハ排泄管ヨリ常ニ少量ノ膿汁ヲ漏出シテ其部ノ粘膜ヲ被ヒ殊ニ交接時ニ當テハ龜頭或ハ他ノ壓迫ニ由リ膿汁ノ排泄増加スルヲ以テ愈々男子ニ感染シ易キナリ

鑑別

鑑別 尋常ノ炎症ハ局處ヲ診査セハ他病ト混同スルヲナカルヘシ但シ「バルトリニ」氏腺炎ハ此部ノ蜂窠織炎及ヒ陰唇「ヘルニア」ト鑑別スルヲ要ス通例發病ノ位置、疼痛ノ有無及ヒ其病歴等ニ注意スルルハ之ヲ鑑別スルヲ甚タ難カラストス

治法

治法 局處ヲ清潔ニスルヲ以テ專要トス殊ニ頻々温湯ヲ以テ洗滌シ或ハ坐浴ヲ行フニ宜シ疼痛アレハ温罨布ヲ貼スヘシ小兒ニシテ利尿時ノ疼痛ニ苦シム者ハ温浴中ニ於テ排尿セシムルニ宜シ又洗滌後ハ左方ヲ外用スルヲ可トス

○方

硼酸

二〇

華攝林

七五〇

右混和シ外布ス

○方

阿片丁幾

二〇

鉛糖

四〇

水

一二〇〇

右調和シ外用劑トス

慢性症ニハ先ツ局處ヲ洗滌シ次テ硝酸銀一〇水三〇〇ノ溶液ヲ塗布スヘシ或ハ五十倍石炭酸水ヲ以テ洗滌スルモ可ナリ「バルトリニ」氏腺ノ化膿スル者ハ速ニ切開シテ膿ヲ洩ラスヘシ但シ慢性症ニシテ囊腫狀ヲ呈スル者ノ治法ハ後ニ譲ル

○陰痒

陰痒トハ外陰部ノ痒癢ヲ謂フ通常大陰唇ノ前縫合部ニ發スレテ時ト

陰痒

原因

シテハ下ハ前庭及ヒ膻口ニ達シ上ハ陰阜ニ及フアリ其初發ニ在テハ皮膚ニ如何ノ病的變化アルヤヲ認メ難ク既ニ醫療ヲ乞ヒ來ル時ニ至テハ搔抓ノ爲ニ局處ノ炎症及ヒ剝脱ヲ起シ其原狀ヲ見ル能ハサルヲ多シ

原因 (一)膻ノ排泄物ニ因ル例之單純ノ帶下子宮癌若クハ老人膻炎ニ於テ見ルカ如シ(二)尿ノ變常ニ因ル例之膀胱病腎臟病若クハ糖尿病ニ於テ見ルカ如シ就中糖尿病ニ因ル者多キカ故ニ陰痒ノ患者ヲ診スルキハ試ニ其尿ヲ検査シテ糖分ノ有無ヲ確定スルヲ要ス(三)小兒ニ在テハ蟻虫ノ肛門ヨリ出テ膻内ニ入ルニ因ルアリ(四)外陰部ノ充血ニ因ル例之月經期或ハ妊娠中ニ於テ見ルカ如シ(五)皮膚病ニ因ル例之エグゼマ「ヘルペス」等ノ如シ

徵候

徵候 痒癢ハ持長セスシテ間歇性ニ發スルヲ多シ時トシテハ遠歩或ハ温臥ニ因テ發作スルヲアリ或ハ月經前ニ發スルヲアリ大抵初メハ

鑑別

輕微ナレハ隨テ搔抓スレハ隨テ増劇スルヲ常トス或症ニ在テハ之カ爲ニ神思憂鬱シ或ハ手淫ノ惡弊ヲ來シ愈々神經症ヲ增長スルニ至ルヲアリ

鑑別 通常原因ノ著明ナル者ハ施治其功ヲ奏シ易シ故ニ診査ヲ精密ニ行ハサルハカラス即チ外陰部ヲ検査シテ發疹或ハ寄生物ノ有無ヲ察シ子宮鏡ヲ用テ子宮頸及ヒ膻壁ノ狀況ヲ審ニシ尿ヲ検査シテ糖分或ハ蛋白ノ存否ヲ知り直腸ヲ檢シテ刺衝ノ有無ヲ明ニスヘシ

治法

治法 勉メテ原因ヲ除去スヘシ即チ寄生物ニ因ル者ハ昇汞水或ハ硫黃軟膏ヲ外用シ子宮或ハ膻ノ排泄物ニ因ル者ハ鉛糖八〇水六〇〇ノ溶液ニ綿花ヲ蘸シテ膻内ニ挿入シ以テ刺衝性ノ排泄物ヲ吸攝セシムヘシ食物ハ淡滲ノ品ヲ選ヒ肉食ヲ避ケ酒類ヲ禁スルニ宜シ又大小便ノ通利ニ注意シテ之ヲ調理シ痛風家ニハ利尿劑ヲ用テ最モ効アリ局處ハ頻々洗滌シテ硼酸軟膏ヲ外用スヘシ輕症ニ在テハ大抵此法ニ

由テ速ニ治スルコト多シ劇症ニハ一日數回坐浴及ヒ腫洗滌法ヲ行ヒ
沃度仿謨ヲ撒布シ或ハ鉛糖阿片丁幾ノ合劑前條ニチ「リント」ニ蘸シテ
大陰唇ノ間ニ挿置スルヲ良トス左ノ諸方モ亦頑固ノ症ニ施シテ良効
ヲ得ルヲアリ

○方

鉛糖

四、〇

稀青酸 英國
局方

一、二、〇

亞爾個兒

三、〇、〇

水

二四〇、〇

右調和シ洗滌劑ト爲ス

○方

硼砂

一、五、〇

鹽酸莫爾比涅

〇、四

水

二四〇、〇

右調和シ外用ス

○方

硼砂

四、〇

稀青酸 英國
局方

八、〇

水

二四〇、〇

右調和シ外用ス

○方

昇汞

〇、二

水

二二五、〇

右調和シ外用ス

○外陰部皮膚病

外陰部ハ種々ノ皮膚病ヲ發ス就中最モ多キ者ハ丹毒癬瘡、濕疹、ブリエ

病 外陰部皮膚

リゴ、痒癢、ヘルペス及ヒアク子等はナリ但シ其症狀及ヒ治法ハ他部ニ
發スル者ト異ナルヲナシ

○外陰部疳瘡及ヒ疣贅

外陰部疳瘡
及ヒ疣贅
硬性下疳
疣贅
軟性下疳

婦人ノ外陰部ハ硬性下疳、軟性下疳及ヒ「コンジロマ」ヲ發スルヲ屢々之
アリ 硬性下疳ハ外陰部ノ前方ヨリモ後方ニ生スルヲ多ク通常大陰
唇ノ内面或ハ小陰唇ノ邊緣ニ單純ノ肥厚ヲ以テ起リ或ハ隘口ノ内部
ニ硬結ヲ生シテ其面乾燥シ或ハ潰爛ス時トシテハ初メ數個ノ圓形疹
ヲ發シ次テ疣贅ニ變スルヲアリ此疣贅ハ限畫セル扁平ノ隆起ニシテ
通常大陰唇邊緣ノ内側ニ生ス若シ自然ニ委シテ醫療ヲ加ヘサルキハ
漸次ニ蔓延シテ廣ク大陰唇ノ内面ヲ侵シ甚シキハ肛門ニ達スルニ至
リ或ハ希ニ潰爛シテ著大ノ潰瘍ト爲ルヲアリ 軟性下疳モ亦大陰唇
ノ内面ニ生シ通常數個ニシテ侵蝕性ヲ有シ其處置宜シキヲ得サレハ
終ニ全唇ヲ破壊スルニ至ル加之近傍ノ水脈腺ヲ侵シ發炎化膿ヲ誘起

治法

スルヲ多シ

治法 硬性下疳ハ局處及ヒ全身ノ療法ヲ要ス局處ハ十分清潔ニシ日
々昇汞水等ヲ以テ洗滌シ若シ治癒シ難キキハ沃度仿護ヲ撤布スルニ
宜シ全身療法ニハ汞劑ヲ最良トス之ヲ用ユルニ三法アリ内服、塗擦、蒸
蒸是ナリ 内服ニハ甘汞、水銀丸、汞灰散或ハ昇汞、沃度汞ノ類ヲ用ユヘ
シ 塗擦ニハ水銀軟膏ヲ稱用ス即チ此膏大約一、五ヲ取り皮膚ニ塗擦
スルヲ毎回十分時間ナルヘシ而シテ之ヲ擦入スルノ位置ハ逐次交換
スルヲ要ス例之第一日ハ腋下ニ施シ第二日ハ胸腹部ニ施シ第三日ハ
内股ニ施スカカ如シ 蒸蒸法ニハ甘汞ヲ用ユ其法患者ヲシテ其衣ヲ脱
シ椅子ニ倚ラシメ而ル後毛布ヲ以テ椅子ト共ニ全身ヲ被包シ次ニ甘
汞〇、五ト水トヲ椅子下ニ於テ同時ニ各別ニ蒸發セシムルヲ二十分間
ニシテ直ニ温臥セシムルニ在リ

水銀療法ハ三四個月間持長シ梅毒第二期ノ症狀ヲ呈セサレハ始テ之

ヲ止ムヘシ 爾後ノ療法ハ沃度化加留膜ヲ單用シ或ハ症ニ應シテ汞劑ヲ配伍シ用ユルヲ可トス

「ヨンジロマ」ハ局處ヲ洗滌スルノ後甘汞ヲ撒布シテ最モ優効アリ或ハ昇汞〇、一ヲ華攝林三〇、〇ニ和シテ塗布スルモ可ナリ又兼テ沃度化加留膜及ヒ汞劑ヲ内服セシムルヲ要ス軟性下疳ニハ硝酸ヲ塗布ノ燒灼シ以テ毒勢ヲ挫折スルニ宜シ或ハ沃度仿膜ヲ撒布スルモ亦効アリ

○バルトリニ「氏腺囊腫」

此腺ノ實體或ハ其排泄管ハ間々膨脹シテ囊腫ヲ生スルヲアリ實體ノ膨脹ニ因ル者ハ數葉ニ分レ排泄管ノ膨脹ニ因ル者ハ橢圓形ヲ呈ス其内容液ハ粘膠ニシテ透明ナルヲアリ或ハ褐色ヲ呈スルヲアリ時トシテハ其腫發炎シテ膿瘍ニ轉スルヲアリ

徴候

陰唇腫脹シテ波動ヲ生シ其增長シテ胡桃子大ニ至ル者ハ交接

「バルトリニ」
「氏腺囊腫」

及ヒ歩行ヲ妨ケ間々月經時ニ緊張シ或ハ利尿頻數ヲ來スヲアリ

治法 内容液ヲ排出シ内腔ヲ消滅スルヲ勉ムヘシ 單一ノ切開ハ功ヲ得ルヲ少ナキカ故ニ囊壁ノ一部ヲ切除シテ硝酸銀或ハ沃度丁幾ヲ其内面ニ塗布シ或ハ「リント」ヲ防腐藥液ニ蘸シテ之ヲ充填スルヲ可トス 又時トシテハ貫穿法ヲ施シ或ハ全囊ノ切除ヲ行フヲアリ

治法

○纖維瘤及ヒ脂肪瘤

纖維瘤ハ大陰唇或ハ會陰ニ生シ大小一ナラスシテ其構成ハ他部ニ生スル者ト異ナルヲナシ而シテ或ハ皮下蜂窠織中ニ沈伏シ或ハ莖ヲ生シテ垂下スルヲアリ 脂肪瘤ハ大陰唇或ハ陰阜ニ生ス希ニハ其容積甚シク増大シ垂下シテ膝ニ達スルヲアリ

纖維瘤

脂肪瘤

治法

治法 兩症共ニ切除ノ一法アルノミ

○象皮腫

此病ハ大陰唇ヲ侵スヲ最モ多ク陰核之ニ次キ小陰唇ニ發スルヲ最モ

象皮腫

少シ又希ニハ外陰部一般ニ侵サル、トアリ 此病ハ熱帶地方ニ多ク
寒帶地方ニ少シ 水脈ノ擴張、蜂窠織及ヒ眞皮ノ肥大ハ本病固有ノ變
化トス時トシテハ乳嘴甚シク肥大シテ疣贅狀ヲ呈スルトアリ通常ニ
十歳ヨリ三十歳ニ至ルノ間ニ發シ易シトス 此病ハ輕重一ナラス輕
キ者ハ僅ニ皮膚ノ肥厚ヲ起スニ過キスト雖モ重キ者ニ在テハ増大延
長シテ膝頭ニ達スルトアリ其既ニ増大セル者ハ交接及ヒ動作ヲ妨ク
ルヲ常トス

治法

治法 内服外用ノ諸藥共ニ効ナク且ツ此部ニ在テハ動脈ノ結紮ヲ施
スヲ難シ故ニ之ヲ治スルニハ唯切除ノ一法アルノミ

○癌腫

大陰唇ノ内面ハ希ニ皮癌ヲ生スルトアリ初メ圓形ノ小結節狀ヲ呈シ
疼痛ナク發育緩慢ナリ既ニ潰爛スルニ至レハ速ニ前後ニ蔓延ス但シ
腔内ニ波及スルト甚タ少ナク鼠蹊腺ハ初期ヨリ侵襲セラル、ト多シ

皮癌

治法

治法 鼠蹊腺ノ侵襲セラル、ニ先テ切除セハ幸ニ根治スルトアルヘ
シ

○神經瘤

神經瘤

紅色ノ小瘤ニシテ感覺過敏ナリ能ク尿道口邊ニ生ス

○陰唇ヘルニア

陰唇ヘルニア

此症ハ腹臟殊ニ腸管ノ一部腹輪ヨリ出テ下行シテ大陰唇ニ達スル者
ニシテ全ク男子ノ陰囊ヘルニアニ一致ス蓋シ圓韌帶ノ鼠蹊管内ニ下
ルヤ腹膜ノ延長部アリテ之ヲ圍擁シ所謂ノツク氏管ヲ形成スル者ニ
シテ其管若シ生後ニ至リ閉塞セサルモハ則チ陰唇ヘルニアヲ起スノ
因ト爲ルナリ此症ハ甚タ希ニ見ル所ナレモ此部ノ瘤腫ヲ鑑別スルニ
方テハ其之ヲ發スルトアルヲ忘ルヘカラス蓋シ此症ハ咳嗽及ヒ努責
ニ由テ緊張シ按壓スレハ消失シ易キヲ以テ自ラ他ノ瘤腫ト異ナルヲ
知ルヘシ

靜脈怒張

○靜脈怒張

臍口ノ兩側ニ靜脈叢アリ紆回彎曲シテ延長セル一體ヲ成ス之ヲ臍球ト謂フ妊婦及ヒ骨盤ニ瘤腫ヲ生スル者ニ在テハ其靜脈怒張シテ瘤狀ヲ成スヲアリ時トシテハ其瘤甚シク増大シテ歩行及ヒ交接ヲ妨ケ妊婦ニ在テハ分娩ヲ妨クルヲアリ或ハ靜脈破裂シ皮下ニ溢血ヲ來シテ所謂血腫ヲ生シ或ハ血液体外ニ流出シテ危險ノ症狀ヲ呈スルヲアリ

治法 本病ニ罹ル者ハ毎日數時間平臥セシムルヲ可トス若シ靜脈破裂シテ血液体外ニ流出セハ直ニ平臥ヲ命シ局處ニ適宜ノ壓迫ヲ施スヘシ

○血腫

靜脈破裂シテ外陰部ノ蜂窠織中ニ溢血ヲ起シ以テ瘤狀ヲ呈スル者ニシテ小ナル者ハ胡桃子ノ如ク大ナル者ハ橙實ノ如シ通例分娩時ニ發スルヲ多シ是レ兒頭ノ壓迫ニ因テ怒張セル靜脈ノ破裂ヲ來スニ因ル

血腫

治法

又希ニハ他ノ外傷或ハ努力ニ起因スルヲアリ

治法 大小便ノ通利ヲ助ケ嚴ニ努責ヲ禁シ局處ニハ氷嚢ヲ施スヘシ若シ發炎セハ氈布ヲ貼シ既ニ化膿セハ速ニ切開シテ膿汁ヲ漏シ然ル後日々防腐藥ヲ以テ洗滌シ肉芽ノ發生ヲ助クヘシ

○會陰破裂

會陰破裂

治法

凡ソ分娩ニ際シ兒頭下リテ臍内ニ至レハ其周邊均シク緊張スレモ尙ホ進テ臍口ニ達スレハ外陰部後半ノミ緊張シテ尿道口水準ヨリ前部ハ緊張セラル、トナシ而シテ初産婦ニ在テハ臍内後際ノ粘膜ニ裂傷ヲ受クルヲ常トスレモ多クハ輕易ニシテ醫治ヲ要セス其他臍口ノ周邊、前庭、小陰唇、陰唇繫帶モ亦裂傷ヲ受クルヲアリ然レモ特ニ茲ニ論セント欲スル者ハ會陰固有組織ノ裂傷ナリ今之ヲ區別スレハ左ノ如シ

(一) 破裂ノ肛門括約筋ニ及ハサル者即チ不全破裂

(二) 破裂ノ肛門括約筋ニ及フ者即チ全破裂

(三)會陰中央ノ破裂シテ前部ハ害ヲ受ケサル者即チ中央破裂
以上三種中第二種第三種ニ在テハ其損傷ノ直腸前壁ニ及フ者常ニ尠
カラス

原因

原因 會陰破裂ノ近因ハ分娩ノ際過度ニ緊張スルト兒頭ノ爲ニ急劇
ノ壓迫ヲ受クルトニ在リ而シテ此兩件ヲ致ス所以ノ者一ニシテ足ヲ
ズ其緊要ノ者ヲ掲クレハ(一)兒頭ノ巨大ナル者(二)後頭ノ後方ニ向テ産
出スル者(三)耻骨弓ノ狹隘ナル者(四)薦骨前面ノ扁平ナル者(五)年長ニ至
リ初テ分娩スル者(六)瘢痕組織ノ存スル者(七)産科器械ノ過大ナル者(八)
産科施術中ノ不注意是ナリ

徴候

徴候 分娩後直ニ陰部ヲ検査シテ損傷ノ有無ヲ明ニスルハ産科醫ノ
常務ナリ通例輕易ノ破裂ニ在テハ僅ニ疼痛アルノミニシテ患者之ヲ
訴フルトナク局處ヲ検査シテ始テ之ヲ認知スルト多シ若シ其破裂ノ
括約筋ニ達スル者ニ在テハ壓重努張ヲ覺ヘ放屁便通共ニ意識ニ隨ハ

會陰破裂ノ
結果

サルニ至ル 通常會陰ハ中線ニ沿ヒ縱裂スル者ナルカ故ニ之ヲ檢ス
ルニ各側ニ三角形ノ創面アリ其面ノ一側ハ後方ニ向ヒテ互ニ連續シ
一側ハ腔ニ向ヒ一側ハ皮膚ニ向フ者ナリ

會陰破裂ノ結果ハ種々一ナラス時トシテハ括約筋ノ損傷ヲ蒙ムルモ
尙ホ大便失禁ヲ來サ、ルヲアリ是レ内括約筋ノ肥大シテ外括約筋ノ
代償作用ヲ營ムト外括約筋斷端ノ瘢痕組織ニ癒着シテ收縮ノ支點ヲ
得ルトニ因ル或ハ能ク硬糞ノミヲ保持シ軟便ハ不隨意ニ排出スルト
アリ或ハ直腸ノ刺衝尤進シテ常ニ少許ノ軟便ヲ排出スルトアリ又損
傷ノ括約筋ニ及ハサル者ニ在テモ交接ヲ妨ケ不妊ヲ來タシ便通時ニ
疼痛ヲ覺ユル者アリ 會陰ハ間接ニ子宮ヲ支持スルノ用アルカ故ニ
破裂スルハ腔ノ前壁自ラ支柱ヲ失テ漸次ニ下降シ同時ニ子宮ヲ牽
引シテ遂ニ其墜脱ヲ促ストアリ故ニ會陰破裂ハ子宮脱ノ一大原因タ
ルヲナ忘ルヘカラス 又會陰破裂シテ其創面左右ニ分開スルハ其

治法

間ニ直腸前壁ノ膨出ヲ起シ遂ニ直腸脱ヲ來ス。間々之アリ
治法 會陰破裂ノ豫防法ハ主トシテ産科ノ與ル所ナルヲ以テ之ヲ略
シ左ニ專ラ手術療法ヲ論セントス
手術療法ニ二様アリ分娩後直ニ施ス者ト時日ヲ經テ施ス者ト是レナ
リ

分娩後直ニ施ス手術

括約筋ノ損害ヲ蒙ラサル者ニ施ス手術

(一)分娩後直ニ施ス者
特ニ損害ノ肛門括約筋ニ及ヒタル者ハ胎盤排出後直ニ施術スルヲ要
ス必ス猶豫シテ大便失禁ノ患苦ヲ受ケシムヘカラス
左ニ先ツ括約筋ノ損害ヲ蒙ラサル者ニ施スヘキ手術ヲ述ヘントス
其法患者ヲシテ左臥シテ膝頭ヲ上方ニ向ケテ牽引セシメ迷朦藥ハ用
ユルヲ要セス四十倍石炭酸水ヲ以テ局處ヲ洗滌シ出血アルハ之ヲ遏
止スヘシ 昔時ハ專ラ桿介縫合テ施セリト雖凡輓今ハ結節縫合ヲ用
ユル者多シ 先ツ曲針ニ銀線ヲ裝シテ之ヲ創面ノ一側ヨリ深ク皮膚

括約筋ノ損害ヲ蒙ル者ニ施ス手術

術後ノ處置

ニ穿入シ創底ヲ横過シテ他側ノ皮膚ニ穿出セシメ而シテ此線ヨリ大
約一二センチメートルヲ距テ更ニ他ノ銀線ヲ穿通スヘシ斯ノ如クシ
テ適宜ノ線數ヲ穿通シ了レハ更ニ粘膜側即チ内面ニ於テ同様ニ適宜
ノ線數ヲ穿通スヘシ而シテ縫線ヲ結定スルニハ粘膜側ノ者ヲ先ニシ
皮膚側ノ者ヲ後ニスヘシ然レモ粘膜側ノ縫合ハ必シモ之ヲ要スルニ
アラス
括約筋ノ損害ヲ蒙ル者ニ在テモ亦前記ノ方法ヲ以テ之ヲ縫合スヘ
シ時トシテハ直腸ノ創處モ縫合ヲ要スルヲアリ此ノ如キ者ニ在テハ
先ツ縫線ヲ直腸ニ施シ次ニ臍側ニ施シ次ニ皮膚ニ施スヲ法トス但シ
直腸ヲ縫合スルニハ腸線ヲ用ユルヲ最モ長トス
術後ハ兩腿ヲ縛定シ日々加底的兒ヲ以テ尿ヲ排出シ兼テ局處ヲ清潔
ニスルヲ肝要トス食物ハ流動物ヲ撰用シ勉メテ大便ノ通利ヲ防キ八
九日ヲ經ルノ後蓖麻子油ヲ用テ其通利ヲ助クヘシ一説ニ蓖麻子油ヲ用ヒ

分娩後時日
ヲ經テ施ス
手術

括約筋作用
ノ回復ヲ目
的トスル手
術

毎日通利ヲ得セ 縫線ハ八九日ニシテ去ルヲ要ス
(二)分娩後時日ヲ經テ施ス者

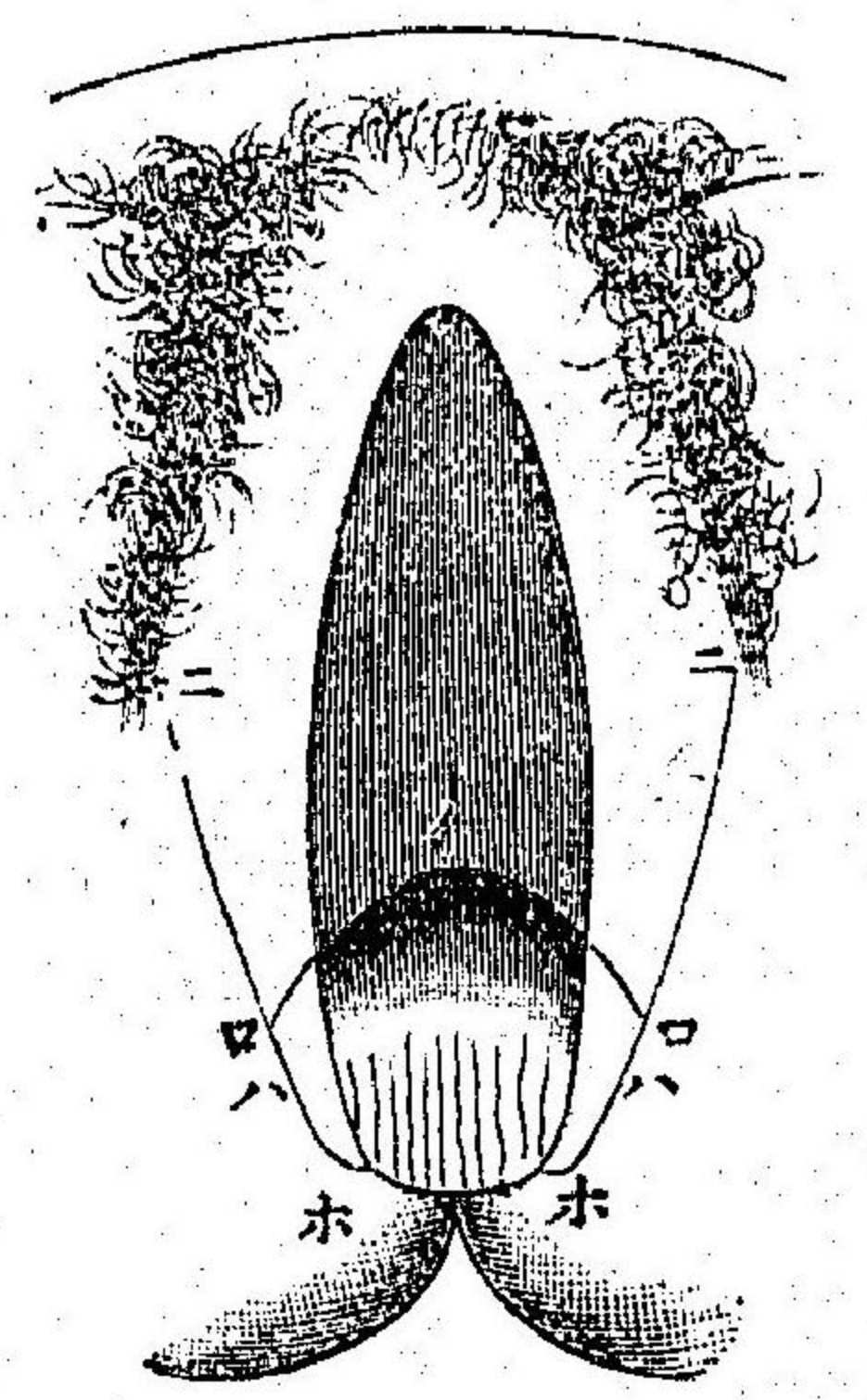
此手術ノ目的ニ二様アリ即チ括約筋作用ノ回復及ヒ會陰ノ回復是ナ
リ

(イ)肛門括約筋ノ作用ヲ回復スルノ目的ヲ達セント欲セハ左ノ術ヲ施
スヲ要ス

先ツ蓖麻子油ノ内用ト灌腸法トヲ以テ直腸ヲ疏通シ患者ヲシテ截石
位置ヲ取ラシメ且ツ迷朦藥ヲ施シ各側ニ介者一人ヲ置テ下肢ヲ保持
シ且ツ術者ノ指揮ニ應シテ陰唇ヲ牽引セシムヘシ 局處ヲ檢スルニ
V字形ノ瘻痕アリテ其尖端ハ上方ニ向フヲ見ル 術者ノ目的ハV字
形瘻痕ノ邊緣ヨリ粘膜ヲ剝離シ新創面ヲ造リ之ヲ密接縫合スルニ在
リ 先ツ膾直腸間中隔ノ下端ニ即チV字形瘻痕ノ尖端(イ)ニ刀ヲ下シ外
方ニ向テ切開シ陰唇ノ内面(ロ)部ニ達シ次テ更ニ刀ヲ陰唇上(ニ)部ニ下

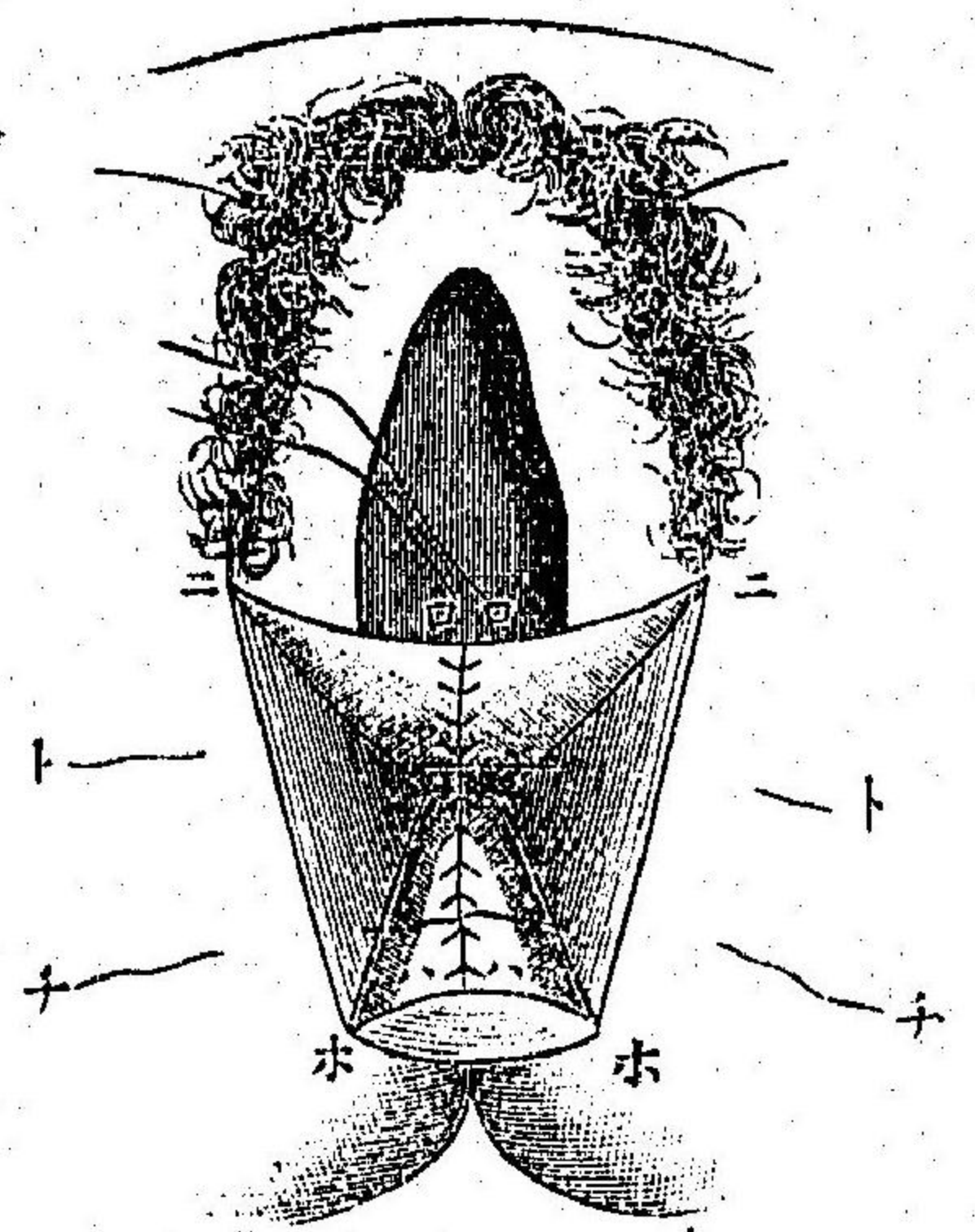
第二十四圖

會陰破裂ノ肛門括約筋ニ及フ者ヲ回復ス
ル爲ニ施行スル手術ノ切開線ヲ示ス
符號ノ解ハ本文ニ詳ナリ



第二十五圖

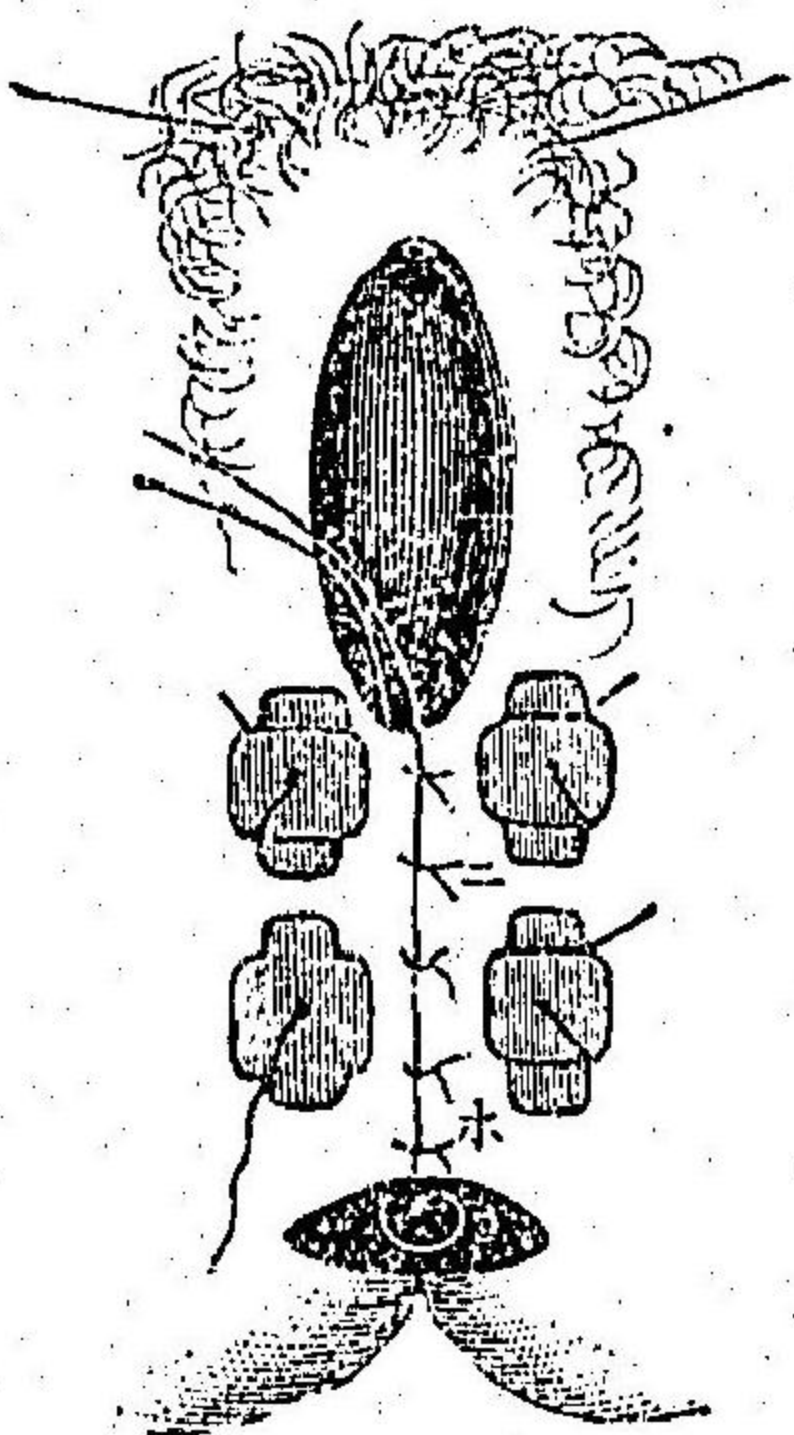
全上ノ手術ニ於ル縫合法ヲ示ス
符號ノ解ハ上圖ニ同シ



シ其縁ニ沿ヒ後方ニ切開シテ括約筋斷端ノ存スル處(ホ)ニ至ルヘシ
 他側モ亦同様ニ切開スルヲ要ス 斯ノ如ク各側ニ二個ノ三角瓣ヲ造
 リ得タレハ前ノ二瓣即チ(イ)(ロ)(三)及ヒ(イ)(ロ)(三)ヲ剝離シテ腔側ニ翻轉
 シ更ニ後ノ二瓣即チ(イ)(ハ)(ホ)及ヒ(イ)(ハ)(ホ)ヲ剝離シ直腸側ニ翻轉シテ
 次ニ銀線ヲ以テ前瓣縁(イ)(ロ)(ト)(イ)(ロ)(ト)ヲ縫合シ後瓣縁(イ)(ハ)(ト)(イ)(ハ)(ト)
 ヲ縫合スルヲ第十五圖ニ示スカ如シ但シ前瓣ノ縫線ハ腔側ニ於テ結
 紮スヘク後瓣ノ縫線ハ直腸
 側ニ於テ結紮スヘシ 今ヤ
 腔ト直腸トノ交通ハ己ニ絶
 テリ次ニ兩側ニ存スル三角
 形ノ新創面ヲ密接癒着セシ
 ムレハ則チ會陰ヲ組成シ得
 ヘシ即チ強銀線ヲ取り第二

第二十六圖

第二十四圖及ヒ第二十五圖ノ結果ヲ示ス



十五圖ニ示スカ如ク

(ト)(チ)ヲ深ク組織中ニ

穿通シ出血全ク遏止

スルヲ俟チ鈕狀板ノ

助ヲ籍テ之ヲ緊紮シ

創面ヲ對接セシムル

ト第二十六圖ニ示ス

カ如クシ更ニ皮膚縁

ニ結節縫合ヲ施セハ

大抵善良ノ結果ヲ得

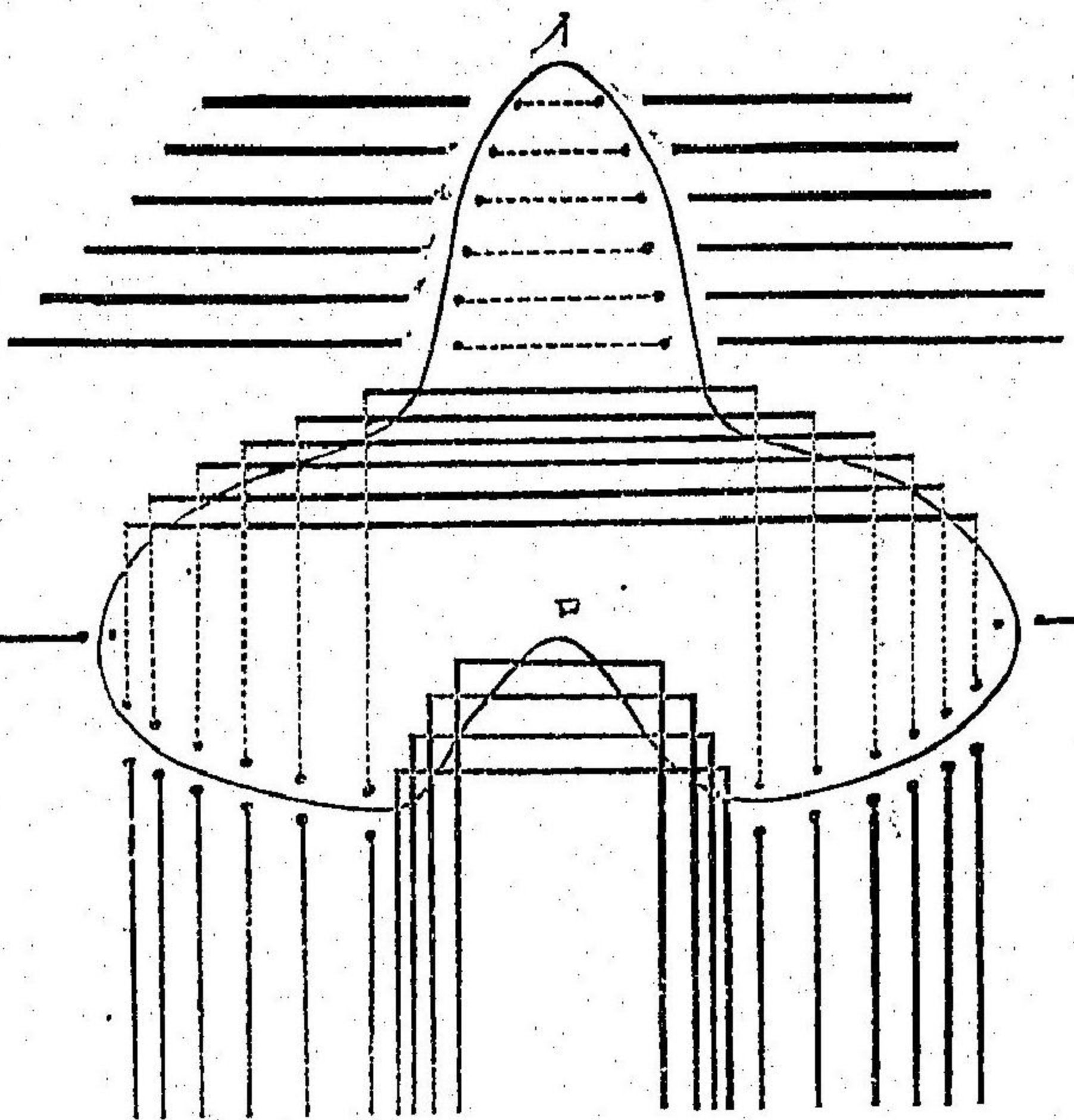
ルモノトス

「ヒルデブラ
ンド氏術

「ヒルデブラ
ンド氏ハ
創面對接部ノ中間ニ

第二十七圖

イ 腔ニ於テ新創面ノ尖端
ロ 直腸ニ於テ同上ノ尖端



會陰ノ回復
ヲ目的トナ
ス術

滲出物ノ澀溜スルヲ慮リ第二十七圖ニ示スカ如ク縦線ヲ用ユルヲ長
トセリ

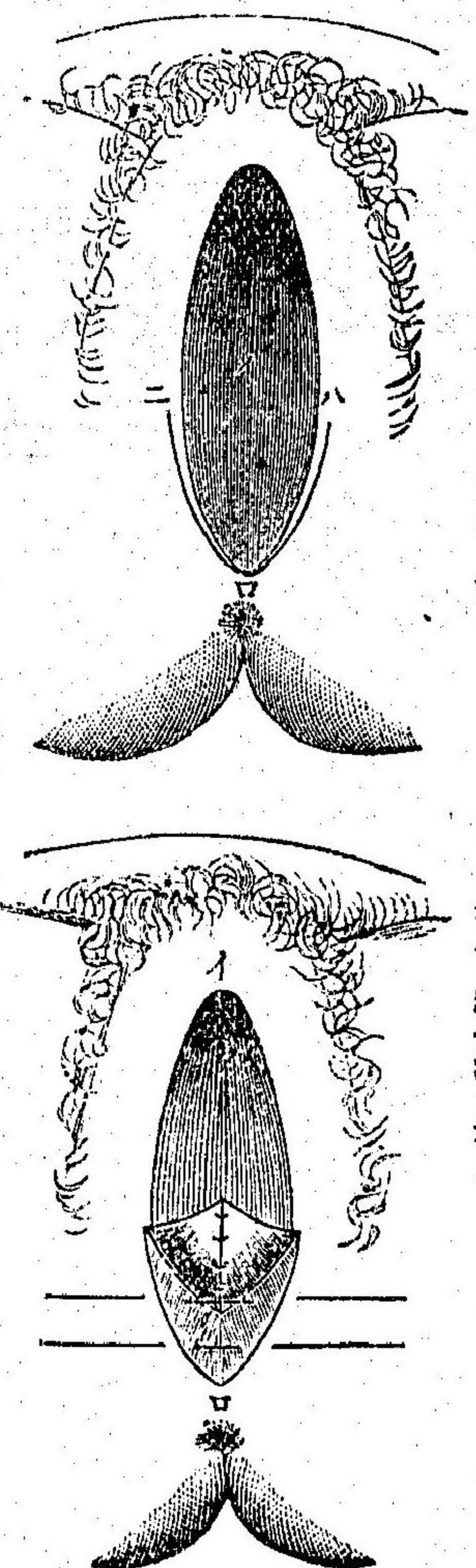
(ロ)會陰ノ回復ヲ目的トナスノ術ハ子宮脱ニ施スヘキ者トス其法種々
アリ左ニ其緊要ナル者ヲ掲ク

第二十八圖甲ノ(イ)ニ刀ヲ下シ膣ノ後壁及ヒ會陰ノ中線ヲ切開シテ(ロ)
ニ達シ更ニ(ロ)ヨリ左右小陰唇ノ内面ヲ前方ニ向ヒ切開シテ(ハ)及ヒ(ニ)
ニ至リ二個ノ三角瓣ヲ造ルヘシ此二瓣ヲ上方ニ向テ剝離翻展シ

第二十八圖

甲 會陰破裂ノ手術ニ於ル切開線ヲ示ス

乙 全上ノ縫合法ヲ示ス



絹絲或ハ銀線ヲ以テ其内縁ヲ縫合スルヲ乙圖ニ示ス如クスヘシ但シ
縦線ノ結節ハ膣側ニ於テ之ヲ爲サ、ルヘカラス次ニ同圖ニ示スカ如
ク二條ノ銀線ヲ深ク組織中ニ穿通シ之ヲ結定シテ創面ヲ密接セシメ
更ニ一ニノ結節縫合ヲ皮膚縁ニ施シ以テ其術ヲ了ルヘシ
其他破裂セル會陰ヲ補綴スルニ種々ノ方法アレヒ之ヲ子宮脱ノ條ニ
讓ル

第三章 膣ノ疾病

○膣閉鎖

膣閉鎖

膣閉鎖ニ先天症ト後天症トノ別アリ共ニ月經ノ流通ヲ妨ケ間々危害
ヲ致スヲアリ

先天膣閉鎖ヲ分テ二種トス曰ク處女膜閉鎖曰ク膣管閉鎖是ナリ

處女膜閉鎖

(一)處女膜閉鎖 處女膜ニ天然ノ孔隙ナクシテ膣口ヲ閉鎖スル者ヲ謂

フ時トシテハ膜質甚ク強厚ニシテ殆ト軟骨様ヲ呈スルヲアリ是レ胎生第十九週以後ニ炎症ヲ發シ次テ癒閉スルニ因ル者ニシテ成長スルニ及ヒ内ニ月經ノ留滯スルヨリ腔壁漸々膨出シ子宮ハ上行シテ瘤狀ノ軟塊トナリ下腹ニ出現ス若シ適宜ノ方術ヲ以テ蓄液ヲ排除セサルキハ子宮ノ頸管及ヒ体腔ノ擴張ヲ起スニ至ル加之時トシテハ喇叭管殊ニ其外端近部モ亦血液ノ爲ニ膨脹スルヲアリ但シ此血液ハ子宮ヨリ進入スルニアラス自家ノ粘膜炎ヨリ溢出スル者ニ係ル而シテ其管ノ内端ハ常態ヲ存シ或ハ閉鎖スル者亦多シ故ニ管中ノ血液ハ漸次ニ外端ヨリ腹腔内ニ流出シテ局處ノ腹膜炎ヲ發シ或ハ子宮外出血ヲ來ス
トアリ

腔管閉鎖

(二)腔管閉鎖 局處閉鎖ト全管閉鎖トノ別アリ局處閉鎖ハ腔管ノ下三分一ノ處ニ存スルト多キヲ以テ動スレハ處女膜閉鎖ト混同シ易ク全管閉鎖ハ大抵子宮ノ發生不全ヲ兼ルモノトス總テ腔管閉鎖ニ在テハ

其上部ノ擴張スルヲ殊ニ甚ク之カ爲ニ膀胱及ヒ直腸ハ壓迫セラレ子宮ハ腹腔ニ上昇スルニ至ル

先天腔閉鎖ノ原因

原因 先天腔閉鎖ハ初メヨリ其部ノ發生セサルニ因リ或ハ一旦發生スルノ後再ヒ癒着スルニ因ル先天處女膜閉鎖ハ胎生第十九週ニ發生セシ處女膜皺襞ノ再ヒ癒着スルモノナリ又處女膜ノ直後ニ於テ腔管ノ閉鎖ヲ生スルト多キハ胎生第十八週ニ至レハ其部ノ密ニ觸接シテ癒合シ易キ事實アルニ因ル 腔ノ中部及ヒ上部ニ於ル閉鎖ハ恐クハ一旦發生スル後炎症性變化ノ爲ニ癒閉スルモノナラン其他全腔ノ缺亡ハ「ミュレル」氏管ノ發生セサルニ因リ下部ノ缺亡ハ同管ノ下方ニ延長シテ「クロアカ」ニ開通セサルニ因ル

後天腔閉鎖ノ原因
徵候

後天腔閉鎖ノ原因ハ種々一ナラス即チ分娩時ノ損傷、窒扶斯、猩紅熱、痘瘡等ニ兼發スル壞疽或ハ器械的外傷及ヒ粘膜炎等ノ結果トス
徵候 先天腔閉鎖ハ婚期ニ至ルマテ徵候ヲ呈セス既ニ婚期ニ至ルモ

未タ月經ヲ見サル者ニ在テハ結婚シテ始テ之ヲ發覺スルニアリ 然レハ時トシテハ小兒ニ在テモ臍内ニ粘液ヲ蓄積スルカ爲ニ手術ヲ要スルニ至ルニアリ 若シ初生兒ニ於テ處女膜閉鎖ヲ發見セハ速ニ之ヲ切開スルヲ良トス

○ 先天臍閉鎖ニ罹ル者ニシテ婚期ニ達スレハ月經ノ徵候アルニモ拘ハラス經血ヲ見スシテ臍管ノ膨脹ヲ起シ骨盤内ニ疼痛ヲ發ス此疼痛タル當初ニ在テハ經期ノミニ發スレハ後ニ至レハ持長性ニ變シ且ツ臍管ノ擴張スルカ爲ニ膀胱及ヒ直腸ヲ壓迫シ利尿大便通共ニ困難ト爲ル加之下腹ニ著大ノ瘤腫ヲ現出スルヲ以テ間々妊娠ノ疑ヲ起スニアリ 若シ醫療ヲ怠ルハ遂ニ子宮頸部或ハ喇叭管ノ破裂ヲ致スニアリ 時トシテハ破裂セサルモ腹膜炎ヲ發シテ斃ルハニアリ或ハ希ニ閉鎖部ノ自裂若クハ壞疽ヲ來スニアリ而シテ臍内ニ蓄積セル血液ハ一種ノ性狀ヲ有ス即チ粘膠ニシテ褐色ヲ呈シ凝血ヲ含マス顯微鏡ヲ以テ檢

鑑別

スレハ萎縮セル赤血球、扁平上皮細胞、粘液球、血色素等ヲ含ムヲ見ル而シテ其液ノ凝固セサル所以ノモノハ粘液ヲ混スルニ因ル

鑑別 女子既ニ婚期ニ達スルモ月經未タ來ラス種々ノ汎發症ヲ起シ且ツ骨盤内ノ疼痛ヲ訴フル者ハ宜シク外陰部ヲ檢査スヘシ通例處女膜閉鎖ニ在テハ其膜ノ外方ニ膨出スルヲ見ルヘク 但シ本病ニ在テハ尿道口常ニ廣潤ニシテ

腔口ト誤認スルコトアリ 手指ヲ以テ直腸ヲ檢スレハ其壁モ亦膨脹スルヲ認

ムヘシ更ニ他手ヲ以テ下腹ヲ按壓スレハ骨盤内ニ彈性ノ大囊アリテ

其上面ニハ囊ヨリモ稍堅固ナル瘤狀塊ノ附着スルヲ覺フ 此塊ハ則チ子宮ノ上行スル

者ニシテ若シ腔管ト共ニ木器ノ擴張スル者ニ在テハ此塊アルヲ認メス 臍管閉鎖ノ症狀モ亦大約前記ノ如

シト雖モ唯處女膜ノ膨出スルコトナキヲ以テ異ナリトス

治法

治法 治療ノ要ハ新ニ月經ノ通路ヲ開クニ在リ處女膜閉鎖ニ於テハ容易ニ之ヲ切開スルヲ得ヘシト雖モ臍管閉鎖ニ在テハ之ヲ開通スルコト甚タ難シトス而シテ其施術ニ二様ノ危険アルヲ以テ最モ注意セ

サルハカラス即チ(一)ハ急速ニ蓄液ヲ漏出スルルハ喇叭管ノ破裂ヲ來シ或ハ子宮周圍ノ癒着ヲ斷離シテ内部出血若クハ腹膜炎ヲ發スルノ虞アリ蓋シ急速ニ蓄液ヲ漏出スルルハ子宮頓ニ下降シテ喇叭管或ハ癒着部ヲ牽引スレハナリ故ニ此危險ヲ避ンカ爲ニ可及的徐々ニ蓄液ヲ漏出セシメ且ツ妄リニ囊体ヲ壓迫スルカ如キ所爲アルヘカラス(二)ハ術後ノ敗血症ナリ蓋シ完全ナル防腐療法ハ此部ニ施シ難シト雖モ石炭酸水ヲ以テ頻々囊内ヲ洗滌シ且ツ排泄ヲ自在ナラシムレハ大ニ此危險ヲ減スルヲ得ヘシ

處女膜切開法

處女膜切開法 此術ハ甚タ簡易ナレモ尋常ノ診察所ニ於テ施スヘカラス必ス病院或ハ病家ニ於テ之ヲ施スヘシ 施術ノ長期ハ前後兩月經期ノ間ニ在リ先ツ小套管針ヲ刺入シ或ハ刀ヲ以テ小孔ヲ作り徐々ニ蓄液ヲ漏出シテ其盡クルヲ視ヒ前孔ヲ十字形ニ割開スヘシ或ハ鑷子ヲ以テ其膜ヲ撮擧シ橢圓孔ヲ作ルモ可ナリ切開後ハ温石炭酸水ヲ

以テ十分囊中ヲ洗滌シ「リント」ヲ石炭酸油ニ懸シテ之ヲ創口ニ挿ミ更ニ大墊子ヲ陰部ニ施シ以テ術ヲ了ルヘシ術後數日間ハ必ス安臥ヲ命シ步行セシムヘカラス

膣切開法

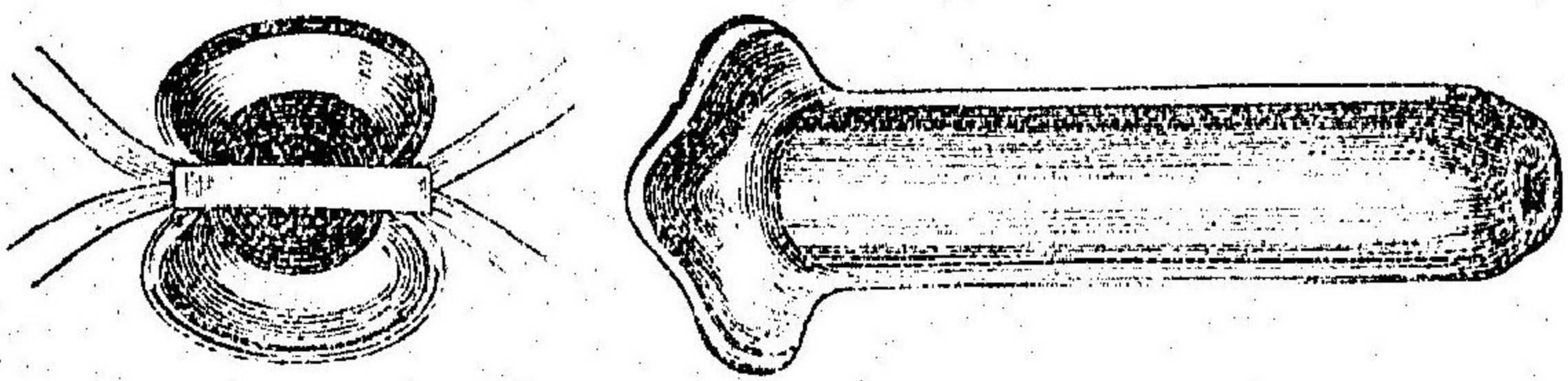
膣切開法 此術ヲ施サント欲セハ患者ヲシテ截石位置ヲ取ラシメ介者ニ命シテ左右ヨリ陰唇ヲ牽引セシメ術者ハ鑷製男子加底的兒ヲ以テ尿ヲ導出スルノ後更ニ介者ヲシテ此器ヲ保持シ尿道及ヒ膀胱ヲ耻骨弓下ニ向テ牽引セシムヘシ是ニ於テ術者ハ左手ノ示指ヲ直腸ニ挿入シ先ツ此指ト加底的兒トノ間ニ存スル組織ノ厚薄及ヒ膣壁膨脹ノ度ヲ檢定シ次ニ全指ヲ以テ直腸ヲ後方ニ牽引シ介者ヲシテ之ヲ爲サシムルモ可ナリ右手ニ刀ヲ執リ處女膜或ハ尿道ト直腸トノ間ニ存スル組織ヲ橫割シテ膨脹セル囊壁ニ達スルニ至ルヘシ但シ此際最モ細心注意スルニ非サレハ前ハ尿道膀胱後ハ直腸ヲ損傷スルノ恐アリ既ニ囊壁ニ達セハ前術ニ於ルカ如ク注意シテ徐々ニ蓄液ヲ漏出シ囊内ヲ洗滌シ且ツ石炭

囊壁ニ達

酸油ニ蘸セル「リント」ヲ挿入シテ其術ヲ了ル
 ヘシ 術後一二日ヲ經レハ「リント」ニ代テ第
 二十九圖ニ示スカ如キ硝子製ノ管狀ヲ挿
 入シ以テ新路ノ狹窄スルヲ防クヘシ此栓ハ
大小數
様アリ外端ニハ紐帶ヲ附シ施用ノ際身体ノ既ニ
前後ニ於テ腹帶ニ繋ぎスルニ便ナラシム
 創面ノ全ク治癒スル後ト雖モ數月或ハ數年
 ノ間ハ適宜ノ「ベサリ」ヲ挿置スヘシ然ラサ
 レハ再ヒ縮閉スルノ虞アリ
 時トシテハ經血蓄積ノ症狀ナキ者ニ於テ此
 術ヲ要スル「ア」例之子宮ノ存在スル「確
 然タルモ月經ヲ見サルカ爲メ身体ノ違和ヲ
 患フル者或ハ交接ヲ廢スヘカヲサルノ情實
 アル者ニ於ルカ如シ但シ施術ノ方法ハ上文

第二十圖

硝子製ノ管狀
 栓ヲ示
 ス左側
 ノ圖ハ
 此栓ノ
 外端ニ
 紐帶ヲ
 附スル
 ヲ示ス



ニ記スル者ト異ナラス然レモ腔管ノ膨脹セサルヲ以テ施術甚ク困難
 ナリトス

又双腔子宮ヲ有スル者ニシテ一側ノ腔ハ開通シテ月經ヲ漏出スレ
 他側ノ腔ハ閉鎖シテ經血ノ爲ニ膨脹スル「ア」此畸形ニ在テハ左
 右腔間ニ存スル中隔自然ニ破裂シテ蓄液ヲ漏出スル「ア」或ハ喇叭
 管ノ破裂ヲ起ス「ア」

此症ノ徵候モ亦畧ホ前症ニ同シト雖モ多クハ不齊ノ月經アルヲ以テ
 異ナリトス 局處ヲ檢スルニ開通セル腔管ノ一側ニ波動ヲ有スル腫
 腫ヲ存シ希ニハ腔口ニ膨出スルヲ見ル「ア」時トシテハ其腫深部ニ
 存シ他病殊ニ子宮外血腫ト混同スル「ア」宜シク套管針ヲ以テ蓄液
 ヲ導出シ其液ノ性質ヲ檢査シテ之ヲ鑑定スヘシ
 治法ハ徐々ニ蓄液ヲ漏出シ永久ノ孔道ヲ開設スルニアリ

○腔炎

膣炎

病理

膣炎ハ其類一ナラス原因ニ從テ之ヲ分テハ單純炎アリ淋毒性炎アリ
 經過ニ從テ之ヲ分テハ急性炎アリ慢性炎アリ其他實弗的里性膣炎老
 人膣炎等ノ如キ特異症ヲ見ルコト亦之アリ

病理 膣壁若シ炎症ヲ發スレハ粘膜腫起シテ顆粒狀ヲ呈ス是レ乳嘴
 中ニ細胞ノ滲入シテ上皮ヲ壓上スルニ因ル而シテ其上皮ノ表層ハ剝
 離排出セラル、チ常トス慢性症ニ在テハ上皮ノ一層菲薄トナルカ爲
 ニ粘膜面稍々平坦ト爲ルヲ見ルヘシ 妊婦若シ膣炎ニ罹ルルハ往々
 粘膜ニ氣腫狀ヲ呈スルコトアリ 老人膣炎ハ一ニ癒着性膣炎ト名ク此
 症ニ在テハ上皮剝脱シ其對向面癒着スルコトアリ原因ハ未タ詳ナラス
 實弗的里性膣炎ハ或ハ局限處ヲ侵シ或ハ全管ヲ襲フ者ニシテ甲ニ在
 テハ局限セル滲出物アルヲ認メ乙ニ在テハ粘膜甚シク腫起シテ義膜
 ノ爲ニ被ハレ間々手指ヲ子宮頸部ニ達セント欲スルモ能ハサルコトア
 リ

原因

原因 種々一ナラス(イ)異物ノ壓迫例之填塞物ベサリトシテ施用ニ由ル
 カ如シ(ロ)注射藥例之刺衝性藥液注射藥ノ寒温其宜キヲ得サルニ由ル
 カ如シ(ハ)淋毒ニ由ル之ヲ本病中最多ノ原因トス(ニ)排出物ノ刺衝ニ由
 ル例之子宮内膜炎、癌腫等ニ於ル排泄物、膣膀胱瘻ニ於ル尿ノ如シ(ホ)房
 事過度ニ由ル是レ殊ニ新婚後ニ見ルコト多シ(ハ)寄生物例之膣内ニ黴菌
 ナ生シ或ハ蟻虫ノ直腸ヨリ出テ膣内ニ移ルカ如シ(ト)實弗的里性膣炎
 ハ分娩後ニ發シ又窒扶斯、痘瘡及ヒ虎列刺病ニ併發スルコトアリ(チ)外陰
 部炎ノ膣内ニ蔓延スルニ因ルコトアリ

徵候

徵候 其尤モ著明ナルハ灼熱、疼痛、尿意頻數及ヒ粘液膿穢排泄物はナ
 リ此四候ハ淋毒性膣炎ニ於テ殊ニ甚シク子宮鏡ノ挿入、膣内ノ灌注法
 等ヲ施スニ往々困難ナルコトアリ 時トシテハ其炎症ノ子宮内膜或ハ
 骨盤腹膜或ハ膀胱ニ蔓延スルコトアリ然ルルハ体温昇騰シ局限ノ徵候
 モ亦隨テ増劇スルコト固ヨリ言テ俟タス 實弗的里性膣炎或ハ壞疽性

鑑別

膣炎ニ在テハ汎發ノ症候甚タ顯著ニシテ其排泄物ハ特別ノ性状ヲ有スルヲ常トス 慢性膣炎ニ在テハ汎發局發ノ症狀俱ニ甚シカラス但シ子宮頸管ノ加答兒ヲ兼發スルヤ否ニ注意スルヲ要ス 癒合性膣炎ハ顯著ノ徵候ヲ呈セス稍々排泄物ヲ見ルニ過キサルノミ

鑑別 手指ヲ以テ陰唇ヲ開ケハ排泄物アリテ流出シ粘膜ニ觸ルレハ其而顆粒狀ヲ呈ス又子宮鏡ヲ以テ膣内ヲ檢スレハ粘膜發赤腫脹シテ膿樣液ノ爲ニ被ハル、ヲ見ル然レモ其液ハ子宮口ヨリ漏出スルニ非サルヤ否ヲ檢シ之ト混同スヘカラス 單純膣炎ト淋毒性膣炎トノ鑑別ハ間々甚タ難キコアリ病歴ヲ審問スルヲ以テ緊要トス蓋シ從前帶下ナクシテ忽然膣炎ヲ發シ利尿頻數ヲ訴フル者及ヒ其病頑固ニシテ醫藥功ヲ奏シ難キ者ハ淋毒性膣炎ノ徵ナリ 或人ノ記スル所ニ據レハ骨盤膿瘍ノ膣内ニ破潰セル者ヲ膣炎ト誤認セシコアリト云フ但シ診查ノ際少シク意ヲ用ユレハ斯ノ如キ誤認ヲ致スコナカルヘシ

豫後

豫後 單純ノ急性膣炎ハ速ニ醫藥ヲ加フレハ全治シ易シト雖モ淋毒性膣炎ハ子宮内膜炎、骨盤腹膜炎及ヒ膀胱炎ヲ誘起スルノ虞アリ又實弗的里性膣炎及ヒ壞疽性膣炎ハ小兒ニ在テハ甚タ危險ナリトス何トナレハ其急性症狀幸ニ沈止スルモ種々ノ繼發症ヲ來スコト多ケレハナリ

治法

治法 勉メテ原因ヲ去ルヲ要ス例之異物ノ存在ニ由ル者ハ之ヲ驅除スルカ如シ總テ急性ノ症狀ヲ呈スル者ハ導中ニ平臥セシメ微温湯ヲ以テ膣内ヲ洗滌スルコト一日三四回ナルヘシ輕症ニ在テハ之ニ由テ大抵速ニ緩解スルヲ得ヘシ 淋毒性膣炎ニ在テハ先ツ子宮鏡ノ助ヲ藉テ能ク膣内ヲ洗滌シ單寧、明礬ノ如キ收斂藥ヲ撒布シ或ハ棉花ヲ以テ大球ヲ作り單寧、百里設林ノ合劑ニ蘸シ膣内ニ挿置スルヲ良トス或ハ硝酸銀ノ濃溶液 $\text{O} \cdot \text{O} \cdot \text{O}$ $\text{H}_2\text{O} \cdot \text{O}$ 或ハ沃度丁幾ヲ塗布シ棉花球ヲ百里設林ニ蘸シテ膣内ヲ填塞スレハ甚タ良驗アリ慢性症ニ於テ殊ニ然リト

ス 又收斂性ノ藥液ヲ腔内ニ注入シテ充分粘膜ニ觸接セシムルノ後
徐々ニ流出セシムルモ可ナリ 坐藥ハ古來稱用スル所ニシテ今尙ホ
之ヲ施ス₁多シ通常收斂藥ヲ柯々阿脂ニ溶和シ塊トナシテ腔内ニ挿
置スルモノトス 老人腔炎ハ特別ノ醫療ヲ要セス 壞疽性腔炎ニハ
防腐液ノ澀注法ヲ行ヒ既ニ壞死部ノ分離セシ後ハ綿花ヲ石炭酸油或
ハ硼酸軟膏ニ蘸シ挿入スルニ宜シ

○腔瘻

腔瘻トハ腔口ヲ圍擁セル筋纖維ノ反射的收縮ヲ謂フ

原因 神經過敏ノ婦人ニ在テハ間々局處ニ刺衝ナクシテ發スル₁ア
レ₁通常左記ノ原因アリテ存ス即チ(イ)舶櫟窩ノ感覺過敏(ロ)未タ破裂
セサル處女膜ノ炎症或ハ(ミ)ルチ桐櫟肉ノ感覺過敏(ハ)處女膜内部ノ小
潰瘍(ニ)肛門罅裂(ホ)尿道口ノ肉櫟腫是ナリ

徵候

徵候 徵候ノ主ナル者ハ交接困難及ヒ不妊是ナリ但シ乙ハ必ス甲ノ

腔瘻
原因

治法

結果ナリトス 本病ハ新婚ノ婦人ニ多ク痛楚ノ爲ニ完全ノ交接ヲ遂
グル₁能ハス終ニ醫治ヲ乞フニ至ルモノナリ 其甚シキニ至テハ輕
微ノ刺衝ニ逢フモ忽チ劇痛ヲ發シ兩股ヲ密接シテ開放スル₁能ハス
之カ爲ニ充分患部ヲ診査シ得サル₁アリ或ハ局處ニ變化ナキモ手指
ヲ腔内ニ挿入スレハ忽チ反射性收縮ヲ起ス₁アリ或ハ腔管ノ上部ノ
ミニ收縮ヲ起ス₁アリ是レ舉肛筋ノ痙攣ニ因ル 又卵巢脫或ハ骨盤
蜂巢織炎ニ罹ル者ハ交接時ニ疼痛ヲ發スル₁アリ然レ₁其疼痛ハ腔
口ニ發スルニ非サルヲ以テ腔瘻ト區別セサルハカラス

治法 此病ハ適當ノ醫療ニ依テ全治スル₁多シ殊ニ局處ヲ檢査シテ
原因ヲ去ル₁ナ勉ムヘシ例之尿道口ニ肉櫟腫ヲ生スル者ハ之ヲ切除
スヘキカ如シ時トシテハ全處女膜ノ割去ヲ要スル₁アリ若シ罅裂ア
レハ刀ヲ以テ其底ヲ縱割シ或ハ之ニ烙鉞ヲ施ス₁可トス 沃度仿謨
軟膏ハ能ク感覺過敏ヲ治シ其癒合ヲ助クルノ効アリ 局處ノ原因既

「シムス」氏術

ニ去レハ臍口ヲ擴張セシムルノ法ヲ施スヘシ即チ護謨木材或ハ硝子ノ圓錐狀擴張器ヲ取り朝夕二回臍内ニ挿入スヘシ但シ其器ハ初メ小ナル者ヲ用ヒ漸次ニ大ナル者ニ移ルヲ要ス 患者若シ此擴張法ニ堪ヘサレハ「シムス」氏ノ手術ヲ施スニ宜シ其法ハ臍口括約筋纖維ノ淺層ヲ割斷スルニ在リ即チ迷朦藥ヲ吸入セシメ術者左手ノ二指ヲ臍口ニ挿入シテ之ヲ擴張シ刀ヲ以テ後縫合ノ各側ヲ切開スルヲ大約五センチメートルナルヘシ但シ此切開ハ臍口ノ上一、二センチメートル許ノ處ヨリ會陰ノ中線ニ至ルヲ要ス 術後ハ「リント」ヲ臍口ニ填塞シ丁字形細帶ヲ施スヘシ術中間々出血多キヲアレハ填塞ヲ以テ之ヲ止ムルニ足ルモノナリ 次日「リント」ヲ去リ硝子擴張器ノ挿入ヲ始ムヘシ但シ朝夕各一二時間之ヲ施シ數週間持續シテ愈ルヘカラス 又刀ニ代ルニ手指ヲ用ヒ強ク臍口ヲ擴張シ筋纖維ノ破斷スルヲ以テ度トスルノ法アリ此法ハ出血ナク創面ヲ生セサルカ故ニ前術ニ勝ルヲアリ

局處療法ニ兼テ全身療法モ亦怠ルヘカラス住地ノ轉換新鮮氣中ノ逍遙強壯滋養ノ藥餌ハ尤モ緊要ナリ

○臍癰腫

臍癰腫

囊腫

臍ハ種々ノ癰腫ヲ生ス即チ囊腫、纖維癰、癌腫、サルコマ等是ナリ (一) 囊腫 此腫ハ臍ノ前壁下方三分一ノ處ニ生スルヲ最モ多シ通常一個ナレハ間々數個ナルヲアリ大小一ナラス其大ナル者ハ雞卵大ニ至ルヲアリ囊ノ内面ニハ一層ノ圓柱狀上皮ヲ被ヒ内容物ハ稀薄透明ナル者アリ或ハ粘膠ニシテ黯色ヲ帶フル者アリ

此腫ノ發生スル方法ニ至テハ諸説紛々未ダ一定セス元來臍ノ内膜ハ尋常ノ粘液腺ヲ有セサルカ故ニ此腫ハ粘液腺ノ増大スル者ニ非サルヲ察スヘシ

徵候

徵候 此腫ノ小ナル者ハ毫モ異常ヲ呈セサルヲ以テ久シク之ヲ發見セサルヲ往々之アリ然レハ其大ナル者ハ多クハ帶下ヲ來シ交接ヲ妨

鑑別	治法	纖維瘤	徵候
ケ或ハ間々分娩ヲ妨グルトアリ 鑑別 此腫ノ大ナル者ハ其面滑澤且ツ波動ヲ有スルヲ以テ之ヲ鑑別スルト難カラス時トシテハ此腫ト「バルトリニ」腺ノ嚢腫ト混同スルトアリ然レモ甲ハ腔内ニ存シ乙ハ腔口或ハ小陰唇ノ内面ニ位スルヲ以テ之ヲ鑑別スルト容易ナリトス又少シク注意スレハ膀胱脱及ヒ直腸脱ト混同スルトナカルヘシ	治法 刀ヲ以テ嚢壁ヲ切開シ其内面ニ烙鉄ヲ施スヘシ 或ハ嚢壁ノ一片ヲ切除シ其縁ヲ腔粘膜ニ縫接スルトアリ但シ老人ノ此病ニ罹リ著シキ苦楚ナキ者ハ敢テ手ヲ下スヲ要セス	(一)纖維瘤 腔壁ハ此瘤ヲ發スルト甚タ少ナシ其發スルヤ多クハ前壁ニ在リ大小一ナラス或ハ莖ヲ有シ或ハ然ラス其組織ハ纖維組織ヨリ成リ滑平筋纖維ヲ含ムト猶ホ子宮ノ纖維瘤ニ於ルカ如シ	徵候 小ナル者ハ通常ヲ呈セサレモ大ナル者ハ尿及ヒ月經ノ排泄ヲ

鑑別	治法	癌腫	徵候
妨グルトアリ 鑑別 小ナル者ハ其鑑別敢テ難カラサレモ大ニシテ腔内ヲ充填スル者ノ如キハ他ノ瘤腫ト混同スルトアリ宜シク注意シテ之ヲ鑑別スヘシ	治法 被膜ヲ切開シテ實體ヲ剝離拔除スルヲ法トス莖ヲ有スル者ハ結締シ且ツ切除スルヲ要ス	(三)癌腫 子宮頸部ノ癌腫ハ動モスレハ腔壁ニ蔓延スルトアレモ癌腫ノ腔壁ヨリ原發スルハ唯希ニ見ルトアルノミ 癌腫ニ二様アリ扁平隆起シテ一部ニ局限スル者及ヒ腔壁ノ全圍ニ侵淫シテ環狀ヲ呈シ内管ノ狭窄ヲ致ス者是ナリ而シテ鼠蹊腺ハ速ニ延累ヲ蒙ムルト多シ	徵候 子宮頸部ノ癌腫ニ於ルカ如ク出血帶下及ヒ疼痛ヲ起セモ初期ニ在テハ著シキ疼痛ナキヲ常トス
鑑別 腔内ヲ檢シ又直腸ヨリ檢スヘシ 其已ニ増長セル者ニ在テハ			

初ヨリ腔壁ニ生セシ者ナル歟將タ子宮ヨリ蔓延セシ者ナル歟ヲ判定スルヲ甚タ難シトス

治法

治法 切除、刮去及ヒ烙銕ノ三法ニ就テ處置スヘシ若シ能ハサレハ姑息法ヲ施スヘキノミ

「サルコマ」

(四)「サルコマ」腔壁ノサルコマハ稀ニ見ル所トス時トシテハ子宮、サルコマノ蔓延スルニ由ル者アリ治法ハ之ヲ切除スルニ在リ但シ全腔ニ「サルコマ」變質ヲ生スル者ノ如キハ固ヨリ手術ヲ施スヲ能ハス

第四章 膀胱及尿道ノ疾病

○膀胱及尿道ノ畸形

膀胱及ヒ尿道ノ畸形

膀胱及ヒ尿道ニ畸形ヲ生スルノ理由ヲ了知セント欲セハ先ツ其發生ノ方法ヲ明ニセサルヘカラス蓋シ膀胱ハ尿管ノ下部即チ其腹壁内ニ圍擁セラル、部分ヨリ成リ尿道後壁ノ上部ハ「ミュレル」氏管ヨリ成リ

尿道轉位

○尿道轉位

其下部ハ全ク尿生殖管ヨリ成ル者トス故ニ若シ其發生不全ナルハ種々ノ畸形ヲ生ス即チ(一)全尿道ノ缺亡(二)尿道外部ノ缺亡(三)尿道内部ノ缺亡(四)尿道閉鎖(五)膀胱ノ翻出是ナリ然レモ以上ノ畸形ハ極テ希ニ見ル所ニシテ實際ニ益少ナシ故ニ詳記セス

本病ハ膀胱轉位ト共ニ起ル者トス故ニ其條下ニ併記スヘシ

○尿道新生物

尿道新生物

尿道ハ諸般ノ瘤腫ヲ生ス即チ乳嘴瘤「ポリプス」「サルコマ」癌腫、血管瘤是ナリ就中血管瘤ヲ生スルヲ最モ多シトス

血管瘤

血管瘤ハ結締織中ニ細血管ノ增生擴張スルヨリ成リ表面ハ鱗狀上皮細胞ヲ以テ被ハル小ナル者ハ帽針頭ノ如ク大ナル者ハ豌豆ノ如シ其質甚タ柔軟ニシテ鮮紅色ヲ呈シ尿道口ニ突出ス 此瘤ハ利尿時ノ疼痛ヲ以テ主徴トス時トシテハ尿閉ヲ來シ或ハ交接時ニ疼痛ヲ發スル

トアリ 又希ニハ尿意頻數ニシテ一時間ニ數回利尿セサルヲ得サル
トアリ

乳嚙瘤ハ通常疼痛ヲ覺ヘス癌腫ハ硬固ニシテ結核狀ヲ呈シ遂ニ潰爛
スルニ至ル「サルコマ」ノ如キハ尤モ希ニシテ顯微鏡検査ヲ行ヒ僅ニ其
性ヲ知ルトアルノミ

治法

治法 血管瘤ヲ療スルニハ患者ヲシテ截石位置ニ在ラシメ迷朦藥ヲ
施シ「バクエリン」氏ノ燒灼器ヲ以テ瘤体ヲ燒燼スルヲ可トス若シ出血
ヲ來スルハ腔内ニ「リント」ヲ充填シ且ツ其餘片ヲ以テ尿口部ヲ壓定シ
丁字帶ヲ施スヘシ其他ノ瘤腫ハ切除劑去ノニ法ヲ以テ處置スヘシ

○尿道炎

尿道炎

尿道炎ハ急慢二性アリ急性炎ハ通常淋毒ニ起因スル者ニシテ尿意頻
數ト爲リ利尿時ニ疼痛ヲ覺ヘ尿口ヨリ膿汁ヲ排泄ス 試ニ手指ヲ以
テ腔内ヨリ按摸スレハ尿道腫大シテ疼痛アルヲ認ムヘシ 慢性炎ハ

治法

通常加底的兒挿入ノ爲ニ粘膜ヲ損傷シ小ナル罅裂ヲ貽スニ因ル者ニ
シテ利尿時ノ疼痛甚々劇烈ナルト多シ

治法 毛筆ヲ以テ硝酸銀ノ濃溶液ヲ尿道ニ塗布シ内服ニハ稀釋飲料
ヲ與ヘテ尿量ヲ増加セシムヘシ又慢性症ニハ拔爾撒謨劑ヲ用ユルヲ
良トス沃度仿謨「ブージー」其方沃度仿謨〇、三有加利布丟斯油十滴柯々阿ニ
脂ニ、五ヲ調和シ適宜ノ「ブージー」下爲スモ、二十倍石炭酸油ヲ塗布シ尿道ニ挿入スルモ亦良功アリ

○尿道ノ擴張及狹窄

尿道ノ擴張

婦人ノ尿道ハ希ニ甚シク擴張スルトアリ又腔閉鎖ノ婦人ニ於テ陰莖
ヲ尿道ニ送入セシカ爲ニ其擴張ヲ貽セシ例アリ而シテ其擴張ハ尿道
ノ一部ニ生スルトアリ或ハ其全部ニ生スルトアリ

治法

治法 烙鐵或ハ電氣器ヲ以テ粘膜ヲ燒灼スルニ宜シ

尿道ノ狹窄

尿道ノ狹窄ハ婦人ニ於テ之ヲ見ルト最モ罕ナリ若シ之アルヲ認メハ
「ブージー」或ハ切開法ヲ以テ容易ニ之ヲ治スルヲ得ヘシ

尿道粘膜炎

○尿道粘膜炎
尿道ノ粘膜炎ハ希ニ外翻シテ瘤状ヲ呈スルコトアリ少女ニ於テ殊ニ然リトス其因未タ詳ナラス

治法

治法 速ニ療セサレハ或ハ潰爛スルニ至ルコトアリ初メ先ツ還納法ヲ試ミ効ナキハ大ナル加底的兒ヲ尿道ニ挿入シテ之ヲ中軸トシ其周圍ニ翻出セル粘膜炎ヲ尿道口ニ接シテ緊繫スヘシ大抵數日ニシテ壞死脫離スル者トス

○膀胱ノ轉移

膀胱ノ轉移

婦人ノ膀胱ハ空虚ナレハ一方ニ偏シテ必ス中央ニ位セス斯ノ如ク常ニ固定セサルカ故ニ次ノ原因ニ逢フハ甚タ轉移シ易シ即チ(イ)分娩ノ時ニ當テハ上方ニ牽引セラル(ロ)妊娠子宮ノ後轉症子宮纖維瘤卵巣瘤骨盤内血腫等アレハ上方ニ壓送セラル(ハ)巨大ナル子宮纖維瘤及ヒ卵巣瘤ハ其前面ト膀胱トノ間ニ癒着ヲ來スコトアリ然ルハ其瘤腫ノ

増大スルニ從テ腹腔ニ上行ス(ニ)子宮脱或ハ子宮腔部ノ肥大延長スル者ニ於テハ膀胱下方ニ轉移ス(ホ)子宮ノ前屈症ニ在テハ膀胱後下方ニ墜下シ間々利尿困難ヲ起スコトアリ而シテ斯ノ如キ膀胱ノ轉移ハ必ス尿道ノ變位ヲ兼メル者トス

○膀胱脱

膀胱脱

膀胱脱トハ膀胱後壁ノ後下方ニ膨出シテ子宮及ヒ膀胱底ハ依然トシテ常位ヲ變セサル者ヲ謂フ尋常膀胱脱ト稱スル者ハ其實子宮脱ノ兼發症ナルコト多ク又老人子宮脱ト稱スル者ハ其實膀胱脱ナルコト多シ

第三十圖

手指或ハ消息子ヲ用ヒテ診査セハ

膀胱ヲ

容易ニ之ヲ鑑別スルヲ得ヘシ

具フル

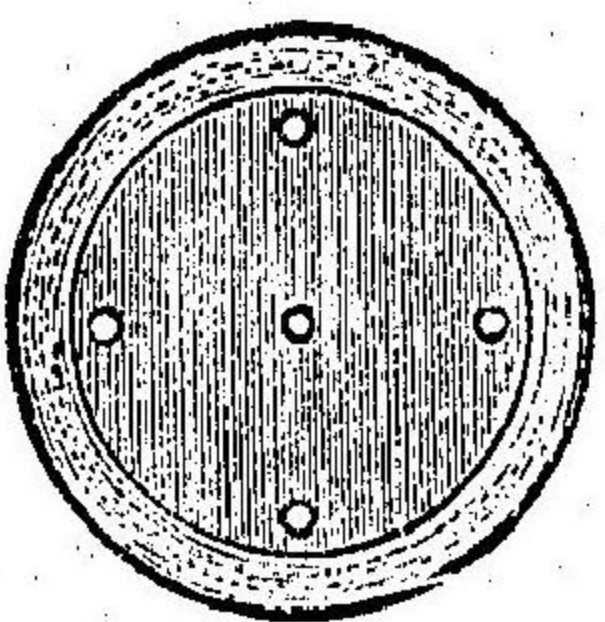
治法 第三十圖若クハ第三十一圖

環状ニ

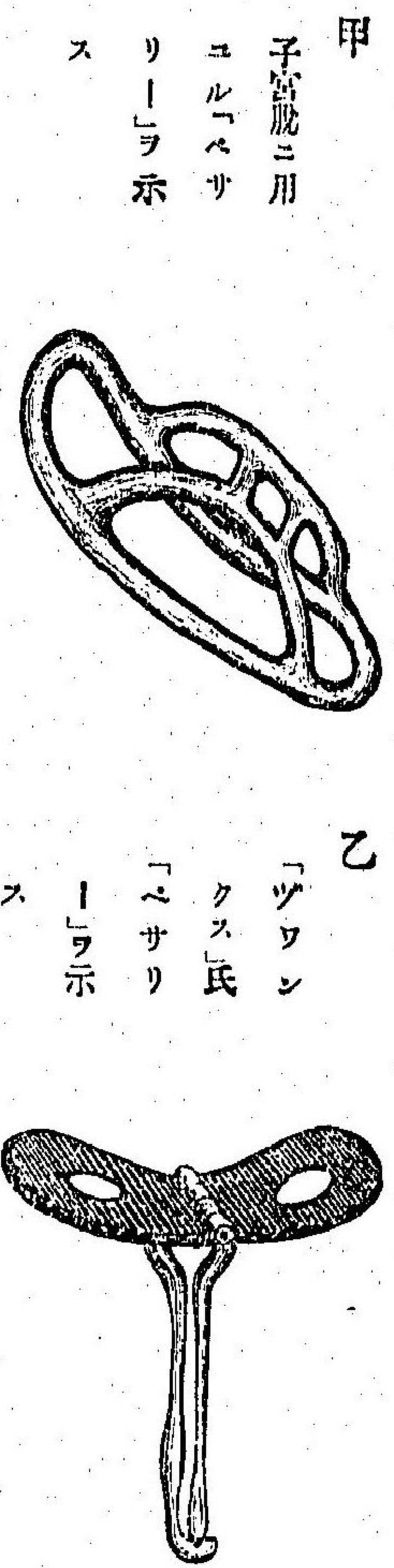
甲乙ノ如キ「ベサリ」ヲ施スヘシ若

「サリ」

シ其効ナキ者ニハ「マルチン氏」手術



第三十一圖



ヲ施スニ宜シ但シ其術式ハ子宮脱條下ニ掲ケ

○膀胱新生物

膀胱新生物

膀胱ハ粘液「ポリプス」纖維「ポリプス」「サルコマ」癌腫及ヒ絨毛様腫ヲ生
 スルヲアリ就中絨毛様腫ヲ多シトス 此腫ハ通常膀胱ノ三角面ニ生
 シ乳嘴瘤様ノ組織ヲ有シテ血管ニ富ミ圓柱狀上皮ヲ以テ被ハレ甚々
 出血シ易シ 癌腫ハ子宮癌ノ蔓延ニ由ルヲアリ

徵候
鑑別

徵候 利尿困難ニシテ尿中ニ血液及ヒ磷酸鹽ヲ混出ス
 鑑別 此症ヲ鑑別セント欲セハ手指ヲ以テ尿道ヲ擴張シ瘤体ノ位置

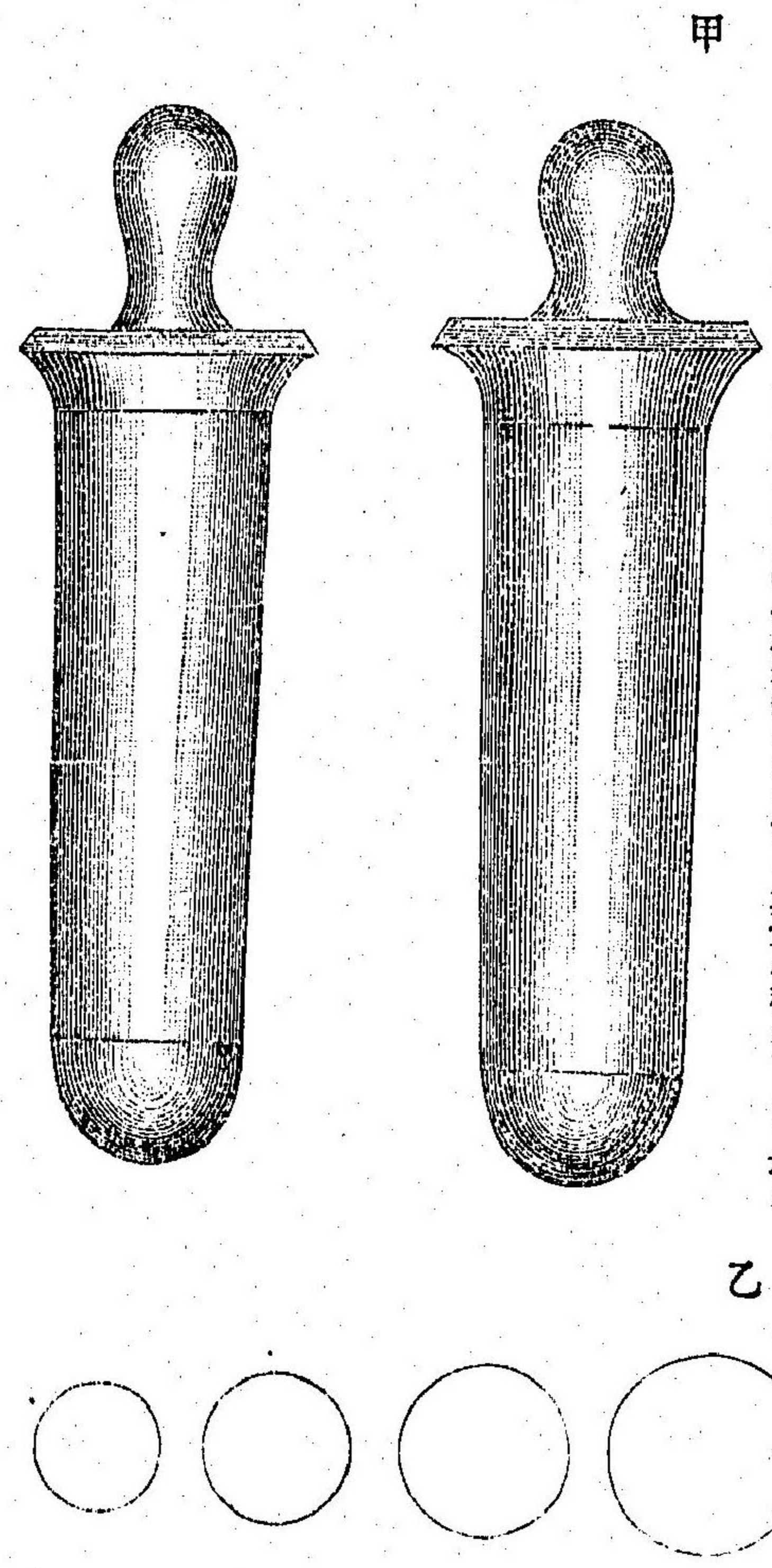
「シモン」氏尿
道鏡

形狀及ヒ其他ノ性狀ヲ診査スヘシ其法先ツ患者ヲシテ左側ヲ床ニ接
 シテ臥サシメ迷朦藥ヲ施シ術者ハ小指端ヲ尿道口ニ臨マシメ徐々ニ
 回旋シテ之ヲ尿道ニ挿入スヘシ通例尿道口ハ最モ擴張シ難キ者ナル
 ナ以テ間々少シク其縁ヲ放線狀ニ切開スヘキヲアリ既ニ小指ヲ挿入
 シ得ルニ至レハ患者ノ位置ヲ轉シテ仰臥セシムルヲ便ナリトス次テ
 更ニ示指ヲ挿入シテ膀胱ニ達セシメ注意シテ其内部ヲ探査スヘシ
 此法ハ暫時尿ノ失禁ヲ起スヲアレモ速ニ常態ニ復スルモノトス一説
 ニ據レハ尿道ヲ擴張シテ二、五センチメートルヲ超ユルニ非サレハ永
 久ノ尿失禁ヲ貽スヲ無シト云ヘリ 此診査ニ依テ鑑定シ得ヘキモノ
 ハ腎ニ癌腫ノミナラス他ノ狀況モ亦檢察スルヲ得ヘシ例之膀胱結石、
 膀胱粘膜ノ實況膀胱癭、膀胱癭、及ヒ輸尿管下部ノ結石等ノ如キ是
 ナリ

「シモン」氏ハ尿道ヲ擴張スルニ一種ノ尿道鏡ヲ賞用セリ蓋シ此器ハ專

第三十二圖

甲ハ「シモン」氏尿道鏡ニシテ乙ハ其大小種々アルヲ示ス



ラ尿道ヲ擴張シ結石及ヒ瘤腫ヲ抽出スルノ
 用ニ供ス然レモ永久ノ尿失禁ヲ貽シ易シ其
 構造ハ第三十二圖ニ示スカ如ク球形ノ栓ヲ
 有シ大小數等アリ初メハ小ナル者ヲ用ヒ擴

治法

張スルニ從テ次第ニ大ナル者ヲ用ユヘシ但シ球形ノ栓ハ全器ヲ挿入
 スル後抽出スルモノトス
 治法 瘤腫ノ位置性状及ヒ莖ノ有無ニ從テ同カラス或ハ鑷子ヲ以テ
 撮持捻轉シテ離斷スルヲアリ或ハ腔ノ前壁ヲ切開シ電氣燒斷器ヲ以
 テ離斷スルヲアリ

○膀胱炎

膀胱炎

原因

膀胱炎ニ二種アリ急性炎慢性炎是ナリ
 原因 淋毒、胃寒、外傷、分娩遲滯、異物、黴菌ノ侵入、近傍部膿瘍ノ破潰及ヒ
 尿ノ滯溜等ヲ以テ最モ緊要ナル原因トス

剖見

剖見 急性炎ニ在テハ粘膜ノ血管充張シテ赤色ヲ呈シ上皮ノ剝脱ヲ
 起ス慢性炎ニ在テハ充血甚シカラス粘膜ハ粗糙ト爲リ甚シキハ其炎
 ノ粘膜下組織、筋層及ヒ腹膜ニ蔓延スルヲ見ルヲアリ而シテ其筋層ニ
 及フ者ヲ組織間炎ト謂ヒ腹膜ニ及フ者ヲ外膜炎ト謂フ 時トシテハ

徵候

粘膜潰爛剝離シテ筋層ヲ裸露スルコトアリ又罕ニハ實弗的里性炎ヲ發スルコトアリ慢性炎ハ敗血症或ハ腎盂水腫ヲ併發スルコト往々之アリ

徵候 急性炎ノ徵候ハ尿意頻數ニシテ疼痛アリ尿ハ異重少ナク酸性ニシテ粘液ヲ混シ其色ハ著シク變セス手指ヲ以テ脛ノ前壁ヲ壓迫スレハ甚シキ疼痛アリ 慢性炎ニ在テモ亦尿意頻數ナレド疼痛ハ甚シカラス尿ハ異重少ナク溷濁シテ亞爾加里性ノ反應ヲ呈シ多少臭氣ヲ帶ヒ其中ニ粘膜ノ破片ヲ含ムコトアリ顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢スレハ膿球、上皮細胞、磷酸鹽ノ結晶体、黴菌等ヲ含ムヲ見ル又急性炎ニ於ルカ如ク脛ノ前壁ヲ壓迫スレハ多少疼痛アリ又手指ヲ膀胱ニ挿入シテ其内面ヲ檢スレハ粗糙ニシテ間々磷酸鹽ノ凝着スルヲ認知スルコトアリ

豫後 急慢兩症共ニ其醫治甚タ困難ナルコト多シ是レ膀胱ハ他器ト異ニシテ完全ノ安息ヲ得セシムルコト能ハサルニ由ル故ニ本病ヲ療スルニ方テハ豫メ其經過ノ緩慢ナルコトヲ察シ患者醫士共ニ能ク耐忍セサ

豫後

治法

ルハカラス殊ニ慢性炎ハ間々衰弱ヲ來シ或ハ敗血症ヲ發シテ危險ニ陥ルコトアルカ故ニ最モ注意スルヲ要ス

治法 膀胱炎ヲ療スルノ要旨ハ左ノ數欸ヲ出テス即チ(一)尿ノ變狀ヲ復シ(二)膀胱ノ刺衝ヲ減シ(三)反對刺衝法及ヒ下劑ヲ用テ膀胱ノ充血ヲ去リ(四)牛乳ヲ多量ニ飲用セシメテ腎臟ノ作用ヲ減シ(五)膀胱ヲ洗滌シテ之ヲ清潔ト爲シ(六)加底的兒ヲ挿入シ或ハ人工尿瘻ヲ造テ膀胱ノ作用ヲ減スヘシ

總テ急性炎ニ在テハ牛乳ヲ以テ尋常ノ食餌ニ代ヘ多量ノ亞爾加里泉即チカル、ス泉ノ如キヲ用ヒテ大便ノ通利ヲ促シ又多量ノ粘滑飲料ヲ與フルニ宜シ

藥劑ハ左方最モ効驗アリ

方

重炭酸加留謨

1.0

非沃斯丁幾 英國方

八〇

彌古浸

一〇〇〇

右一日三回ニ分服

疼痛甚シキ者ニハ夜中ニ莫兒比涅ノ坐藥ヲ用ユルニ宜シ又淋毒性膀胱炎ニハ拔爾撒謨油劑ヲ與ヘテ良効アリ

慢性炎ニ於テモ牛乳及ヒ多量ノ飲料ヲ與ヘ下劑ヲ用テ腸管ヲ疏通シ左方ヲ處スルニ宜シ

方

稀硝酸

三〇

非沃斯丁幾 英國方

八〇

彌古浸

一〇〇〇

右一日三回ニ分服

此方中ノ非沃斯丁幾ハ疼痛ヲ緩解シ稀硝酸ハ尿ノ亞爾加里性ヲ制滅

ス或ハ此酸ニ代フルニ安息酸安母尼亞ヲ以テスルコトアリ是レ其体中ニ入ルノ後馬尿酸ニ化シテ亞爾加里尿ヲ治スルノ効アレハナリ

方

安息酸安母尼亞

三〇

水

五〇〇

右一日三回ニ分服

以上ノ方法ヲ施スモ効ナキハ硼酸水或ハ石炭酸水ヲ以テ膀胱ヲ洗滌スルヲ可トス或ハ常ニ加底的兒ヲ挿置シテ尿ヲ流出セシムヘシ是レ尿ノ滯溜ヲ防キ且ツ膀胱ヲ安息セシムルヲ以テ大ニ治癒ヲ促スノ効アリ 又極テ頑固ナル症ニハ人工膀胱瘻ヲ造クルコトアリ是亦膀胱ヲ安息セシメ兼テ十分其中ヲ洗滌スルニ便ナラシメンカ爲メナリ 其法先ツ患者ニ迷嚨藥ヲ施シ截石位置ニ在ラシメシムス氏子宮鏡ヲ以テ膻ヲ擴張シ次ニバグエリン氏燒灼器ヲ用テ膻前壁ノ中線ヲ穿通

人工膀胱瘻ヲ造ル法

シ以テ膀胱ニ達スルニ在リ或ハ前器ニ代フルニ剪刀ヲ以テスルヲアリ即チ先ツ手指ヲ膀胱ニ挿入シテ之ヲ導子トシ直剪刀ヲ用テ腔ノ前壁ヲ割開スヘシ但シ剪刀ヲ以テスルハ其創口甚タ癒閉シ易キカ故ニ久シク瘻孔ヲ存セシメント欲セハ燒灼器ヲ用ユルヲ利アリトス而シテ斯ノ如キ人工瘻ハ本病治スルノ後成形術ヲ以テ之ヲ復故セシムヘシ

○膀胱異物及結石

膀胱異物及結石

腎臟ヨリ來ルヘキ者
膀胱接近部ヨリ來ルヘキ者

婦人膀胱内ノ異物ハ三源ヨリ來ル即チ腎臟膀胱接近部及ヒ尿道是ナリ
(一)腎臟ヨリ來ルヘキ者ハ結石、血液、膿汁、尿管及ヒ寄生物是ナリ就中結石ヲ以テ尤モ緊要ナル者トス
(二)膀胱接近部ヨリ來ルヘキ者ハ其類勘カラス例之骨盤膿瘍ヨリ膿汁、尿管ヨリ腸石、子宮外妊娠ヨリ毛髮齒牙、骨片等腔ヨリ「ベサリ」蜂窠織

尿道ヨリ入ルヘキ者

ヨリ寄生物ノ轉入スルカ如シ
(三)尿道ヨリ入ルヘキ者ハ其品類一定セス或ハ患者自ラ挿入シ或ハ他人ノ爲ニ挿入セラル、トアリ

凡ソ婦人ハ男子ニ比スルニ膀胱結石ニ罹ルト甚タ少シ蓋シ尿道ノ短ク且ツ彎曲セサルカ故ニ假令結石ヲ生スルモ自ラ排出セラル、ト多キニ因ル然レモ間々膀胱内或ハ尿道中ニ結石ヲ存シ之ヲ抽出ヲ要スルトアリ

徵候

徵候 尿意頻數ニシテ疼痛アリ尿ハ性状ヲ變シテ血液ヲ混スルト多シ腔ヨリ檢査スレハ大抵之ヲ確定シ得ヘシト雖モ若シ疑似決シ難キハハ消息子或ハ手指ヲ膀胱内ニ挿入シテ之ヲ鑑別ヲ爲スヘシ

治法

治法 先ツ異物殊ニ結石ノ大小ヲ豫察スルヲ要ス通例其横徑二、五センチメートル以内ナレハ尿道ヲ擴張シテ之ヲ抽出スヘク二、五センチメートル以上ナレハ之ヲ碎破シテ抽出スヘシ若シ甚タ巨大ニシテ且

シ堅硬ナレハ臍ノ前壁ヲ切開シテ之ヲ抽出シ術後直ニ創口ヲ縫合ス
ヘシ其他ノ異物ハ大抵尿道ヲ擴張シ適宜ノ鑷子ヲ以テ撮住抽出スル
ヲ得ヘケレモ其物若シ巨大ナルルハ臍壁ヲ切開シテ之ヲ抽出スル
巨大ナル結石ニ於ルカ如クスヘシ

○膀胱過敏

膀胱ノ器質ニ疾患ナク違常ノ感覺アリテ尿意極テ頻數トナル者之ヲ
膀胱過敏ト謂フ是レ或ハ神經ノ變常ニ因リ或ハ尿ノ酸性ニ過グルニ
因ル甲ニハ麻醉藥ヲ與ヘ乙ニハ炭酸利丟謨及ヒ亞爾加里劑ヲ用テ効
アリ

○遺尿

遺尿ハ少女ニ多ク成長セル婦モ亦分娩後ニ之ヲ發スルコトアリ而シテ
少女ノ遺尿ハ外陰部ノ炎症或ハ腸虫ニ起因スルコト多シ注意シテ診査
セサルヘカラス

膀胱過敏

遺尿

治法

治法 外陰部ニ炎症アレハ之ヲ治療シ腸虫アレハ之ヲ驅除スヘシ若
シ確著ノ原因ナケレハ別刺致那劑ヲ内服セシムルニ宜シ又腺病家ニ
ハ肝油沃度鏡等ノ服用ヲ怠ルベカラス

○尿閉

尿閉

婦人ノ尿閉ハ其原因ニ從テ三種ニ區別ス曰ク喜斯的里性曰ク反射性
曰ク器械的是ナリ

喜斯的里性
尿閉

(一)喜斯的里性尿閉 神經家ハ較著ノ原因ナクシテ頓ニ尿閉ヲ發スル
コトアリ或ハ自ラ加底的兒ノ挿入ヲ熱望シテ尿ヲ排出セス或ハ本症ヲ
詐偽スルコトアリ

反射性尿閉

(二)反射性尿閉 尿道諸病腫癌腫子宮頸挫傷會陰挫傷及ヒ痔核結紮ニ
因テ發スル尿閉ハ皆反射性ニ屬ス

器械的尿閉

(三)器械的尿閉 子宮癌腫子宮後轉卵巢水腫等ハ動モスレハ膀胱或ハ
尿道ニ器械的壓迫ヲ致スニ由テ尿閉ヲ來スコトアリ

治法

總テ尿閉ノ患者ハ膀胱膨脹シテ下腹部ニ著大ナル瘤腫ヲ生ス此瘤腫ハ中線ニ位シテ橢圓形ヲ呈シ其面平滑ニシテ波動ヲ有ス故ニ少シク注意シテ診査スルハ他症ト誤認スルコトナカルヘシ但シ時トシテハ尿閉ノ爲ニ膀胱甚シク緊張シ毎日數回少許ノ尿ヲ漏出スルコトアリ此ノ如キ者ニ在テハ膀胱ニ注意スルコトヲ忘ルコトナキニアラス

治法 喜斯的里性尿閉ニハ先ツ温湯坐浴ヲ命シ次テ冷水坐浴ニ轉セシメ効ナキ者ニハ加底的兒ヲ挿入スヘシ 反射性尿閉ニシテ瘤腫ニ起因スル者ノ外ハ温坐浴温毯布或ハ蒸湯法ヲ施スヲ可トス而シテ尙ホ排尿セサレハ始テ加底的兒ヲ使用シ次テ其原病ヲ治スルコトヲ勉メサルヘカラス 器械的尿閉ハ直ニ加底的兒ヲ用テ排尿セシムルヲ要ス

○尿瘻

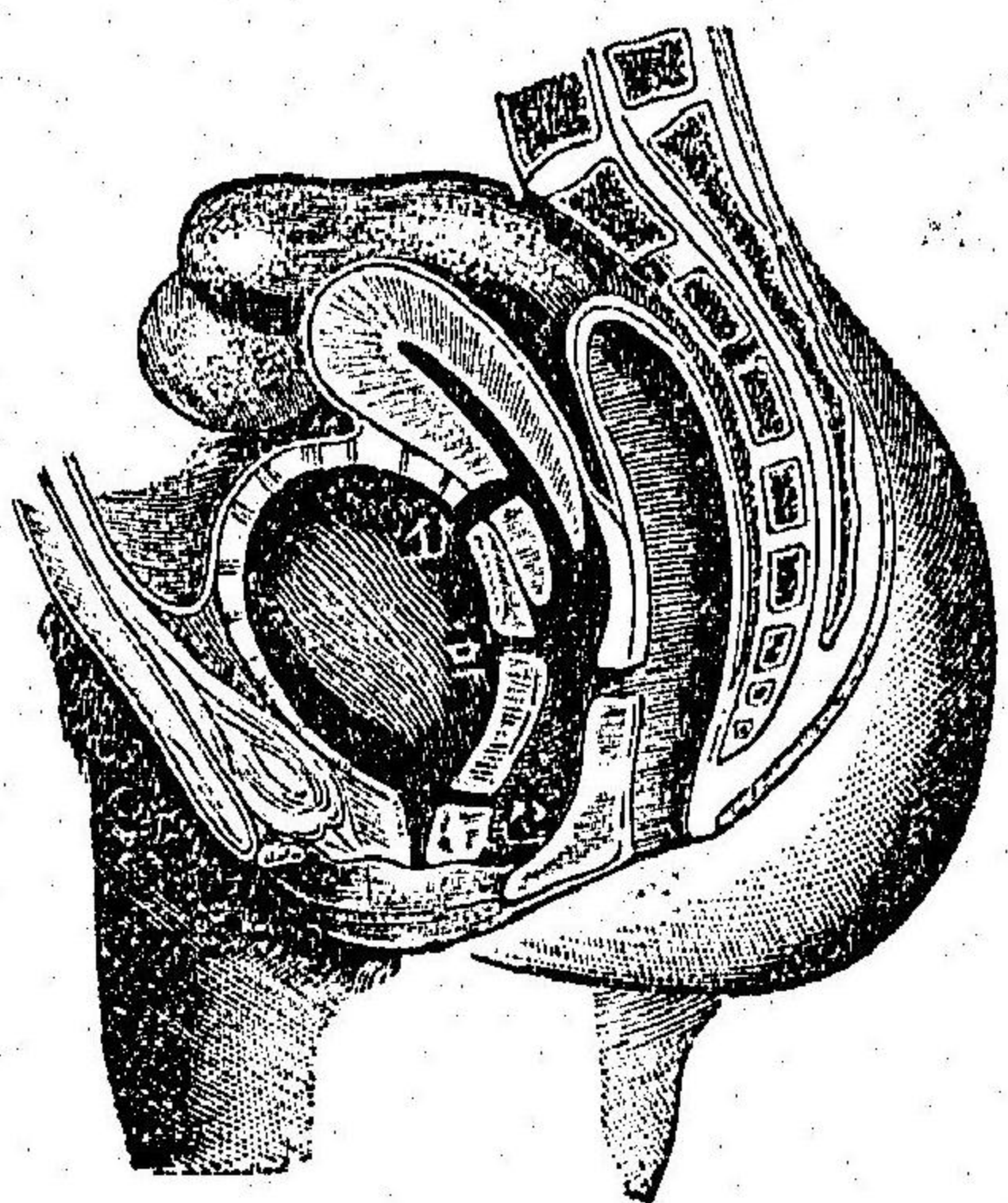
尿器ト生殖器トノ間ニ存スル中隔ハ處々ニ於テ穿通シ以テ尿瘻ヲ來

スコトアリ今其位置ニ從テ區別スレハ左ノ五種トス

第三十三圖

尿瘻ノ主ナル者三種ヲ示ス

- イ 膀胱子宮瘻
- ロ 膀胱陰瘻
- ハ 尿道陰瘻



- (一)尿道腔瘻
- (二)膀胱腔瘻
- (三)膀胱子宮瘻
- (四)輸尿管腔瘻
- (五)輸尿管子宮瘻

(一)(二)(三)ノ三種ハ第三十三圖ニ示スカ如シ而ノ尿道腔瘻ハ小ニシテ中線ニ位シ通常膀胱腔瘻ト共ニ存ス膀胱子宮瘻ハ稀ニ見ル所ニシテ子宮頸ヲ擠開スルニ非サレハ之ヲ檢出スルヲ能ハス且ツ甚々小ナルヲ常トス輸尿管腔瘻ハ腔穹窿ニ位シ亦小ナル者ナリ輸尿管子宮瘻ノ如キハ最モ稀ニシテ從來之ヲ實驗セシ者數名ニ過キスト云フ

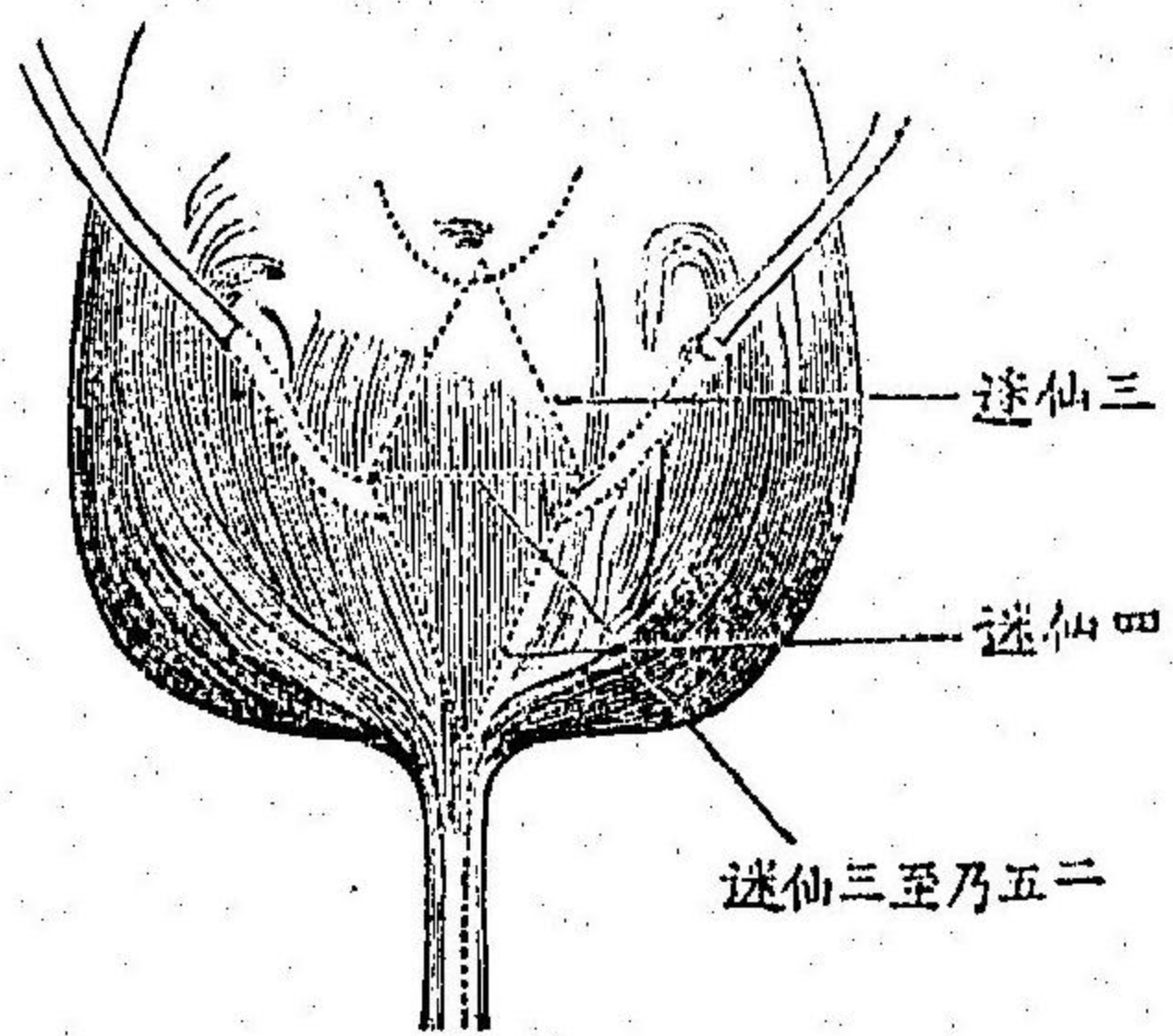
諸種ノ尿瘻中膀胱腔瘻ヲ最モ多シトス蓋シ此症ハ尿道ノ内口部ヨリ腔穹窿ニ至ルノ間ニ於テ何レノ部ニモ發スル者ニシテ大小數様アリ小ナル者ハ鍼孔ノ如ク大ナル者ハ橢圓形或ハ不齊方形ヲ有ス

總テ瘻孔ハ初メ大ナレハ漸次ニ縮小ス是レ瘻痕組織ノ收縮スルニ因ル瘻孔縁モ亦初メハ不齊ニシテ腫脹潰爛スレハ時日ヲ經ルニ從テ自ラ非薄鞏固トナルヲ常トス而シテ瘻孔ヨリ尿ノ自在ニ漏泄スル者ニ

第三十四圖

在テハ膀胱收縮シテ其壁肥厚シ若シ瘻孔ノ著大ナルハ膀胱粘膜ノ一部腔内ニ突出シテ鮮紅色ヲ呈スルヲアリ又輸尿管口、尿道及ヒ子宮頸ノ關係ハ第三十四圖ニ示スカ如シ故ニ瘻孔ノ大ナル者及ヒ其一側ニ偏スル者ハ輸尿管ヲ侵スヲ往々之アリ又時

子宮頸輸尿管口及ヒ尿道ノ體上關係ヲ示ス
子宮頸ヨリ輸尿管口マテ三「センチメートル」
輸尿管口ヨリ尿道口マテ四「センチメートル」
一側ノ輸尿管口ヨリ他側ノ同口マテ二、五乃至三「センチメートル」
輸尿管ノ斜ニ膀胱壁ヲ下内方へ通過スル間ハ一、五乃至二「センチメートル」

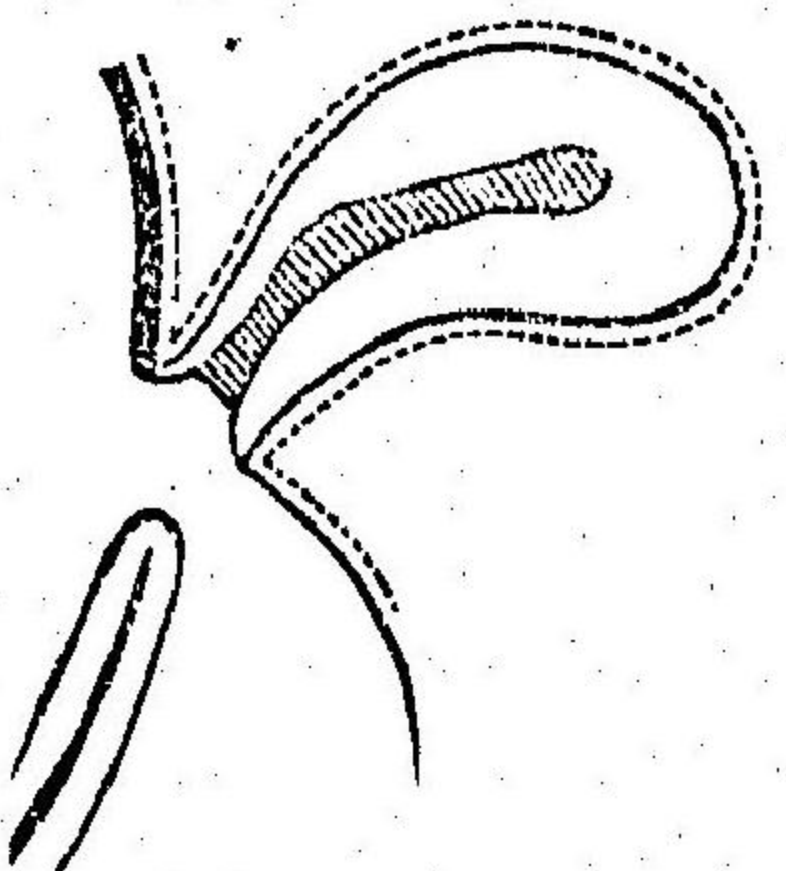


トシテハ瘻孔ヨリ露出セル膀胱粘膜上ニ於テ輸尿管口ヲ見ルコトアリ
但シ尿道ハ通例不用ニ屬スルヲ以テ或ハ縮小シ或ハ閉塞シテ大ニ治
療ヲ妨ケ加之時トシテハ其一部全ク消滅スルコトアリ

瘻ハ分娩時ノ創傷ニ因スル瘻痕ノ爲ニ縮閉セラレ、コトアリ時トシテ
ハ其瘻痕ニ由テ瘻孔縁廣ク排開シ或ハ骨盤ニ癒着スルコトアリ斯ノ如
キハ甚タ成形術ノ施行ヲ 第三十五圖

暗線ハ腹膜ニシテ子宮頸前壁ノ全部及ヒ其後壁
ノ下腔部ヲ破壞セル尿瘻トノ關係ヲ示ス

妨クルモノトス 又時ト
シテハ瘻孔ヨリ下部ハ腔
ノ收縮スルコト甚シキヲ以
テ其上部ノ景況ヲ査定シ
難キコトアリ 腹膜ト瘻孔
トノ關係ハ第三十五圖ニ
示スカ如シ故ニ瘻孔ノ甚



原因

タ大ナル者ノ外ハ施術ニ先テ熟考ヲ要スルコト少ナシトス但シ分娩ノ
爲ニ瘻孔ヲ生スル者ハ間々腹膜炎或ハ蜂窠織炎ヲ發スルカ爲ニ腹膜
自然ノ關係ヲ變スルコトアリ亦知ラサルヘカラス

原因 癌腫ハ尿瘻ノ常因トス然レモ之ニ起因セル者ハ固ヨリ治療ヲ
施スコト能ハサルヲ以テ措テ論セス 爰ニ記載スヘキ最要ノ者ハ分娩
時ニ受クル損傷是ナリ即チ兒頭ノ爲ニ軟部ノ直接ニ壓迫毀傷セラレ
ルニ因リ或ハ壓迫及ヒ發炎ノ爲ニ局部ノ壞死ヲ繼發スルニ因ル 斯
ノ如ク分娩時ニ瘻孔ヲ生スルヤ其原因或ハ胎兒ニ在ルコトアリ或ハ母
体ニ在ルコトアリ其胎兒ニ在ル者ハ顔面位置頭顱過大或ハ頭蓋硬固ニ
シテ壓縮シ難キ者はナリ其母体ニ在ル者ハ骨盤狹隘及ヒ腹壁懸垂是
ナリ 又産科手術ヲ施スニ當テ器械或ハ骨片ノ爲ニ軟部ヲ毀傷スル
コトアリ例之穿顱術中ニ器械或ハ頭蓋骨縁ヲ以テ腔壁ヲ損破スルコトア
ルカ如シ其他稀ニハ産後ニ發スル實弗的里性腔炎或ハ不適ノペサリ

徵候

「」ニ由テ炎症及ヒ潰瘍ヲ來スカ爲ニ發スルヲアリ
 徵候 腫ヨリ尿ノ漏出スルヲ以テ本病ノ固有症トス但シ分娩時ニ方
 リ直ニ軟部ノ破損ヲ起ス者ノ外ハ分娩後三四日ヲ經テ始テ本症ヲ發
 スルヲ常トス何トナレハ此時ニ至テ壞死セル組織漸ク離脱スレハナ
 リ若シ初メ腫炎ヲ發シ次テ破壞スル者ニ在テハ四五週ヲ經テ尿漏ヲ
 始ムルヲアリ分娩後直ニ尿ヲ漏出スル者ト雖モ二三日間之ヲ發見セ
 サルヲアリ是レ惡露ノ爲ニ陰蔽セラル、ニ因ル此症ニ於テ膀胱ノ尿
 ナ保持スル度ハ瘻孔ノ位置ト患者ノ姿勢トニ從テ同シカラス瘻孔若
 シ上部ニ在レハ起坐直立ノ際ニ於テ能ク尿ヲ膀胱ノ下部ニ溜溜スレ
 モ平臥ノ時ニ方テハ連綿トシテ流出ス又尿道腔瘻ニ在テハ充分尿ヲ
 膀胱内ニ溜溜スルヲ得レモ利尿時ニ方テハ必ス腔中ニ漏出ス
 尿瘻ニ伴フヘキ煩苦ノ狀況一ニシテ足ヲス通例臥具衣服ノ類ハ尿ノ
 爲ニ濡潤セラレテ特異ノ臭氣ヲ放チ患婦ハ精神抑鬱食思缺損シ外陰

尿瘻ニ伴フヘキ煩苦

部及ヒ股ノ内面ハ尿ノ刺衝ニ由テ充血赤爛シ月經ハ閉止スルヲ多ク
 且ツ屢々不妊ヲ致ス者ナリ又此症ニ罹ル者ハ頑固ノ便秘ヲ來シ易シ
 「フロインド」氏ハ之ヲ腎臟分泌ノ増加ニ歸スヘキモノト謂ヒ「ウインケ
 ル」氏ハ直腸筋纖維ノ反射的收縮ヲ起スニ因ルモノナラント謂ヘリ
 以上ノ諸症ト共ニ全身衰弱ヲ來シ憫ムヘキ慘況ニ陥ルヲ以テ患者切
 ニ手術ヲ希望シテ止マサルヲ多シ

鑑別

鑑別 外陰部ニ刺衝狀ヲ呈シ且ツ尿臭ヲ放ツルハ直ニ本病ヲ存スル
 ノ疑ヲ起スヘシ然レモ瘻孔ノ位置ヲ認定スルハ甚ダ困難ナルヲ多シ
 大ナル尿道腔瘻及ヒ膀胱腔瘻ニ在テハ手指ヲ以テ之ヲ觸知スルヲア
 リ或ハ尿道ヨリ加底的兒ヲ挿入スレハ瘻孔ニ現出スルヲ見ルヘシト
 雖モ通常子宮鏡ノ助ヲ藉テ瘻孔ノ位置及ヒ大小ヲ確定スルヲ要ス但
 シ小ナル瘻孔ハ粘膜皺襞ノ爲ニ掩蔽セラレテ之ヲ發見スルニ困難ヲ
 極ムルヲアリ然ルモハ鉤ヲ以テ其皺襞ヲ牽引伸張シ以テ孔口ノ所在

輸尿管子宮瘻

ヲ探索スヘシ
 小ナル膀胱腫瘍ト膀胱子宮瘻又ハ輸尿管腫瘍トノ鑑別ヲ爲スニハ先
 ツシムス氏子宮鏡ヲ挿入シ注意シテ腫ノ前壁ヲ淨拭シ子宮口ニハ綿
 花ヲ挿入シテ之ヲ閉住シ次ニ加底的兒ヲ尿道ニ挿入シ有色液即チ乳
 汁或ハ過滿俺酸加留膜ノ溶液ヲ膀胱ニ注入シテ之ヲ充脹セシムヘシ
 而シテ其液若シ腫ノ前壁ヨリ漏出セサレハ膀胱腫瘍ニ非サルヲ察ス
 ヘク又子宮口ニ挿入セシ綿花ヲ抽去シテ之ヲ檢スルニ注入液ノ爲ニ
 染色セルヲ認メハ則チ膀胱子宮瘻タルヲ知ルニ足ル 若シ以上ノ檢
 査ニ由テ膀胱腫瘍及ヒ膀胱子宮瘻ヲ存セサルヲ認メ得ルモ尙ホ子宮
 内ヨリ尿ノ漏出判然タル者ハ則チ輸尿管子宮瘻タルヲ知ルヘシ
 抑輸尿管子宮瘻ハ希有ノ一症ニシテ前述ノ如ク有色ノ液類ヲ膀胱内
 ニ注入スルモ子宮ヨリ漏出スルヲナシ何トナレハ輸尿管ノ下端ハ元
 來粘膜ノ瓣狀皺襞アリテ閉鎖シ以テ尿ノ輸尿管中ニ逆流スルヲ防ク

豫後

者ナルカ故ニ注入液モ亦子宮内ニ漏出セサルニ由ルナリ「ペラルド」氏
 ハ曾テ一患者ニ就テ尿道ヨリ漏出スル尿ト腫ヨリ漏出スル尿トヲ比
 較シ其量ノ同一ナリシヨリ輸尿管子宮瘻ノ診斷ヲ下セシ「ア」
即チ
ノ腎臓ヨリ來ル尿ハ膀胱ヨリシ思側ノ腎臓
ヨリ來ル尿ハ子宮ヨリ漏出セシニ因ルナリ
 豫後 新發ノ尿瘻ニシテ小ナル者ハ局處ノ淨潔ヲ嚴守スルニ由テ自
 癒スル「間々」之アリ然レ其大ナル者ハ必ス手術ヲ要ス而シテ其成
 績ノ良否ハ瘻孔ノ大小ニ關スル「ア」レ其緣ノ現狀ニ因ル「最」モ大
 ナリ即チ其緣ニ瘢痕組織ヲ存スル「過」多ナル者及ヒ癒着アル者ハ其
 成績常ニ不良ナルモノトス

治法

治法 新發ノ尿瘻即チ分娩後直ニ發見スル者ノ如キハ務テ自然ノ癒
 合機ヲ助クルヲ可トス即チ常ニ尿道ニ加底的兒ヲ挿入シ尿ヲシテ膀
 胱内ニ滯溜スル「ナ」カヲシメ兼テ時々温湯ヲ以テ腔内ヲ洗滌スヘシ
 或ハ腔内ニ適宜ノ墊子ヲ挿入シ以テ瘻緣ヲ近接セシムルノ法ヲ試ム

成形術

ル者アレハ大抵無功ニ屬シ或ハ却テ瘻縁ヲシテ哆開セシムルノ弊ナキニアラス

永久ノ瘻孔ヲ胎ス者ニハ必ス成形術ヲ施スヲ要ス 施術ノ時期ニ就テハ諸説未ダ一定セス或ハ分娩後六週乃至八週ニ施スヲ長トシ或ハ數月ヲ經テ行フヲ長トス要スルニ子宮ノ排泄既ニ止ミ瘻縁組織ノ炎症全ク去ルノ後之ヲ施スヲ可ナリトス

手術式ヲ分テ左ノ三項トス即チ準備、施術及ヒ術後處置是ナリ

準備

(一)準備 瘻痕組織ノ爲ニ瘻縁ノ牽引離開セラル、者或ハ腔壁ノ縮小スル者ニ在テハ手術ヲ施スニ先テ或ハ其組織ヲ切離シ或ハ護膜囊ヲ以テ腔ヲ擴張セシムルヲ要ス且ツ毎症必ス頻々腔内ヲ洗滌シ瘻縁ヲシテ善良ノ景況ヲ得セシムルヲ勉ムヘシ

施術

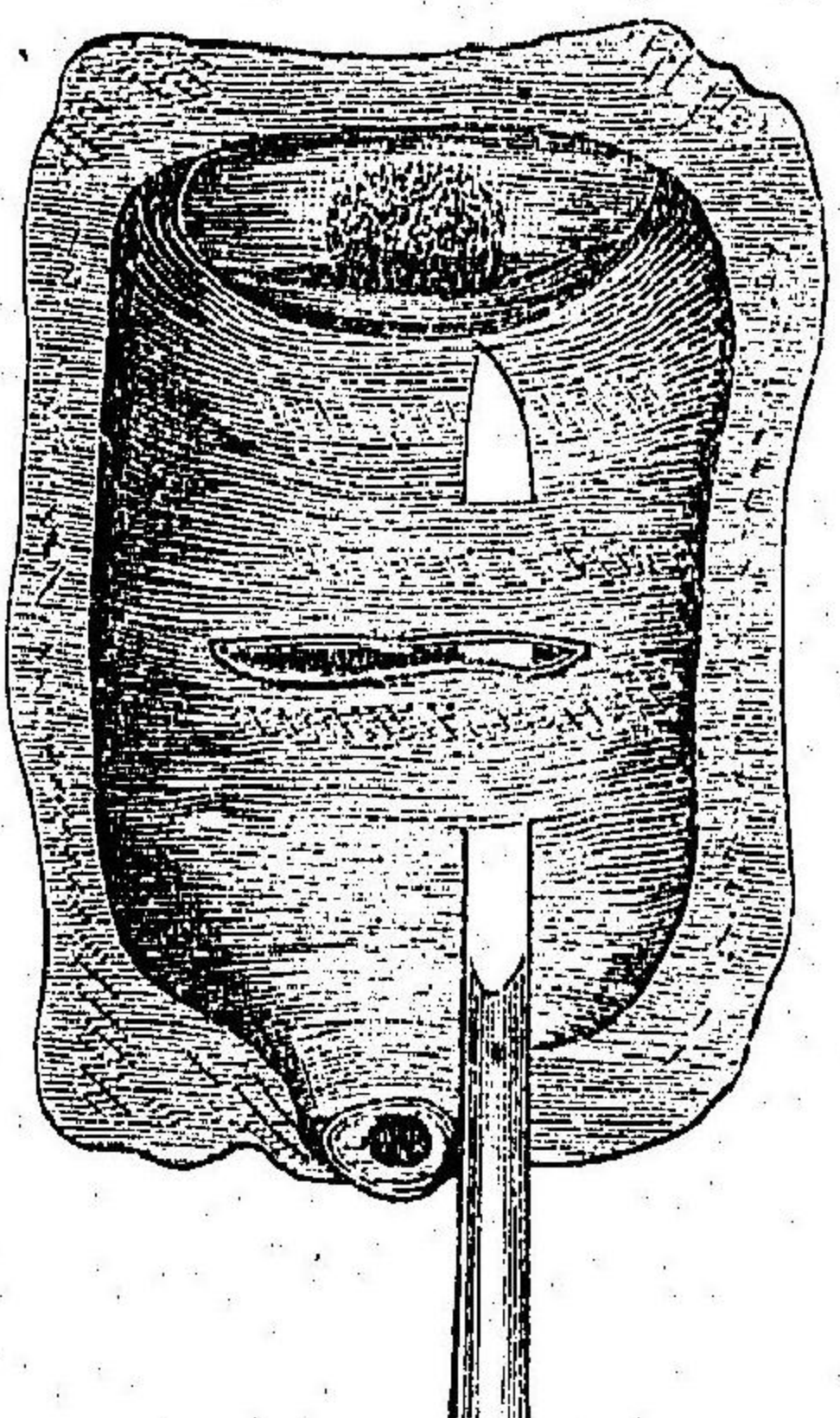
(二)施術 本術ヲ施スニハ左ノ器械ヲ要ス即チシムス氏子宮鏡、扁平鉤三四個ノ銳鉤、鈍鉤、灌注器、尋常鑷子、動脈鑷子、有柄曲刀及ヒ直刀、長剪刀、

欠

MISSING

乙

一頃ニ瘻口ノ兩縁ニ刀ヲ刺入スルヲ示ス



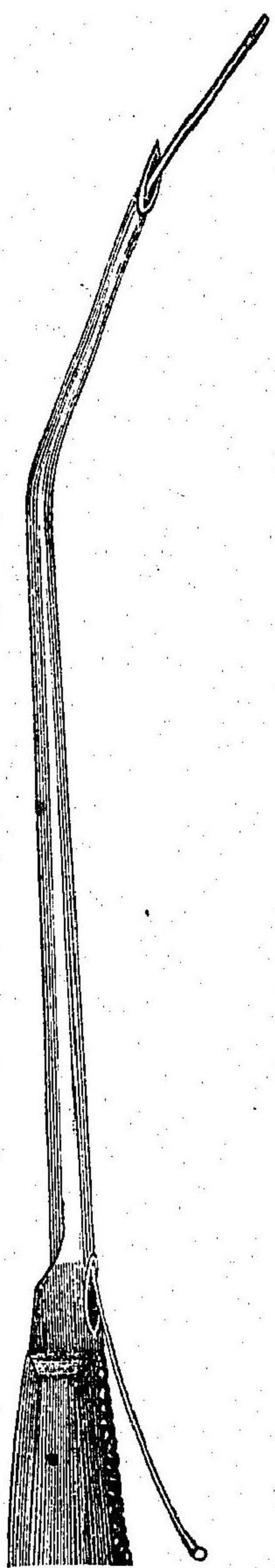
ニ在リ 先ツ鉤ヲ以テ切除スヘキ粘膜ヲ鉤住シ刀ヲ刺入スルヲ第三
十六圖ノ甲ニ於ルカ如クシ或ハ乙ニ示スカ如クスヘシ但シ刀尖ヲシ
テ膀胱粘膜ニ穿出セシムヘカラス若シ誤テ此膜ヲ毀損スルハ術後

縫合

膀胱内ニ出血ヲ來シ或ハ癒合ヲ妨クルノ不幸アリトス然レモ饒多ノ
 瘻痕組織ヲ存スル者ニ在テハ間々其大片ノ切除ヲ要スルコトアリ通例
 小ナル瘻孔ニ在テハ前記ノ方式ニ從テ輪狀ニ粘膜ヲ切除シ新創面ヲ
 造クルヲ得ヘシト雖モ若シ大ナルキハ剪刀ノ使用ヲ要スルコトアリ
 其他瘻縁ヨリ切入シテ膀胱粘膜ト腔粘膜トヲ分離シ以テ新創面ヲ造
 ルノ法アリ此法ハ組織ヲ切除セサルノ利アリトス
 斯ノ如ク適宜ニ新創面ヲ造リ了レハ腔内ニ温湯ヲ灌注シテ出血ヲ止
 ムヘシ時トシテハ尿管斷口ノ捻轉或ハ結紮ヲ要スルコトアリ
 縫合ハ最モ精密ナルヲ貴フ通常銀線ヲ用ユレモ間々絹絲ヲ用ユルコ
 トアリ總テ縫線ヲ穿通スルニハ或ハ有柄彎針或ハ尋常彎針ヲ用ヒ或
 ハ第三十七圖ニ示スカ如キ管狀針ヲ用フ 有柄彎針ヲ用ユルニハ先
 ツ之ヲ瘻孔ノ前後両縁ニ貫通シ次ニ縫線ヲ針眼ニ穿テ終ニ針ヲ抽出
 シテ縫線ノミヲ組織ニ殘留セシムヘシ尋常彎針ヲ用ユルニハ縫線ヲ

第三十七圖

「シムプソン」氏ノ管狀針ヲ示ス

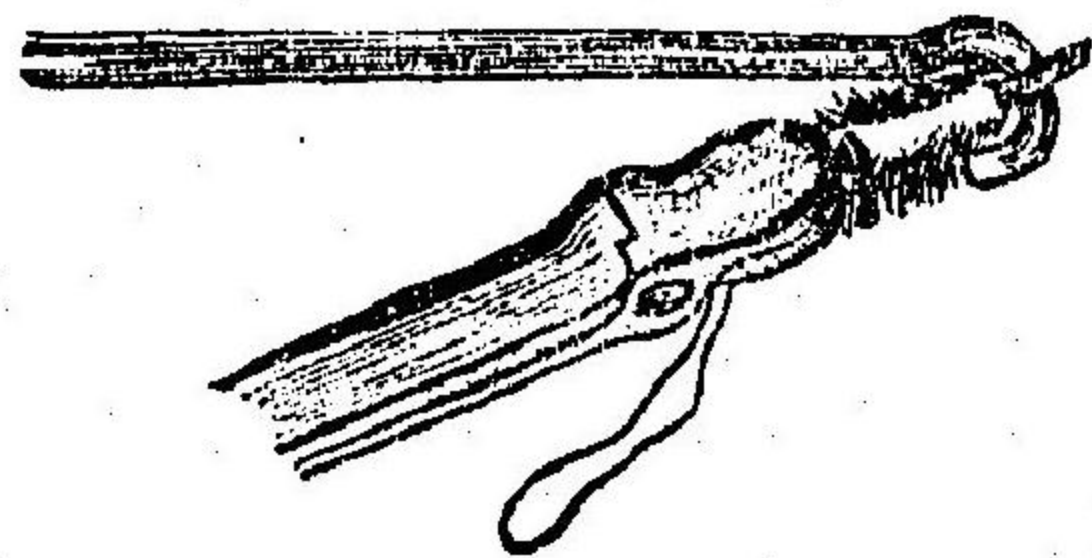


針眼ニ穿テ撮針器ヲ以テ針体ヲ固持シ次ニ針尖ヲ組織ニ刺入スヘシ
 管狀針ヲ用ユルニハ先ツ之ヲ瘻縁ニ貫通シ其内ニ合メル縫線ヲ進送
 シテ針端ニ露出セシメ次ニ錐子ヲ以テ線端ヲ撮持シ終ニ針ヲ拔去ス
 ヘシ

縫線間ノ距離ハ遠キニ過クヘカ
 ス又縫針ヲ膀胱粘膜ニ穿通スヘカ
 ラス又縫針出入ノ點ハ充分ニ創縁
 ナ距ラサルヘカラス若シ組織鞏固
 ナルハ針ヲ穿通スルニ方リ鈍鉤
 ナ以テ對壓ヲ施スヲ便ナリトス第
 三十八圖ニ示スカ如シ

第三十八圖

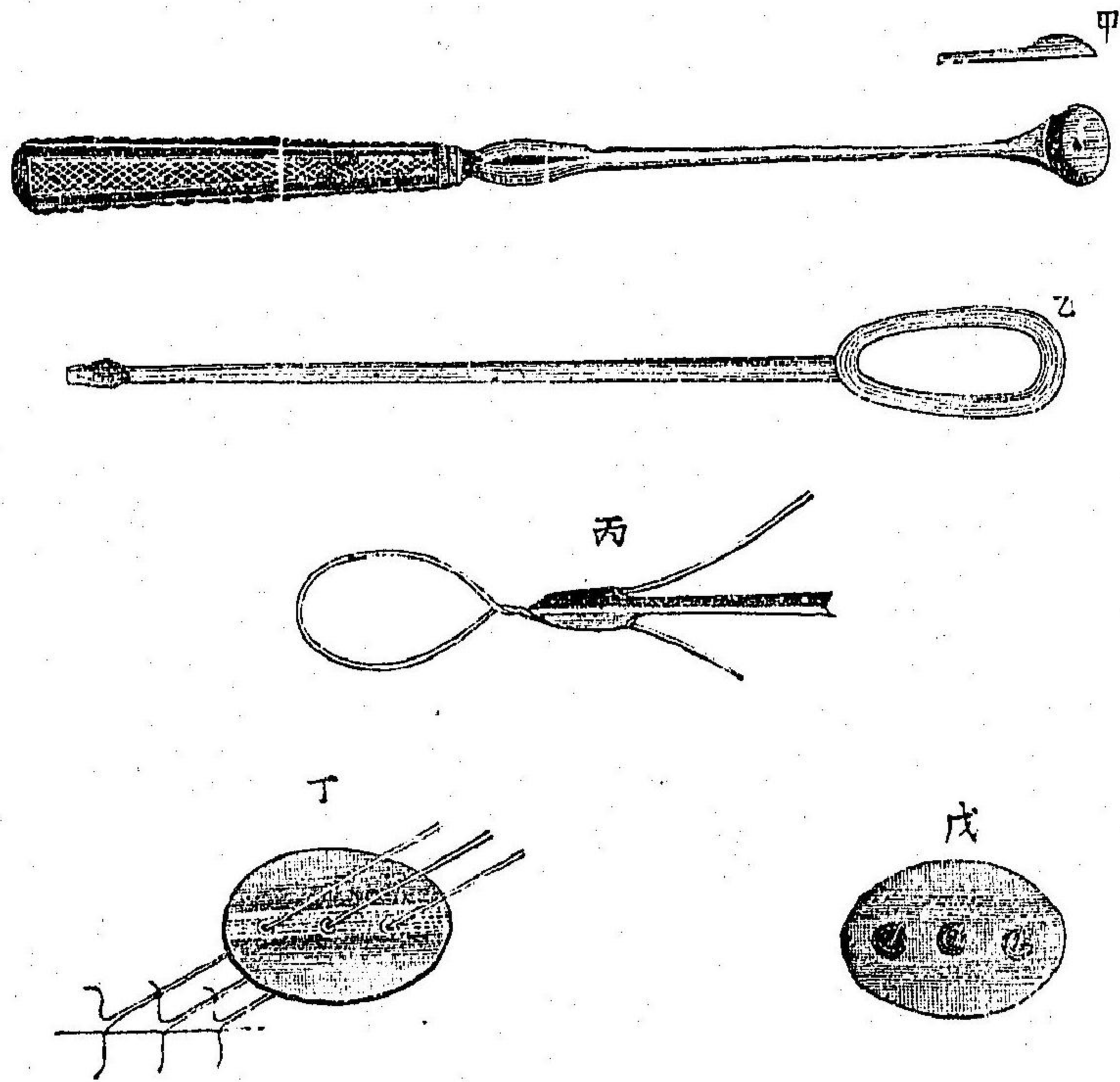
鈍鉤ヲ以テ對壓ヲ施ス法ヲ示ス



斯ノ如ク既ニ縫線數條ヲ穿通シ了レハ各線ノ兩端ヲ取リテ或ハ之ヲ
 結紮シ或ハ之ヲ捻轉シ以テ創縁ヲ密接セシムヘシ然リ而シテ之ヲ結
 紮シ或ハ之ヲ捻轉スルニハ「ボーゼマン」氏理線器第三十九圖「コグヒル」氏
 捻線器第三十九圖ヲ用ユルヲ要ス
 「ボーゼマン」氏ハ一個ノ鉛版ヲ取リ其中線ニ數孔ヲ穿テ之ニ各線ノ兩
 端ヲ通シ第三十九圖版ヲ瘻口ニ密接セシメ更ニ鉛球ヲ造リ中央ニ孔ヲ

第三十九圖

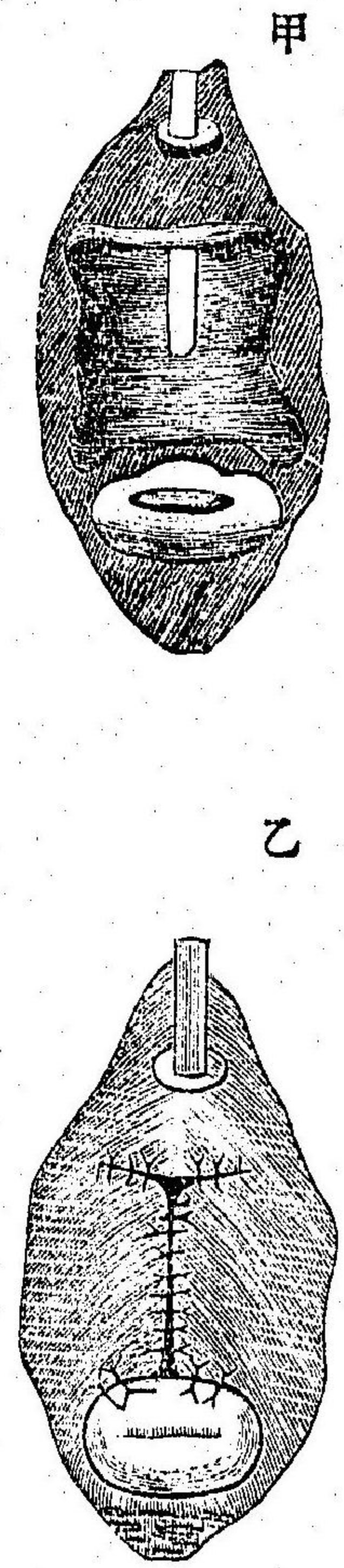
- 甲 「ボーゼマン」氏理線器ヲ示ス
- 乙 「コグヒル」氏捻線器ヲ示ス
- 丙 「コグヒル」氏捻線器ヲ以テ縫線ヲ捻轉スルヲ示ス
- 丁 「ボーゼマン」氏鉛版ニ縫線ヲ通スルヲ示ス
- 戊 「ボーゼマン」氏鉛版ニテ線ヲ固定スルヲ示ス



穿テ之ニ線端ヲ通シ鉛版ノ外面ニ密接セシメテ以テ線ヲ固定セリ
十九圖

瘻孔若シ三角形ナレハ縫合後Y字狀ヲ呈シ四角形ナレハI字ハ
スルヲ第四十圖ニ於ルカ如シ

第四十圖



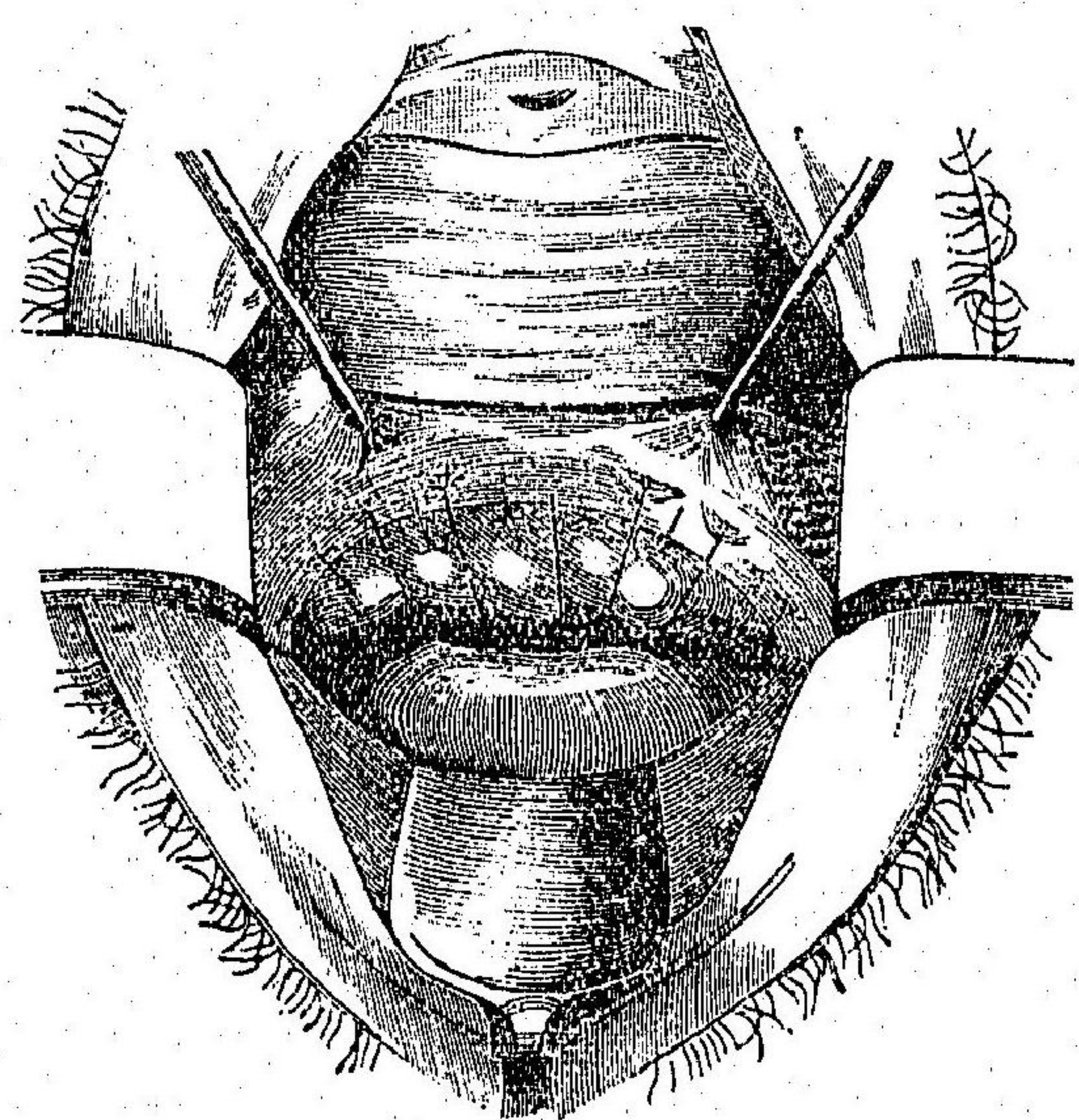
甲 四角形ノ瘻孔ヲ示ス

乙 四角形瘻孔縫合後ノ狀ヲ示ス

瘻孔若シ子宮頸ニ接シテ存スルハ子宮口ノ前唇ヲ以テ創縁ト爲ス
ハシ然ル者ニ在テハ其創口恰モ新月狀ヲ呈ス 第四十圖 時トシテハ子宮

第四十一圖

子宮口ノ前唇ヲ以テ創縁トナスヲ示ス



頸ヨリ粘膜ヲ剝離シ
テ新創ヲ造ルヲアリ
又前唇ノ缺亡セル者
ニ在テハ間々後唇ヲ
以テ瘻孔ヲ縫鎖スル
トアリ斯ノ如キ手術
ヲ要スル者ハ子宮ト
膀胱ト交通スルヲ以
テ尿道ヨリ月經ヲ排
泄スルヤ固ヨリ言ヲ
俟タス

膀胱子宮瘻ニ在テハ或ハ子宮頸ノ兩側ヲ切割シ瘻口ヲ露出シテ之ヲ
處置スヘク或ハ子宮口唇ノ粘膜ヲ剝離シテ之ヲ縫鎖シ以テ子宮ト膀胱

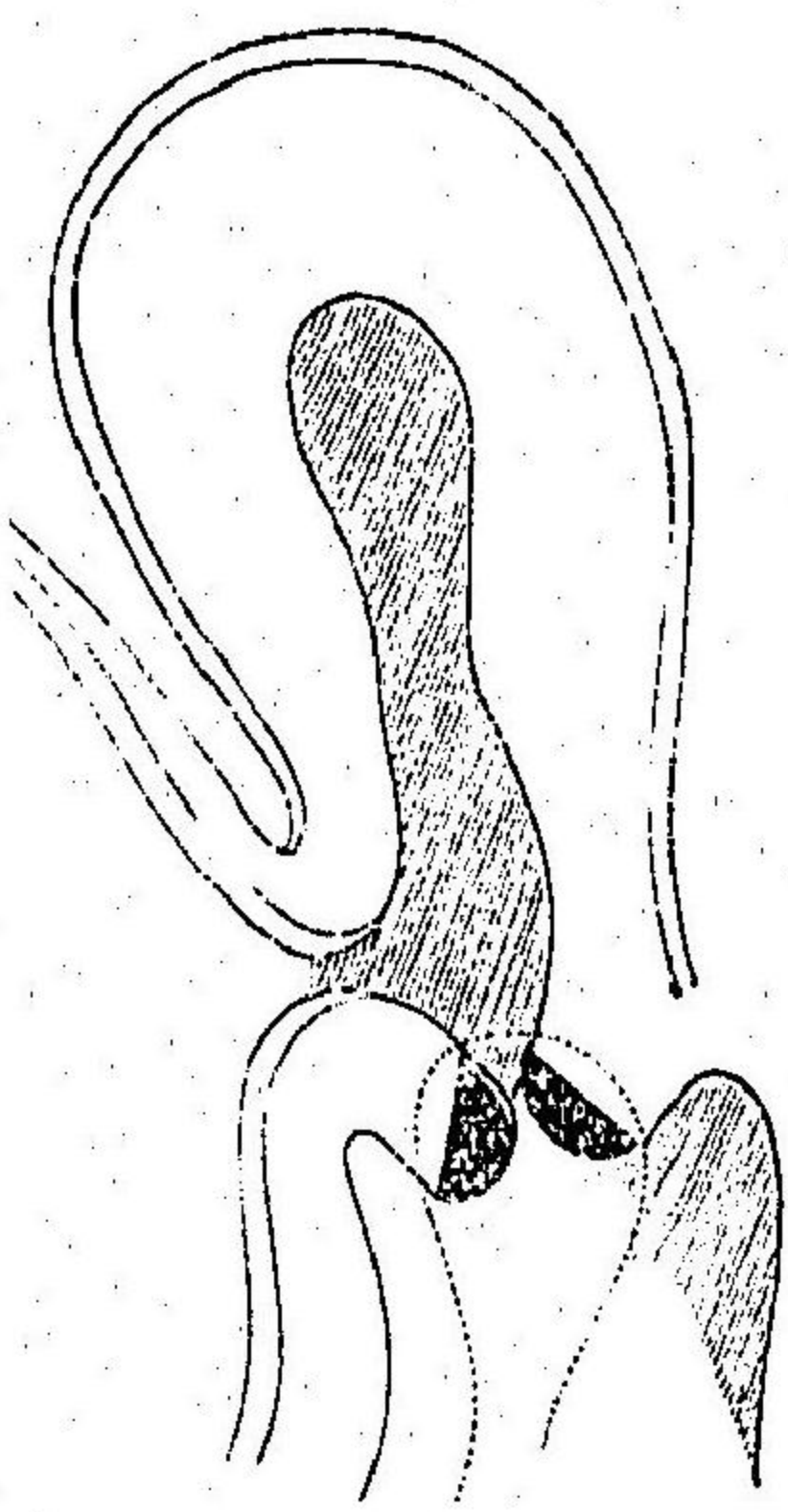
膀胱ト交通セシムヘシ第四十

二圖ニ示スカ如シ

尿道腫瘍ノ膀胱腫瘍ヲ兼ル者ニ於テハ先ツ甲ヲ治スヘシ若シ尿道ノ一部ニ缺損アルルハ

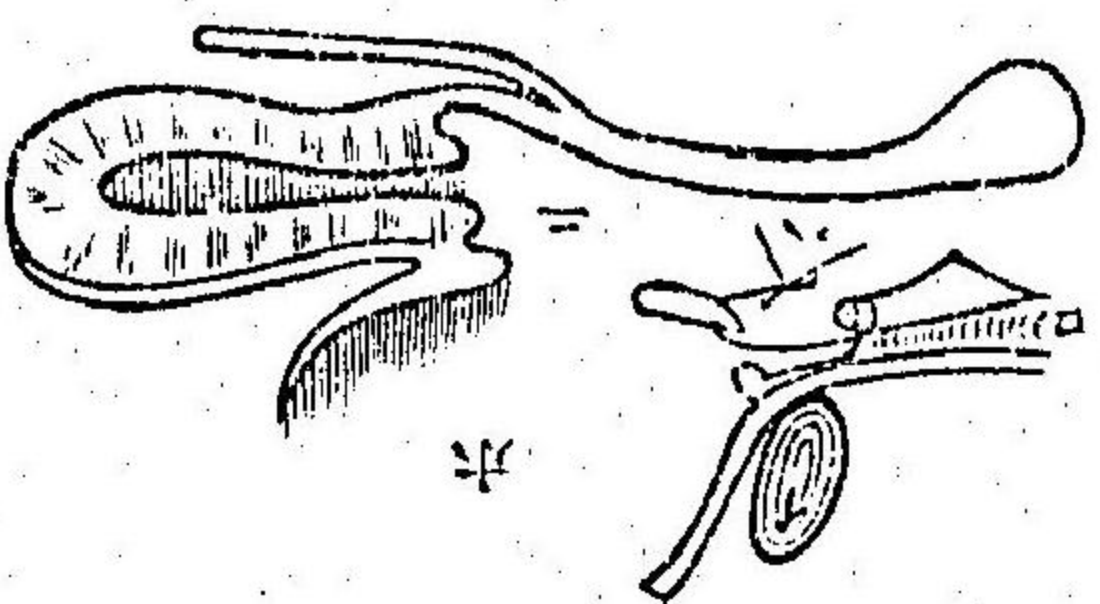
第四十二圖

子宮口唇ノ粘膜ヲ剝離シ頸管ヲ縮鎖スル法ヲ示ス



第四十三圖

膀胱腫瘍ニ尿道一部ノ缺損ヲ兼ル者ヲ示ス
イ 耻骨縫合
ロ 尿道
ハ 粘膜ヲ剝離縫接ス
ヘキ部
ニ 膀胱腫瘍
ホ 膀胱



其部ノ邊緣ニ於ル粘膜ヲ剝除シ之ヲ縫接シテ尿道ヲ造リ其癒ルヲ待テ膀胱腫瘍ヲ治スヘシ第四十三圖ヲ看ヨ
術後處置 術後ハ常ニ加底的兒ヲ尿道ニ挿置ノ尿ヲ導泄シ必ス膀胱

術後處置

内ニ滲溜セシムヘカラス通常第四十四圖ニ示スカ如キ加底的兒ヲ用ユルヲ便ナリトス

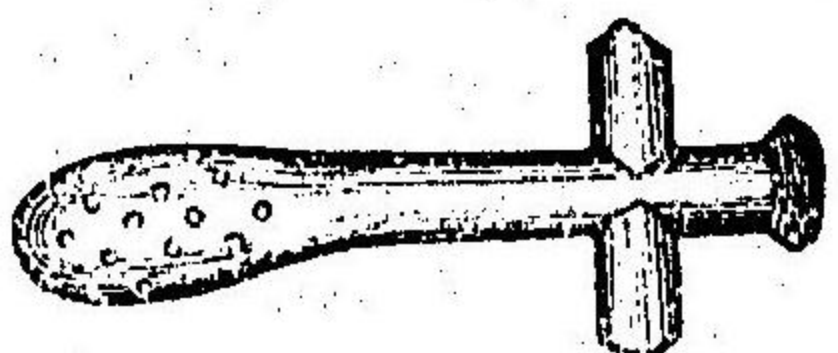
第四十四圖

「シムス」氏ノ固定加底的兒ヲ示ス



ル造テ以ヲ錫リ係ニ式舊ハ甲

乙



ル造テ以ヲ鐵硬リ係ニ式新ハ乙

膀胱出血及ヒ膀胱炎ハ術後ニ最モ發シ易キ者トス若シ出血多ク凝結シテ排泄シ難キルハ再ヒ創口ヲ開放スヘシ

時トシテハ縫合術ヲ施スニ方リ誤テ輸尿管ヲ紮住スルコトアリ若シ此失策アルルハ患者ヲシテ腰部ニ劇痛ヲ覺ヘ且ツ嘔吐等ヲ發セシムルモノトス然ルルハ速ニ縫線ヲ解放セサルヘカラス
縫線ハ術後十日ニシテ去ルヘシ若シ此期ニ至ルモ其癒合充分ナラサルヲ察セハ十四日間放置スルヲ可トス 此線ヲ拔去スル時ニ當テハ極テ注意ヲ加ヘ必ス強力ヲ用ヒテ牽引スヘカラス是レ創口ノ哆開ヲ

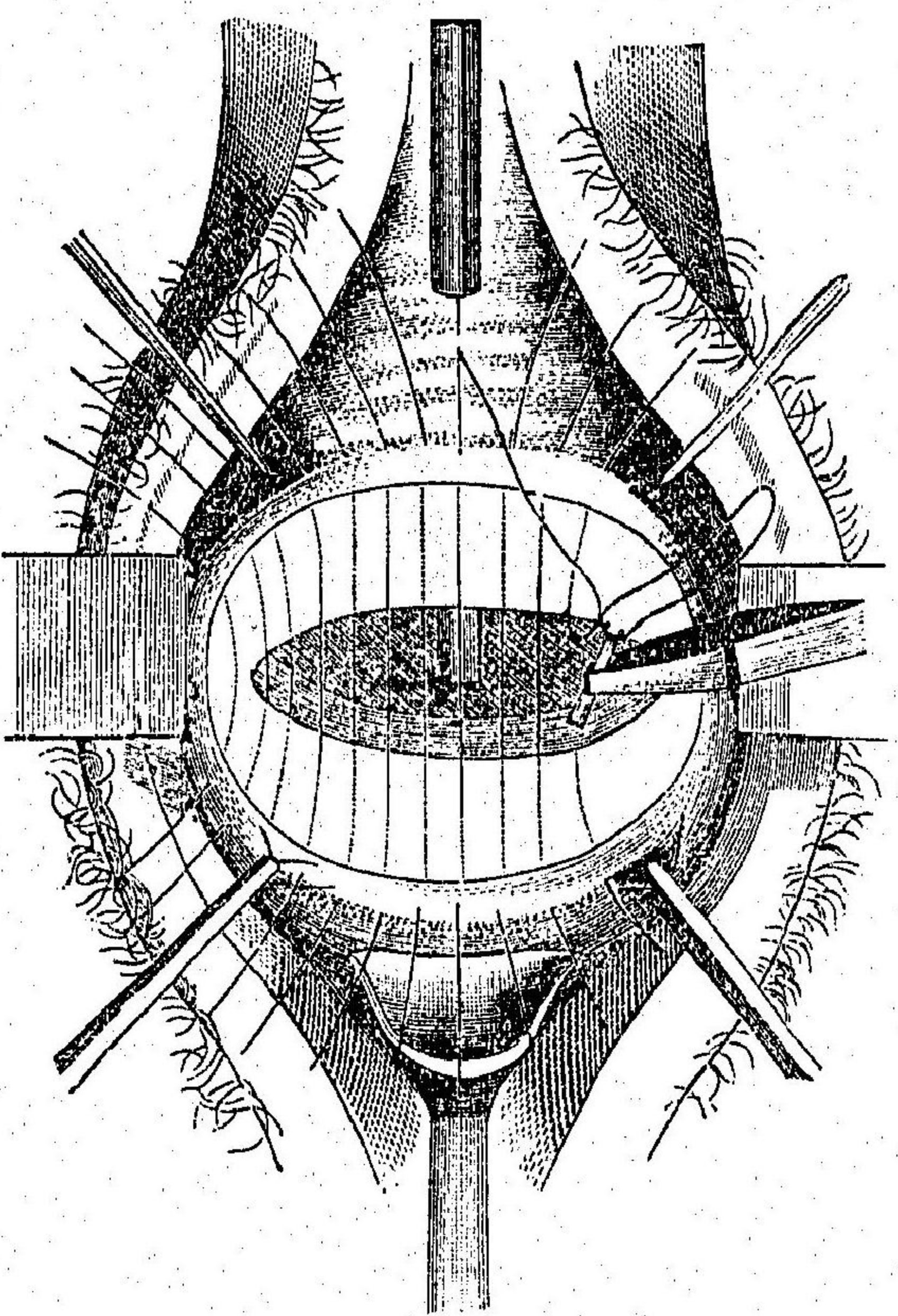
膻縫鎖術

來スヘキ虞アレハナリ
 膻縫鎖術 瘻孔ノ縫鎖シ難キ者ニ在テハ膻ヲ縫合シテ尿ノ漏泄ヲ防
 キ月經ヲシテ膀胱ヨリ排泄セシメ以テ患者ノ苦惱ヲ緩解スルコトアリ
 蓋シ此術ハ「グイダ」ル、デ、カツシス」氏ノ創定スル者ニシテ同氏ハ左右大
 陰唇ノ内面ヨリ粘膜ヲ剝除シテ新創面ヲ作り之ヲ縫合セリ然レ尿
 道口ノ直下ニ間隙ヲ貽シテ尿管ニ之ヨリ漏出シ手術ノ無功ニ屬スル
 コト多キヲ以テ「シモン」氏ハ膻口ノ内部ニ於テ粘膜ヲ剝離シ新創ヲ作テ
 之ヲ密接癒合セシムルノ法ヲ行ヘリ 術式ハ先ツ粘膜ノ最モ弛緩ナ
 ル部分ヲ選ヒ鑷子ヲ以テ之ヲ撮住シ刀ヲ以テ膻壁全圍ノ粘膜ヲ環狀
 ニ切割シ次ニ下方ヨリ上方ニ向テ之ヲ剝除シ以テ環狀ノ新創ヲ作ル
 ヘシ然ル後縫線數條ヲ取り各線ノ兩端ニ曲針ヲ裝付シ上方ヨリ下方
 ニ向テ創面上際ノ粘膜ニ刺入シ壁質ヲ通過シテ創面下際ノ粘膜ニ穿
 出セシムヘシ必ス針ヲシテ創面ニ露出セシムヘカラス既ニ適宜ノ縫

術式

第四十五圖

「シモン」氏膻縫鎖術ヲ示ス



線ヲ穿通セハ之ヲ結紮シテ以テ膻管ヲ密閉スヘシ 第四十五圖
 術後ハ尿ノ變敗澀分沈着子宮血腫等ノ患ナシトス

第五章 子宮ノ疾病

○子宮病總論

凡ソ子宮ノ疾病ヲ發スル時期ハ之ヲ分テ三トス曰ク發育期曰ク官能期曰ク老廢期是ナリ

發育期

(一)發育期ハ胎生時ヨリ婚期ニ至ルノ間ヲ謂フ此期ニ發スル疾患ハ發育異常ヲ最モ多シトス通常顯著ノ徵候ヲ呈セサレモ其變狀ヲ認知スルハ極テ緊要ナリ

官能期

(二)官能期ハ婚期ヨリ月經終止期ニ至ルノ間ヲ謂フ炎性病新生物及ヒ轉位症等ハ專ラ此期ニ發ス而シテ此等ノ諸患ハ各特種ノ徵候ヲ呈シ且ツ官能ヲ妨クル者ナリ又分娩ハ此期ニ限ルカ故ニ往々子宮頸部ノ挫傷ヲ來シ發病ニ緊要ナル關係ヲ有ス

老廢期

(三)老廢期ハ月經終止以後ノ時期ヲ謂フ此期ニ在テハ癌腫ヲ發スルト甚タ多シ

○子宮發育異常

子宮發育異常

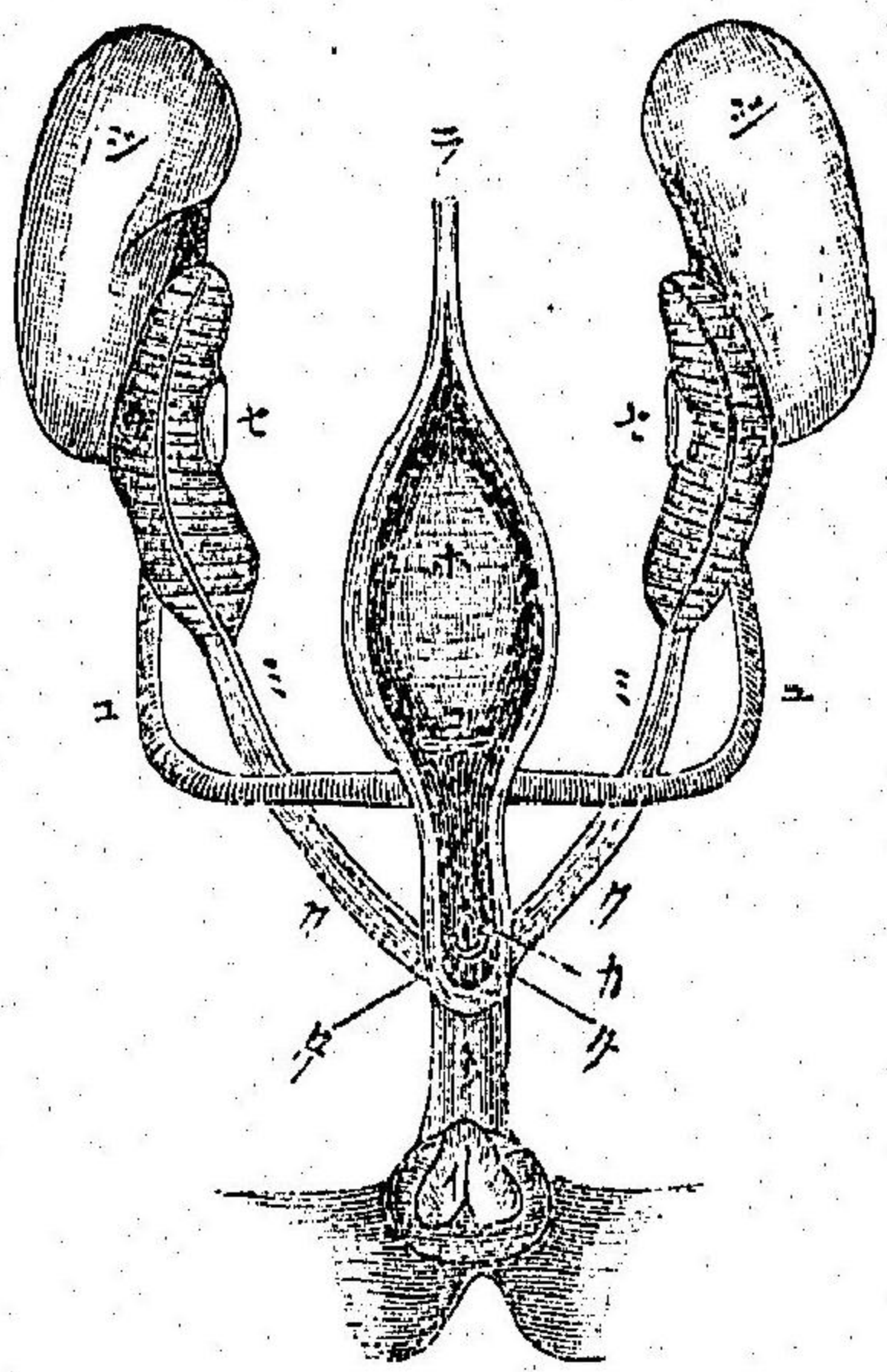
子宮ノ發育其常ヲ失フルハ種々ノ異常ヲ來ス即チ子宮ノ缺亡畸形幼稚子宮及ヒ頸管閉鎖是ナリ 斯ノ如ク異常ヲ來スノ理由ヲ了解セント欲セハ必ス先ツ内生殖器ノ發生スル方法ヲ知ラサルヘカラス左ニ其大畧ヲ述フ

内生殖器發生ノ方法

凡ソ胎生第四週ヨリ第五週ニ至ルノ際ニ在テハ脊柱ノ兩側ニ各一個ノ腺狀体ヲ生ス之ヲ「ウオルフ」氏体トス第四十六圖(ウ) 一條ノ排泄管ヲ有シ下行シテ膀胱ノ下部ニ通ス之ヲ「ウオルフ」氏管トス第四十六圖(ウ)「ウオルフ」氏体ノ内側ニ方テ更ニ一種ノ腺狀体アリ是レ則チ生殖腺第四十六圖(ニ)ニシテ後來男子ニ在テハ睪丸ニ化シ女子ニ在テハ卵巢ニ變スル者ナリ又「ウオルフ」氏体ノ前面ニ一條ノ管アリ之ヲ「ミュレル」氏管トス第四十六圖(ミ)此管ノ上部ハ喇叭管及ヒ剪線ニ化シ下部ハ左右相合シテ膀胱ノ下部ニ開口ス但シ左有「ウオルフ」氏管開口部ノ間ニ在リ而シテ初メハ兩管「ミュレル」氏管ノ間ニ中

内生殖器發生ノ方法ヲ示ス

シジ 腎臓
 ホ 膀胱
 ウウ 「ウォルフ」氏体
 ミミ 「ミュレル」氏管
 イ 生殖突起即チ陰核
 ラ 「ユラカス」
 クク 「ウォルフ」氏管
 セセ 生殖腺
 ニユ 輸尿管
 コ 輸尿管口
 カタタ 膀胱ノ下端
 ト 尿生殖管



隔アレハ漸次ニ消滅シテ遂ニ一管トナリ上部ハ子宮下部ハ膈ト成ル
 斯ノ如ク「ミュレル」氏管ハ膈子宮喇叭管及ヒ剪線ノ原基ナルヲ以テ

子宮缺亡

發育ニ違常アレハ自ラ子宮ノ缺亡或ハ畸形ヲ來スモノトス
 (一)子宮缺亡 此症ハ極テ罕ナリ只死体ヲ剖檢シテ之ヲ知ルコトアルノ
 ミ時トシテハ膀胱ノ後壁ニ一條ノ索狀体ヲ存シ平滑筋纖維及ヒ蜂窠
 織ヨリ成リテ輒チ子宮ノ痕跡タルヲ表スルコトアリ 以上ノ状態ニ在
 テハ月經ヲ見ス膈ハ盲端ニ終リ或ハ全ク闕如ス

子宮畸形
分岐子宮

子宮ノ存否ヲ檢スルニハ複診法ヲ行フヘシ即チ先ツ手指ヲ以テ膈及
 ヒ腹壁ヨリ檢シ次ニ膈及ヒ直腸ヨリ檢シ次ニ直腸及ヒ膀胱ヨリ檢ス
 ヘシ但シ膀胱ヨリ檢スルニハ「ブーシー」ノ類ヲ用ユヘシ時トシテハ尿
 道ヲ擴張シ手指ヲ挿入シテ檢スヘキコトアリ
 (二)子宮畸形 種々一ナラス左ニ之ヲ略記ス
 (イ)分岐子宮 子宮頸部ハ纖維索狀ヲ成シ其上部ハ兩端各子宮角ノ原
 跡ヲ存シテ或ハ管狀或ハ索狀ヲ呈シ下部ハ發育不全ノ膈ニ連ル但シ
 卵巢外生殖器及ヒ乳腺ハ完全ノ發育ヲ爲スコトアリ